
紅蓮の天狼

弥七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の天狼

【Nコード】

N5258M

【作者名】

弥七

【あらすじ】

平々凡々な毎日を過ごしていた雛沢紅は、ある日突然、異世界へと迷い込んでしまった。そこで出会った青年シリウスとともに王都を目指す冒険が始まった。

異世界の迷子と脱獄者のちぐはぐな二人組みの冒険ファンタジー。

第一話 平凡と宝石

それは何の変哲も無い平日の、ちょうど期末テストの終わった午後のことであつた。

「あゝ、やっと終つたね。ねえこれから街に遊びに行かない？」

「いいね、じゃあ一時にいつもの場所で」

テストという呪縛から開放された爽快感から、少しテンションも高めで、何が起きても楽しそうな気分だった。

だから雛沢紅ひなざわ こうは、親友の宮元香織みやもと かおりの誘いも快く了解した。

こうしてそれぞれの家に一旦帰るため、ひとまずのお別れをした。

待ち合わせ場所は駅前の広場である。駅前には、町の中心部的な役割を担っているわけだが、今は平日の午後。つまり人はまばらにしかいなかった。

その広場の中心部の時計がある柱の下で、紅は香織が来るのを待っていた。

「やっぱり早く着すぎちゃったかな……」

服も着替えずに、学校指定の制服のまま来た方がいいが、肝心の香織はまだ来そうに無い。それもそのはずまだ待ち合わせより十五分も早いのだ。

お互いに彼氏も居なければ、男子と積極的に関わろうともしないのでいつも二人で行動することが多い。

そのおかげなのか、紅はそれなりに良い容姿をしていると周りから言われるが、特に青春的、ラブコメ的な要素は皆無に近かった。

今日も化粧なんてものはせず、髪も後ろで適当に結っただけの感

じである。

（今日はどこに行こうかなー）

することも無いのでぼんやりと考え事をしていた。

初夏の陽気がとても気持ちがよく、お昼下がりには眠気も誘う風がそよそよと頬を撫でた。

そんな彼女を不意打ちのように、一つの衝撃が襲った。

それはまず、視覚的に紅の視界に飛び込んで来た。一人の人間、男か女かもわからない人間が蹲っている。しかもそれは頭から足先まで、真っ黒なローブのようなものを被っていた。

初夏といえども、決して寒いわけではない。ましてこの街中で、ローブなんてものを着て蹲っている人間を見た人は、それを『日常』とは捉えないだろう。

（な、なにこれ……）

紅は反射的に辺りを見回した。平日の午後といえども、人がまったく居ないわけではない。

彼女と同じように、テスト明けの学生もいれば、暇を持て余した大学生もいる。忙しそうに歩くサラリーマン。ちよっと買い物に出かけている主婦。公園の清掃員のようなおばさん。

みんな同じこの『場所』にいるのに、アレに見向きもしない。

むしろ、

（見えていないの……？　アレが？）

平凡な日常に浮かぶ一つの異常。

まるで真っ白なキャンバスに黒いシミを落したような、明らかな異常。

それを気づかない、見過ごしている。

そして、

（私だけに見えているの……？）

自分だけが外れたところにいるような、疎外感。
そしてこれ以上得体の知れないものに関わりたくない恐怖。

しかし、黒い、蹲っている人間が誰かに助けを求めるように呻きだした時、紅は不思議と恐怖が消えていた。後に残るは使命感。

困っている人を助ける使命感に駆られ、思わず声をかけていた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

紅の声に、黒い人間の動きがぴたりと止まった。

そして、顔を上げた。

その人は美しい女性だった。

西洋風の顔立ちは、不思議と整っていて淡いグリーンの瞳は見るものを落ち着かせる優しさがあつた。そして彼女は、真っ直ぐに紅を見据えていた。

「あ、大丈夫ですか？」

もう一度、紅が訪ねると、彼女は手を差し出した。

その手には真紅の宝石がはめられたペンダントが乗っていた。

宝石はおよそ二センチぐらいの大きさと、周りを囲うリングのよ
うな部分には、紅の見たことも無い文字が刻まれていた。

そして女性はおもむろに、そのペンダントを紅の首にかけた。

「えっ？」

戸惑う紅に女性は肩に手を載せて、紅の瞳を見据えた。

その目には、何故か謝っているようにも見えた。

途端、女性の足元、ローブの裾のほうが地面に沈みだした。

それは物理的に沈んでいるのではなく、まるで影に吸い込まれていくかのようだった。

「大変です！ 早く立ち上がりましょう！！」

紅は状況も理解できぬまま、ただ慌てていた。

その間にも、女性は吸い込まれ続け、やがて腰ぐらいまで沈んでしまった。

そこで紅はふと気づいた。

女性の手は肩に乗せられたまま、紅自身も影に吸い込まれ始めているということに。

「は、離れない！！」

肩に乗せた手も、地面で影と接している足も、どちらも動かすことも出来ない。

もがいている間にどんどん吸い込まれ、女性は完全に消え、紅は首まで吸い込まれた。

「誰か！！ 助けて！！」

その叫び声は誰にも届かなかった。誰にも気づかれない、誰も見向きもしなかった。

やがて、頭もすべて吸い込まれた。

暗い世界へと吸い込まれていく。

その女性は、謝っているようにも見えた。

第二話 森と青年

紅は目が覚めた。

そこは森の真ん中、見渡す限りの木々が広がる空間の中にぽつんと取り残されていた。ついさっきまで駅前の広場に居たはずだが、今は見たことも無い場所にいる。

辺りは木々の揺れる音や、鳥のさえずりなどが聞こえる。とても同じ世界とは思えないほどの大自然だった。

「えっと、どうしたんだっけ……」

ずいぶん長い間気を失っていたのか、体があちこち痛む。それでも立ち上がり考える。あの女性は一体どこへ行ったのだろうか。

「とにかく、人を捜さない……」

こんな状況に置かれてもなお、冷静さを失わない自分に少し驚いていたが、これといって脅威が無いため当然なのかもしれない。それでも今日中に家に帰られるか定かではないが。

とりあえず森を歩くことにした。森は誰も踏み入れてないようで土もふかふかしていた。しかし、何の人の手も加えられていない森は、まるで行く手を阻んでいるかのように、紅の歩きを妨げた。

しばらく歩くと、人が通ったような獣道にぶつかった。紅は森を早く出たかったので、獣道に沿って歩くことにした。

その直後、一枚岩を切り崩して出来たような崖に穴が開いていた。そして獣道はその洞窟へとつながっていた。

「入ってみたほうが良いのかな……」

中は光が差し込んでいるのか少し明るかった。人が何度も通っているようで道もしっかり出来ていた。

恐る恐る奥へ進むと、急に何かにつまずき転んでしまった。

「イタッ、なにー?」

起き上がって確認する前に声が返って来た。

「誰だ!!」

見れば、薄汚れた青年が、腕を鎖でつながれ寝かされていた。

頬がこけ、服は泥がつき、髪はボサボサ。まるで野良犬のような
雰囲気を出す青年は、見た感じ紅と同じくらいの年齢に見える。

「ど、どうしてこんなところで寝ているの!?!」

「寝てるんじゃない、捕まってるんだ」

吼えるように言った彼の言葉通り、鎖でつながれている。

「どうして捕まっているの……?」

聞き返した紅の言葉に、深く考えてから彼は言った。

「……悪い奴らに騙された、俺はしばらくしたら殺されて内蔵を売
り飛ばされる……頼む、助けてくれ」

そういつて腕の鎖をジャラジャラ鳴らした。

正直に信じがたいが、かといってこのまま見捨てるわけにもい
かない。

おろおろ戸惑っていた紅に、青年が加えていった。

「その窪みに鍵が置いてあるはずだ、それで開けてくれ」

「どうして知ってるの?」

確かに、ジメジメした洞窟の窪みには鍵が置いてあった。

鍵を取り、不信そうな紅に青年はいい訳を言う。

「食事とトイレの時は外に出されるんだ。こんなかだと臭いが充満
して見張りの奴らも嫌がるからな」

「見張るが居るの!?!」

「今は居ない、早く! 帰ってくるかもしれない、そしたらお前も
捕まるぞ!」

その言葉にダメ押しされ、渋々紅は鍵をあけ、青年を解放した。

腕をさすりながら、青年は立ち上がった。身長はさほど紅と変わらない、男にしては結構低めだろう。しかし、体はしっかりと鍛えられていて、ボロボロになったインナーでも筋肉が浮き出ている。

「さあ、もたもたすんな」

紅の腕を掴んで素早く走り出した。

腕を引かれ、紅も洞窟を出た。ほんの数分間しか洞窟内に居なかったが、外の太陽がまぶしかった。

「チッ……遅かったか」

青年が舌打ちをして見回した。そこには狩猟銃を構えた山賊のような男達が三人ほど居た。おそらく彼らが見張りなのだろう。

男達はこっちに気が付き、怒号を上げ銃を構えた。

「ちよつと頭低くしてろ!!」

「え!?! あ、」

その直後、青年は頭を低くしながら男達に飛び掛った。その速さに男達は反応が一步遅れ、その隙に青年は男達のうちの一人の腕をねじり、盾のように構える。

一步遅れて、狩猟銃が発砲された。しかし、弾丸は青年には当たらず、盾にされた男の肩に直撃した。

「おら! 返すぜ!!」

男を投げつける。それにより、もう一人を巻き込んで倒れこむ。

「ほら、逃げろ!!」

紅に向かって叫んだ。大人しく紅も従い、一旦洞窟の方へ隠れる。

男達は紅より青年の方が重要らしく、追ってこなかった。

その直後、青年は上に跳躍し、ひとつ飛びで幹の上に着地し、木の枝の間を駆ける。

「上だ!!」

男の一人が叫びつつ狩猟銃を発砲した。

しかし、青年に当たった気配はない。

一瞬、音が静まった。下からでは青年の位置が解らない。だが、ある木の枝からガサツという音がした。

「こっちか!!」

直後、集中砲火が浴びせられる。とともに枝から何かがドサリと落ちてきた。

「チッ、サルか！」

「こっちだ。ウスノロ」

背後から降りてきた青年の拳が脳天に直撃した。男はフラフラと崩れ落ちた。

その背後から、もう一人が襲い掛かるが、後ろ回し蹴りが、首に直撃し、こちらにも崩れ落ちた。

「ふん、雑魚め。武器に頼りすぎだ」

青年は軽く蹴りを入れて、紅の方に戻ってきた。その顔には汗もかいていない。

「ほら、さっさと森を抜けるぞ」

「え、ああ、うん」

ポカンとしていた紅に青年は手を差し出した。

再び紅の手を握って走り出す。気絶した男をまたごうとした時、青年は何かに気づいて足を止めた。

身を屈め、倒れた男の指から指輪を抜いていた。

「どうしたの？」

「ああ、こいつは俺のだ」

そういつて再び走り出す。

森の中は、枝や崖などがあって本来は非常に走りづらいハズだが、

青年のアシストのおかげかとてもスムーズに進むことが出来た。青年も手をつないで走るのに慣れていくようだった。

しばらく、と言ってもせいぜい十分ぐらい走るとすぐに森が開けて、見渡しの良い丘に出た。遠くには村のような集落が見える。

「あそこまで行けば安全だろ。じゃあな、俺はもう行く。……助けてくれてありがとな」

そのまま背を向けて森へ走り出そうとした。

「待って、一緒にこないの？」

紅は手を握り、青年を引き止めた。

「ああ、俺は行かなくちゃいけないところがある」

青年の目には迷いが無い。さらに、切羽詰っているようにも見える。

「そっか。理由は……言いたくないよね」

紅は、この青年も一緒に居て欲しかった。というのも、村に行ったところで家に帰ることもできそうもなさそうだったからだ。RP Gゲームのように宿屋に泊まるお金もないし、かといって親切にしてくれるとも限らない。

未知の土地を一人で歩くことほど恐ろしいことはない。

「そうだ、名前はなんていうの？」

いつまでも青年というのは、助けてもらったのに申し訳ない。

「……シリウス。シリウス・グランジだ」

シリウスは間を置いていった。

「ねえ、シリウス。私もついて行っちゃダメかな？」

紅は思いきって聞いてみたが、シリウスはそっぽを向いて答えた。

「ダメだ」

「どうして？ 私はどうなっても良いから。危ない目に遭ったら見

捨てても良いよ」

どうしても独りになりたくなかったら、勢いで言ってしまった。
しかし、シリウスはしっかりと紅を見据えていった。

「俺は……犯罪者なんだ。父親を殺して、あの牢屋に入れられてた。
だから……ダメなんだ、ついてくんな」
途端、走り去ってしまった。

紅は、一瞬呆然として何もいえなかった。

しかし、最後に見たシリウスの悲しそうな、寂しそうな表情を思い出す。

そして、迷いなく、森へと引き返す。
シリウスを追って。

第二話 森と青年（後書き）

一度書いてみたかった異世界召喚系です。
うまくかけるか分からないけどがんばります。

第三話 熊と炎剣

紅は森の中を引き返していた。シリウスを追っているのだが、既に彼を見失ってしまった。

さらに、先ほどは彼のアシストのおかげで慣れない森の中でも走りやすかったが、一人ではそうも行かない。

しばらく走ったところで息が切れ、近くの岩に座り込んでしまった。

「ふう、一休み」

何気なくポケットに手を入れると、何かを掴んだ。

それはケータイ電話だった。

（やっぱり圏外か……）

わずかな望みを持って開いたが、その望みは儚く消えた。

（それにしても、ここはどこなんだろう。日本じゃないよね）

海外だったとしても、どうしてそんなところに紅が来ているのか。

思い返せば、シリウスにも日本語が通じた気がするし、相手の言葉の意味も理解できた。

（ま、そんなことはあと！ とにかくシリウスを捜さないで）

見つけてどうするかも考えていなかったが、とにかく彼とはもう一度話をしなければいけないと考えていた。

腰を上げて、再び森を歩き始めた。

その紅を、木の上から見守っている者が居た。他でもないシリウスだった。

紅の動きに合わせて、枝から枝へ飛び移る。

（まったく……なんなんだアイツは。この森には野生の獣だって居

るんだぞ)

紅がついてこないように、自分が犯罪者であることを言ったのに、ついてきてしまったては意味がない。まして、このまま彼女を見捨てるのも後味が悪い。

仕方なく上から見守ることにしたが、それもあまり良い方法ではないみたいだった。

(どこに行くつもりだよ……)

当てもなくフラフラ森を進む紅にイライラしながらも、シリウスは監視をやめなかった。

(ん……? あれは?)

木の上から見渡すと、ちょうど先ほど打ちのめした山賊たちが起き上がり、血眼になってシリウスを捜しているのが見えた。

このまま行けば、紅と鉢合わせする。

(先回りしてまた黙らすか……)

また枝を飛び移ろうとした瞬間、男達の悲鳴が聞こえた。

咄嗟に見下ろすと、そこには体長二メートルを超える巨体の熊が、まさに山賊に飛び掛っていた。

(まずい、ワイルドベアーか!!)

男達を薙倒したワイルドベアーは、ちょうど草むらを挟んで紅を見つけた。

「な、なに……?」

紅は、突如自分の前に現れた怪物に、思わず腰が抜けてしまった。同時にワイルドベアーは紅への距離を詰める。今にも飛び掛りそうな気配だ。

「クソがあ!!」

罵声とともにシリウスは木から飛び降り、膝蹴りをワイルドベアーの顔面に突き刺す。

その衝撃でワイルドベアーはひるみ、一瞬の隙を得る。

「ほら、逃げるぞ」

腰を抜かしている紅の腕を再び握り、ワイルドベアーから逃げ出す。

「シリウス!!」

「説教は後だ、今はアイツから逃げるぞ!」

目線で、後ろからブルドーザーの如く、木を薙倒して疾走するワイルドベアーをさし、足を速める。

時折、横の小道に入り、ワイルドベアーとの距離を保つ。ワイルドベアーは、いかに速度が速くともカーブが続けば逃げ切れるかもしれない。

「どうするの!?!」

このままではジリ貧になることは目に見えてる。熊と人間の体力は比べるまでもない。

「ああ、おまけにアイツは魔力を持ったワイルドベアーだ。並みの攻撃なんて感じないはずだ」

「魔力!?!」

紅は耳を疑いつつ、今はそんな状況じゃないことを思い出す。とにかく逃げ切らなければ。

「あっ!?!」

途端、紅は木の根に足を引っ掛け、転んでしまう。同時に、シリウスの手が離れてしまった。

紅が見上げると、既にワイルドベアーが覆いかぶさってきていた。

「あ、い、いや……」

生命の危機を感じ、叫ぶことすら出来ない。

今、まさにワイルドベアーがハンマーのような腕を振りかぶる。当たれば頭蓋骨など軽く吹き飛ぶだろう。

「っ!?!」

ギョツと目を瞑って身構えたが、腕は来ない。

「逃げろ!!」

見ればシリウスがワイルドベアーの胸に飛び込み、押し倒している。しかし、これはほんのわずかな時間だけだろう。

その直後にはワイルドベアーも立ち上がり、その腕をシリウスに振り下ろす。しかしシリウスは横に飛んでこれを回避し、反撃の蹴りを入れるが、効いている気配がない。

「ちっ、ダメか!」

ワイルドベアーの足蹴りがシリウスの頬を掠める。身を縮めて回避した彼に、ワイルドベアーのアッパーが迫る。かわせる距離、速さではない。

腕をクロスさせ防御するが、ワイルドベアーの爪と拳の衝撃でシリウスは吹き飛び、木に直撃する、その腕からは血がとめどなく流れている。

「う、くそっ……」

意識が朦朧とする彼に、止めを刺そうと迫り来る。

今まさに、最後の一撃を振り下ろした。

「ダメえええええ!!」

紅は、ワイルドベアーとシリウスの間に割り込んでいた。

何の力もない彼女では、ワイルドベアーの一撃を受け止められない。ましてこの一撃であっさり殺されるかもしれない。

それでも、彼女には、このままシリウスを見捨てて逃げることも出来なかった。

見捨てることなんて出来るはずがない。

———たとえば、この身が朽ち果てても。

彼を、守りたい。

「な、何だこれは……？」

シリウスの目には、紅の胸にかかったペンダントから、炎の剣が突き出しているように見えた。轟々と炎を散らし、太陽のように輝く炎剣は、普通の剣とは比べ物にならないくらい大きい。

事実、それは真っ直ぐに伸び、ワイルドベアーの鋼鉄のような体を、さながらバターでも切るかのようにあっさりと貫通している。

「これは……魔法なの？」

紅は自分自身の行ったことに驚き、少し嬉しかった。どうして嬉しいのかは、よくわからなかったが。

ワイルドベアーは、胸に風穴をあけ、後ろに崩れ落ちた。もうピクリとも動かない。

「助かった……のか」

シリウスが安堵の声をあげる。それとともに、紅もペタンと座り込んでしまった。

「ふう、何とかなったのね」

そういつてシリウスの方を見て、ギョツとした。彼の腕は血だらけで、今も血がドクドク流れてる。早く応急処置をしないと危険かもしれない。

「ど、どうしよう!？」

紅は特にこういう知識がなかった。よく映画とかで服をちぎって止血をするが、どこをどう締めれば良いのかわからない。

「大丈夫だ、大丈夫。とりあえず……村まで、」

立ち上がろうとしたが、クラッとして紅に寄りかかってしまった。

満足に走れないかもしれない。

「ちくしょう……三年も牢屋はキツイな……」

自嘲気味に笑って、それでも一人で立ち上がる。

「どうしよう……だ、誰か……」

紅は助けを求めるように森を見回した。

「おい、その人たち。大丈夫かー!？」

森の奥から人の声が聞こえる。

こちらに向かってきているのは、どうやら山菜取りのおじさん三人組だった。

「おい、怪我しているのか？ 安心せえ、止血法はわしらが心得てる」

そういつて自慢げに包帯と薬草を取り出し、シリウスの応急処置をそそくさとはじめる。そのうちの一人は驚きながらワイルドベアの亡骸を見ていた。

「こいつはお前さんたちがやったのか!？」

「ええ、まあ」

紅自身も信じなかったが、事実彼女は魔法のようなものを使い、ワイルドベアを倒したことになる。

「こいつを譲ってくれねえか？」

おじさんは期待して聞いてきた。

「な、何に使うんですか……?」

「いやいや、こいつの毛皮はなかなか強くてね。加工して売るんだよ」

結局、このワイルドベアの亡骸と引き換えに、シリウスの治療と村への案内、さらに一泊の宿など手厚い歓迎を約束してくれた。

なんでも、このワイルドベアに襲われる山菜取りの人が続出し、治療道具は必需品になっていたとか。そのワイルドベアも退治してくれたお礼もあるのだという。

その後、傷ついたシリウスを担いで村の宿屋まで向かった。

第四話 罪と魔法

「それで、どうして森へついてきた？」

日は完全に落ち、部屋の中には月明かりと松明の明かりで満たされている。ここは宿屋の二階にある一室で二つの向かい合ったベツトにそれぞれシリウスと紅は座っている。

「だって……話したいことがあって……」

シリウスの傷には、しっかりと包帯が巻かれている。中にはすりつぶした薬草が詰まっていて、これも魔法植物というものらしい。

「ふん……俺は犯罪者だって言っただろ。話すことなんてない」

シリウスは村についてからはずっとこんな調子だ。それもそのはず、紅がついてこなければもう森を抜けていたはずだからである。

「そんなことない、少なくともシリウスは悪人には見えないよ。私をかばってくれたし」

「っ……」

シリウスは気まずそうに言葉を詰まらせた。

なんとなく間を持たせるためにシリウスは訪ねた。

「そういえば、まだ名前聞いてなかったな」

「あ、私は雛沢紅。紅でいいよ」

「ヒナサワコー？　どこの出身だ？」

「どこって……」と、言いかけたところで思い出す。自分はどこから来たのか。ここはどこなのか。

「……まあいい、それで、お前はこれからどうするんだよ」

「私は……」

どこへ行けば帰れるのか、何も解らない。八方塞りだった。

「私の話は後にして、先にシリウスのことを話してよ」

話題をそらされた気がした紅は話題を戻す。

「ちっ、何を話せばいいんだよ。何を話したって俺が犯した罪は消えないんだ」

「それでも良いから。聞かせてよ」

シリウスは悪人ではない。これは紅の直感にすぎないが、それでも時折見せる悲しそうな一面、困っている紅を助ける等、本当は、その罪は彼にとっては正義……とまでは行かなくても、悪意ではないのではないか。

「分かった、お前が満足するなら、話してやるよ」

シリウスは釈然としない感じで、不承不承話し始めた。

「昔、王都に暮らしている一つの家庭があった。そこには高位な職の父と、病弱だが優しい母の下に生まれた、幸せな少年が居ましたとき。

少年は何一つ、不自由なく育った。そして、それはこのまま続くものだと思っていた。

しかし、不意にそれは綻び始めた。

母が病気を悪化させた。元々病弱な彼女は、少年を産んでからは少しづつ弱り始めていた。それが少年の五歳の時、悪化し、やがて息を引き取った。

だが、まあ母の病気は誰もが知っていることで、いつかはこんな日が来ることも、心のどこかで悟っていた。だから少年と父親はそれから前を向いて生きていくことを決めた」

ここでシリウスは一息ついた。

自分の出来事を物語のように話すシリウスに、紅はどこか、この昔話を自分のものと捉えたがらないような、そんな気配を感じた。

「母の死別からしばらくが経った。父は仕事が忙しく、少年も趣味の一つぐらいで武術を始めていた。別に武術なんて裕福な少年には必要ないものだったが、同じように裕福な家庭の奴らを見ると、弛んでて自分もそうなるのが嫌だったからかもしれない。もしくは、何かにうち込みたかっただけかもしれない。

ある日、転機が訪れた。父の再婚がいつの間にか決まったのだそう。父は忙しいのであまり少年の面倒を見てやれないので、母親代わり、育ての親が必要だと考えたのだそう。でも少年は、本当の理由をすぐに知った。

その女性はとても美しかったからだ。まるで聖母のような微笑、……まあ言い切れないほどの美しさだった。もちろん優しく、面倒見もよいひとだった。

そして、その人には既に子供が居た。少年の二つ下の女の子だった。彼女も母のように美しく、引っ込み思案だが、序々に少年とも打ち解けてきた。

こうして再び、家庭には束の間の幸せが訪れたわけだ。

幸せはそう長く続かない、また突然、訪れた。

今度は義母の行方不明だった。

そして、今度は父が、その突然の出来事に耐えられなかった。父は誰よりも彼女を溺愛していた。そのせいでショックから立ち直れず、鬱になり始めた。

少年は、義理の妹が居たから、自分だけでもしつかりしないとと思っていた。少年は十五歳だった。

父はそれから悲しみにくれ、いろんな人に頼んで搜索したが見つからない。そのまま時間が解決してくれるのを待つしかないと思った時、父は末期になった。

父は義母の美しさに惚れ込んでいた。そして、その深い愛情を今度は義理の娘に向け始めた。執拗に、嫌がらせのように娘を歪んだ愛情で愛し始めた父はある晩、義理の娘を犯そうとした。

幸運なことに、その場面を少年が目撃した。そして妹を守るため

に彼は父を攻撃した。

背中から、装飾品だった剣で一刺しだった。

装飾品の剣にも刃はついていた。

そして……父を殺した。

殺してしまった。

それが、罪。

少年の罪。

その後、少年は牢屋にぶち込まれ、王都に妹を一人、残してきてしまった。結局、少年は守ることが出来ず、一人ぼっちにしてしまったとさ。だから今も、少年は妹の元へ行くため、王都を目指すことにした」

全部話し終えたシリウスは一息ついて紅のほうを見た。

「つておい、なに泣いてんだ？」

「だって……悪いのは少年じゃなくて父親でしょ？」

涙目になった紅を見てシリウスはたじろぐ。

「それでも、他の方法があったはずだ、それに泣くほどのことじゃない」

「泣いてないもん……」

袖で目をゴシゴシこすりながら言ってもいまいちだが、シリウスはお構い無しに聞いた。

「さあ、次はアンタの番だ」

「うん……私ね、たぶんこの世界の人じゃないと思うの」

「……あー、悪い。聞かなかったことにするわ」

その直後、紅は怒りながら今までのあらすじを説明した。初めは疑っていたシリウスだが、話を聞いている間に納得してくれたのか、真剣に考えてくれた。

「つまり、それは一種の召喚魔法だな」

「召喚魔法……」

召喚なんていうと、ゲームや漫画でモンスターを呼び出したりすることを連想する紅だった。

「ところで魔法ってナニ？」

「……ほんとに違う世界の人なんだな。ただの馬鹿に見えるけどな」
シリウスに馬鹿にされても、ここは言い返せない紅はぐっとこらえる。

「まあいいか、俺も専門外だから期待するなよ？」

「うん」

シリウスは魔法について説明し始めた。

第五話 地図と街

「まあ、魔法を簡単に言えば『魔力を燃料として不思議な現象を起こす』って事だな」

「不思議な現象ってあの炎の剣とか？」

紅は首から提げたペンダントを撫でながら聞いた。

「他にもいろいろある。次々に開発されていくから無限にあるんだ。それでも炎の剣、しかも無詠唱なんて並の魔術師でも使えないぞ？」

「無詠唱？」

「そうだ、魔法ってのは生物の持つ魔力を変換して体外に放出するわけだ。魔力ってのは、強いて言えば体力みたいなもんだな。生物のうちにある力のことだ。でも、ただ念じれば放出できるわけじゃない。複雑で膨大な理論を頭の中で組み立ててやっと魔法が使える。でも頭の中だけじゃ膨大な理論をまとめきれないから、言葉に出して言霊の力を借りたり、衣服や装備品、または地面なんか魔法陣を刻んでおいたりするんだがな」

「あ、え！？ 言霊？」

初めの方はなんとなく理解できた気がしていたが、後半にかけて紅の理解能力の限界を超えてしまった。

「ようはお前はとんでもないことを軽く仕出かしたってことだな」

「ふーん、じゃあ魔法で空も飛べるかな？」

子供の頃からの憧れであった、魔法使いが箒で空を飛ぶ事。もしかしたら実現できるかもしれないと目を輝かせる紅だった。

「あのなあ、そんなことするには、それこそ膨大な理論を考えなきゃいけないだぞ？ そんなことよりお前は元の世界に帰る方法を考えなくて良いのか？」

「そうだった、召喚魔法って何？」

危く目的を忘れかけていた紅に頭を抱えるシリウスだった。

「これも俺の専門外だから詳しくは分からないが、王都の研究機関で召喚魔法が開発されているらしい。なんでもそれを発動すれば異世界と扉をつないで、物体を行き来させることが出来るそうだ」

「ということは、私もそれでこの世界に来たって事？」

しかし、シリウスは唸った。

「いや、俺も聞いた話だからなんともいえないんだが、異世界を行き来する際に、莫大な魔力の流れに身を投じることになるから生物が生きたまま異世界にはいけない……という話を聞いたことがある」
「よくわからないけど、やっぱり無理なの？」

「いや、確かめてみる価値はあるだろ。王都に行けば何か分かるだろう」

そこで、紅は思い出した。シリウスの向かう先も王都だった。

「じゃあ一緒に王都に行こうよ！」

「断る……つもりだったが、お前の魔法はなかなか役に立ちそうだし、いいだろう、一緒に行こう」

そこで紅は「やったー」と歓喜の声をあげ、シリウスは、おいおい……と頭を抱えた。

こんなにも無邪気に笑っている少女が、ワイルドベアーを蹴散らしたと思うと、何故だかすごくおかしく見える。

「じゃあもう寝るぞ。明日は出発するからな」

そういつてシリウスは部屋の明かりを消し、月明かりだけがこの部屋を照らした。

紅にとっては、この世界での初めての夜。元の世界ではどうなっているのか、とか、本当に帰ることができるのだろうか、とかは全然気にならなかった。

その理由は、紅にははっきりと分からなかったが、なんとなく、

シリウスが居ると心強く安心できた。
(なんだか……疲れちゃった)
紅は自然と、眠りに落ちていった。

「おい、起きろ。もう出発だぞ」

「あとごふくん」

「ちっ、置いていくか。ここの村は優しい人だらけみたいだしな」

「ふお!？」

紅が身を起こすと、窓からは月明かりに変わって日差しが煌々と射している。もう朝だ。

「ほら、ついてくんなら起きろ」

「ま、まって〜」

紅はベットから飛び降りる。制服のまま寝ていたのでしわくちやだったが気にしている暇が無い。

階段を転がるように下りてシリウスについていく。シリウスの包帯はもう取れていて、傷口も塞がっているようだ。

外に出たところで、村人がおのおのの仕事を始める中、貨物車が正面に止まっていた。

「いよっ! お嬢さんたち。朝から元気だねえ」

おじさんが挨拶をしてきた。たしか、昨日の山菜取りの人だったはずだ。

「とりあえず街まで行く貨物車に載せてもらえることになったからな」

貨物車の前には牛のような生き物が二頭居る。しかし、牛とは決定的に違うのが、角が一本、正面についている。三十センチぐらいだが、尖ってて危なそうだ。

「さあ、のるけえ」

「それで、これからどこへ行くの？」

田舎特有の広大な面積の田んぼや畑、近くには川も流れている。所々に防風林のような、一直線に並んだ木々が、そよ風に揺れている。

ここまで壮大な草原を見るのは初めてだった。

草原に生える雑草ですら、風に揺られて統一性のある動きをする。そんな大自然に触れられることが、紅はたのしかった。

「ここから森を抜けて北にある商業都市、ローアン・バザーに行くぞ」

貨物車には、村の伝統工芸品のようなものがたくさん詰まれ、その後ろに紅とシリウスは並んで腰かけている。

「ここで資金調達と武具も一式揃えるぞ」

「ふーん、じゃあ王都まではどれぐらいかかるの？」

紅の問いに、シリウスはおもむろに一枚の折りたたまれた紙を取り出した。広げると、大きな地図のようだった。

「今俺達はここだ」

地図には一つの大陸が描かれている。大陸は簡単に言うと十字型をしている。丸い中心部から東西南北に半島が四つ飛び出した形だ。そして、シリウスはその南端の半島辺りを指差しながら言った。

「んで、今の目的地、ローアン・バザーがここだ」

今度は南に出た半島の根元を指差して言った。

「そして王都、グラン・アビィリアがここ」

ちょうど地図を上下半分に分けて折ると、ローアン・バザーと重なるような位置。つまり北側の半島の付け根辺りを指差して言った。

「なんか……結構遠いいね」

紅はこれからの旅路を思い浮かべて苦笑した。

まあな。とシリウスが頷くと、貨物車を操縦していたおじさんが声をかけてきた。

「街までは結構時間かかるから、昼寝でもすると良いぞ」

「あ、じゃあお言葉に甘えて……」

紅は貨物車の後ろから、積まれた毛皮に身を投げ出し、寝転がった。

そよ風が頬を撫で、とても気持ちよかった。身を翻し、うつぶせになると目の前には広げられた大陸地図があった。

「ねえシリウス。こっちの方には何があるの？」

興味本意で訪ねてみた。ちょうど東側に突き出した半島は、他のそれよりも格段に太かった。

「ああ、そっちの方には大陸一の国土を持つ独立国、ワイルクレセント王国がある。二十年前の、大戦？の時に王都と協力関係にあった国だ」

広大な面積の国土は農作物が豊富な反面、未開発地域も多く、人口は王都よりも少ない。

「大戦？」

「そう、ちょうど反対側の半島があるだろう？　こっちには古代都市ノーティスがあったんだ。ここは古代神話の宗教が盛んで独自の文化を持ち、孤立していた。だが、王都がその力を拡大していくと、奴らは王都を目の敵にしてきた。やがて二国のいがみあいが始まり、……戦争になったわけだ」

「戦争、かあ」

紅の世界では、正しくは紅の国では戦争なんて、あまり感じる機会はなかった。その初めての感覚に、少し戸惑った。

「結局、王都の連合軍が勝利したんだ。大変だったみたいだけどな」

そこでシリウスは話を終えた。

二十年前といえば、おそらくシリウスもまだ生まれていない。それでも大きな爪あとがあちこちに残っていただろう。その反面、何

も知らないで居ることは幸せなのだろうか。

「お、もうすぐ街に着くぞ！」

貨物車の操縦しているおじさんの声が響いた。

紅は身を乗り出して街を眺める。丘の向こうには、黄土色の荒野の真ん中で、円形の外壁の中に灰色の建物がビッシリと詰まっていた。壮観だった。よく見ると、建物にも色々な色の種類があり、まさしく日本とは異世界なものだった。

「すごい……」

「確かにすごいな。ローアン・バザーはその昔、商人ローアンがたった一人で何も無い荒野に店を構えたことから始まった街だ。治安は悪いがにぎわってる良い町だぜ」

治安が悪いのは良い街なのかと紅は疑問に思ったが、それでも毎日がお祭り状態な街は楽しいに決まっている。

「よし、じゃあもうひとつ走りだぞ！」

おじさんが楽しげに、牛に鞭を入れた。

第六話 ギルドとウエイトレス

商業都市ローアン・バザーに着いた。

外壁の門をくぐったところで、貨物車から下ろしてもらい、おじさんは荷物を売りさばくため、路上バザーの方へ向かった。

お礼を言いながら手を振り、見えなくなると今度はシリウスも歩き始めた。

「まず、換金所に行くぞ」

街は通行人であふれ、荒野の土が砂埃となって巻き上がるほどだ。その誰もが背中に荷物をしょっていたり、はたまた鎧で身を固め、今から巨竜でも退治に行くのかと思わせるいでたちだったりする。

その中ではぐれてしまわないように、シリウスは紅の手を引きながら街を横切る。

「換金って何かお金になるものある？」

シリウスは牢屋から抜け出してきた身だし、紅は異世界から迷い込んできた身だ。ちぐはぐな二人組みは今、一文無しだった。

「ほら、こいつだよ」

手のひらを広げると、シリウスの指には少しくすんだ指輪がはめられていた。確か山賊から奪ったものだ。

「それなりの金にはなるだろ」

「でもそれだけじゃあ旅は出来ないね」

アルバイトでもするのだろうか、とぼんやり考えていると、シリウスは灰色のレンガで出来た堅牢そうな建物に入ってしまった。入り口には大きく、『王都直属ギルド』と書かれていた。

内部は簡単なつくりで、カウンター越しに人がなにやら査定しているようだった。さながら銀行の窓口のようなつくりになっている。待っている人は、それぞれ多種多様な品物を持っていた。

「俺はこいつを売ってくる。お前はそその辺で待ってろ」

そういうとシリウスは人ごみにまぎれてしまった。

取り残された紅は仕方なく、休憩用のスペースに逃げ込み、壁に貼られたポスターを眺めていた。

「トレジャーハンター募集……ね」

まったく知らない文字、しかし、紅にはそれが長年親しんできた母国語のように分かる。奇妙な既視感にも似たもどかしさがあった。ポスターには大きく募集の文字が躍り、下には詳しい募集要領がある。

「ふむふむ……?」

どうやら、このローアン・バザーの周りには幾つもの古代遺跡が点在しており、そこにはまだ見ぬお宝が眠っているようだ。それを掘り起こし、この王都直属ギルドに持ち込めば、物によっては高価買取してくれるらしい。

おそらくシリウスはこれを狙っているのだろう。

「お嬢さん、お一人かい？」

「えっ?」

急に声をかけられ、振り向くと、そこには見知らぬ男性が立っていた。

長身に短い逆立った金髪の男で、ハリウッド俳優に居ても違和感無いようなルックスの彼は、紳士的に微笑み、紅を見ている。

「あ、何か？」

「いや、どうして君みたいな人がこんな荒くれの集まる場所に一人でいるのかなあって。まさに紅一点だ」

紅にそれを言うのは駄洒落みたいでおかしかった。

「えーっと、あっちの方に一緒に旅をしている人が居るんですけど」
紅が指差すと、男はさもショックを受けたような表情になり、オーバーリアクションで落ち込んだ。

「おう、まさか人妻だったなんて……俺はなんて罪な男なんだ……」

色々間違いがあるが、紅にはどうして良いのかわからなかった。オロオロしていると、男は気を取り直していた。

「そんなことより俺とあそばないか？ ……ゴフッ！」

男は鳩尾に拳を喰らっていた。

殴ったのは紅ではなく、シリウスでもない。どうやらこの男の連れのようで、褐色の肌に銀色がかった髪少年が、男を引きずっていた。

「悪いな、お嬢ちゃん。連れがめーわくかけた」

その背中には物騒な槍があつたが、特別凶暴な人には見えなかった。

そしてすぐに人ごみに消えてしまった。「see you again, my honey.」と聞こえたのはたぶん気のせいだろう。

その後すぐに、茶封筒を持ったシリウスが駆けつけてきた。

紅は、なんだか笑ってしまった。

とりあえず場所を移し、近くにあった喫茶店、『ドラゴンミスト』へとやってきた。

喫茶店は紅の世界のそれと大差は無く、丸いテーブルがいくつ並び、カウンターの向こうでは気のよさそうなオッサンがコーヒを淹れていた。天井には、何の意味があるのかプロペラが回り、茶色っぽい照明は辺りを優しく照らしていた。シリウス達のほかに、客はまばらにしか居なく、黒服の男達がテーブルの一角を占領していた。そのほかに、腰にサバイバルナイフを提げた若い女がカウンターに座っている。

「とりあえずこんなもんだろ」

シリウスは先ほど手に入れたお金で身なりを整えていた。インナーの上に革のジャケット、ジープンのベルトには、中古の武器屋で

購入した剣が収められている。長い髪は後ろで一つに縛ってある。

「それじゃあ、これからの作戦会議だ」

「トレジャーハンターをやるんでしょ？」

紅は自信満々に言うのと、シリウスも驚いたように声をあげた。

「なんだ、知ってたのか。そうだ。これからお宝探しに行って一山当てるぞ」

今度は地図をテーブルの上に広げた。どうやらこの街の周辺を描いたものらしい。

「とりあえず、俺の勘だが、この辺りはあまり人が来てなくて宝が残ってるみたいだ……」

一連の情報をシリウスが喋り、喉が渴いたのかアイスコーヒーを注文した。

そこでひと段落着いたので紅はさっきのギルドでの話をすることにした。

「そういえば、さっきギルドで知らない人に声をかけられたんだけど、」

「なにい？ お前にナンパか？ アホな男も居たもんだな」

「ちよ、それひどくない！？」

「それで、結局なんだったんだ？」

「いや、よくわからなかったけど……」

「ふうん。ま、気をつけろよ。この辺じゃ誘拐だって珍しくないからな」

治安が悪いこの街では、ある程度の犯罪など、日常茶飯事だ。元々一人の商人が始めた街だから、景気が良いようになったからなのだが。

「それより、お前。そのペンダント……」

ちょうどシリウスが喋りかけた途端、「こ、コーヒーをお持ちしましたー」というウエイトレスの声に遮られてしまった。

そして、ウエイトレスがシリウスの前にコーヒーを置こうとした

時。

コケた。何も無いところで。

「つめたっ！」

ウエイトレスが手に持っていたアイスコーヒーは、そのまま紅のひざ辺りに全部かかってしまった。制服のスカートがビシヤビシヤになってしまった。

「あう、す、すいません！」

慌ててウエイトレスはタオルを持ち出し、紅のひざを拭き始める。しかし、そんなことだけでは乾いたりはいしない。

「あーどうしよう、着替えなんて持ってないよ……」

異世界に迷い込んでからずっと着ている制服しか手持ちが無い。

「買うか？ つつてももう金がほとんど無いけどな」

そんな事いったら買いにくくなる事を分かっているながらシリウスは言った。彼は別に動じず、座ったまま眺めている。

「あの……私の私服でよろしければ、お貸しで着ますけど、」

ウエイトレスは申し訳なさそうに提案した。彼女はウエイトレスの制服であるひざぐらいのスカートにシャツとネクタイという質素な感じで、ツインテイルが印象的な子だ。

「え、本当！？　じゃあお言葉に甘えて」

笑顔で紅は答えた。そのまま、店のカウンターの奥にある扉から、従業員用の控え室に入った。

「すいません、本当に申し訳ありません！」

さっきからずっと頭を下げっぱなしのウエイトレスに、圧倒されながらも、紅はてを振りながら言った。

「別にそんなにかしこまらなくても良いよ。服まで貸してくれるんだし」

「そ、そうしてもらえとうれしいです、」

まだ、申し訳なさそうに服を差し出してきた彼女に、友達のように

に尋ねた。

「そういえば名前、なんていうの？」

「あ、私はリリィ・フランナって言います。リリィで結構ですよ」

「私は紅。よろしくね！」

自己紹介を終え、紅は服を着替えた。こっちの世界の私服も大して変わらない。パーカーにカーゴパンツのような格好で、見たところリリィはあまりおしゃれにこだわらないようだ。

「紅さんは旅人か何かなんですか？」

紅の制服をクリーニング用の所に置きながら、何気なく尋ねた。

「うん、まあね。トレジャーハンターをやりに行くんだ」

「えっ、もしかして女戦士なんですか!？」

異常な食いつきを見せるリリィにちょっと驚きながらも、ちゃんと訂正した。

「ううん、どちらかといえば魔術師? かな」

「ええっ! 本当ですか!? 魔法とか使えるんですか?」

「まあ……」

正直、魔法なんて一度しか使ったこともないし、それも正攻法だったわけじゃない。事実としては間違っていないが、実際とは違っていた。

「私、魔術師とか女戦士とかって憧れるんですよ〜」

「やっぱりかっこいいから?」

遠くを見るように呟くリリィに、自分のことを棚にあげて紅は聞いた。

「それもありますけど、やっぱりしっかりしてるじゃないですか。

私、ドジばっかりして、お店やお客さんにも迷惑ばっかりかけて…今の店長は優しいから、どんなにドジをやっても首にしないんです。なんだか申し訳なくて…あ、すいません! 愚痴を言うつもりじゃなかったんですけど」

「いいよ。むしろどんどん言いなさい! そういうときは俯くんじやなくて吹っ切って前を見ないと」

特に人生の先輩というわけでもないのに、紅は胸を張って励ました。

「思い切ってリリイも魔術とかやってみたら？」

紅の誘いに、大げさに手を振りながらリリイは言った。

「いえいえっ、私に魔術なんて……それに、働かなきゃいけない理由があるんです」

「理由？ 欲しい物とかあるの？」

「いえ、……私の彼が、この前事故に遭ったらしくて、足が動かなくなっちゃったんです。もしかしたら手術で治るかもしれないんですけど、その手術費が高額で。身寄りの無い彼にそんな大金は無いし、私がかんばってお金を稼がないとって思っただけです」

そう話すリリイを見ると、なんだか日の当たらない木陰で懸命に咲いている一厘の花のような美しさと力強さを感じた。

ちょっと泣き目になりながら、紅はうんうんと頷き、「私にも出来ることがあったら言ってね」と言った。

「おーい、早くしろ。置いてくぞ」

ドア越しにシリウスの催促する声が聞こえた。

「あ、私もう行かなくちゃ。後で服取りに来るからね」

「はい、綺麗にしておきます」

紅はドアを開け、控え室から飛び出していった。

（なんだか……初めてあったはずなのに友達みたいな人だったなあ）
仕事に打ち込んでいるリリイは交友関係がほとんど無い。

シリウスと走ってゆく彼女の後姿をみて、なんだかかんばれる気がしてきた。

第七話 遺跡とランプ

ゴトゴトゆれるバギーカーのような乗り物は砂煙をもうもうと上げ、荒野を真っ直ぐに横切っていた。運転席には真っ黒に日焼けしたオッサンがドカッと座り、その後ろにシリウスと紅は座っている。喫茶店を後にして、二人はさっそく周囲の遺跡から宝物をとりに行く、『トレジャーハンター』で一儲けすることになり、街を出た。ギルドから遺跡までの案内として、この車に乗せられたわけだが、ギルド専属の運転手、どうも堅気には見えないような雰囲気があった。

何も無い荒野を走り抜ける中、紅はなんとなくシリウスに訪ねた。
「この車って何で動いているの？」

この世界にガソリンとかが存在しているのか少し気になっていた。
「こいつは魔鉱石かなんかだろ。生物じゃないのに魔力を持った鉱石のことだ。少量でも結構なエネルギーを生み出すはず」

シリウスの答に割り込むように、運転のオッサンがしゃがれ声を出した。

「まあな、坊主の言う通りだ。それでもこいつは年代物だから使える魔鉱石も量も少なくてな。補給が欠かせないんだ」

ふーん、と紅は頷き、運転席の背中の部分に挟まっていたチラシのような紙に目を向ける。

「盗賊に注意してください、だって」

チラシではなく、どうやらギルドからの注意書のように、最近『トレジャーハンター狩り』をする盗賊がいるとか。遺跡から出てきて疲れているところを狙い、お宝を横取りするセコイ連中が出没中らしい。

「確かに、遺跡の中には古代人の造った罠があるらしいからな。横取りした方が楽かもしれないが……まさかこんな連中に好き勝手さ

せてるようじゃギルドも鼻で笑われてるな」

シリウスはあきれたように呟いた。

「いいや、坊主。盗賊自体は前からちよろしとったが、ギルドがちゃんと取り締まっとった。じゃが、最近になってやり手の盗賊団が現れ始めて、まだろくに対策が出来とらんのだ」

「やり手の盗賊団？」

シリウスが訝しげに聞き返す。

「ああ、たしか……『黒蠍盗賊団』とか名乗っておったらしいぞ」
黒サソリ盗賊団、聞いただけではいまいち強そうには思えない紅だった。

「まったく、最近はしょーもない犯罪者ばかり増えおって。つまらんわ」

運転手はとんでもないことをぼやいた。

「でも、凶悪犯罪者なんて居たら怖くないですか？」

「いいや、むしろゾクゾクするわい。たしか……何時か昔に、殺人鬼の王子様が逮捕されて、『監獄島』にぶち込まれたことがあったか。あれは痛快だった」

声を荒げて楽しそうに言う運転手にあきれて紅はシリウスの方を見た。シリウスはむっとしながら黙りこくっていた。

（そっか、シリウスも罪を……でも、それは……）

罪は罪。犯罪者は犯罪者に変わりが無い。おそらくシリウスの中では葛藤があるのだろう。一人王都に残した妹。しかし、犯罪を犯した兄が今更やって来て、果たして喜ぶのだろうか。

その血塗られた手を再び握ってくれるのだろうか。

彼女にはもう新しい居場所があるかもしれない。

（俺は……本当に必要なのだろうか）

「……シリウス、」

紅が言いかけた途端、バギーカーは急停止し、「おし、着いたぞ」という運転手の声で遮られてしまった。

車を降りたシリウスはいつもどおりに戻っていた。だから、紅は何もいえなかった。

「ちょっと待ってろ。お前らに渡すもんがある」

そういつて、運転手は車からゴソゴソと何か取り出した。シリウスに突きつけられたそれは、一枚の地図とランプだった。

「ランプは結構丈夫だぞ。それから、その地図だが……」

紅は横から覗き込んだ。遺跡の内部を記した地図で、所々に道が途切れ、空白になっているところがある。

「その空白はまだ誰も踏み入れてない場所だ。逆に地図があるのは誰かがもう入ってきた所だな。新しいお宝を見つけたいんなら空白のところを進めば良い。それで帰ってきたら必ず書き足すこと。いいか？」

「ああ」

シリウスはランプと地図を受け取り、遺跡の方へ歩き出した。

遺跡はどうやら地下に広がっているようで、地下鉄の入り口みたいな縦穴が開いている。その周りには、確かに人工で作られたようなタイルが敷かれている。

中は天窓が無いのか、真っ暗闇が広がっていた。

「ねえ、シリウス。さっき罫があるみたいなこと言ってたけどさ……化物とか出ないよね？」

この世界では、熊に出会い、あわや殺されかけた紅だった。

「さあな。コウモリぐらいはるだろ。さすがにこんな暗闇で生活している生物はろくに居ないだろうな」

「気ーつけろよー。帰るときは声かけてくれー」

車の横に、テントを張りながら運転手は叫んだ。

「よし、じゃあ入るぞ」

シリウスはランプに火を灯し、遺跡の中に踏み込む。確かに言わ

れてみれば、いくつか人が歩いたような痕跡がある。

階段を下りきると、一気に開けた部屋になった。壁には縦横無尽に文字や絵画が刻まれ、紅はテレビでしか知らないがエジプトの遺跡を思い出していた。ということは、ここにあるお宝は古代人のミイラだろうか。と考え、身震いする。

「どうやら、空白のある道はこっちだな」

部屋は真っ直ぐ奥まで続いているが、どうやらそっち側にはもう人が入ったことがあるらしく、地図によれば、横にそれた小道があるようだ。

壁に沿ってランプで照らし、小道を探すと、なにやら遺跡の壁に横穴が開いていた。

「……ここ、みたいだな」

明らかに、とりあえず掘ってみました。と言った風情の横穴は、遺跡の壁を強引に開き、どうやら別の遺跡につながっているらしい。「入り口が埋まったところもあるみたいだから。向こう側はもうちょっとマシだと思うぞ」

言いながらシリウスは、成人男性なら普通に通れないような穴に身を押し込んでいく。もともと小柄なシリウスは、剣をつっかからせながらも、どんどん奥に進んでいく。

それに従い、紅も後をついていく。

ほんの五メートルぐらい進むと、また別の小部屋に出た。シリウスの言ったとおり、入り口の埋まってしまった別の遺跡に通じていた。

「ふう、なんとかあったみたいだな」

さっきの大部屋よりは小さいが、確かに遺跡だった。

さらに、奥の方へ進むと、狭い通路があり、その奥にもまだ部屋はあるようだ。

「どこまで行けば良いの……？」

うす暗闇の中で紅は若干疲労気味だった。その紅と同調するかの

ように、ランプも弱弱しく点滅した。

「おいおい、こいつも年代物の魔鉱石ランプか？　しっかりしてくれよ」

シリウスがバシバシ叩くと、すぐに元に戻った。運転手は結構丈夫と言っていたが、嘘だったようだ。

通路を抜けると、またもや広い空間へ出た。床には二メートル四方のタイルのようなものが敷き詰められ、奥のほうにはなにやら巨大な岩のブロックのようなものが置かれている。

シリウスの後に続いて紅も広い空間に出た。ちょうどシリウスと同じタイルに乗った途端、足元が少し沈んだ。まるでスイッチを押したかのように。

直後、轟音と土埃をあげて、巨大な岩石のシャッターが下りてきた。それは、紅とシリウスが通ってきた通路をぴったりと遮断してしまった。

「くそっ、閉じ込められたのか!？」

岩石のシャッターはどうやら、このタイルに人が複数乗ると作動する仕掛けだったようだ。

「でも、奥にはまだ道があるはずだよ」

紅は落ち着いて言った。それに促されてシリウスも、ランプで奥のほうを照らしたが。

「……見事に行き止まりだな」

壁は虚しく、そこで終わっていた。つまり、この密閉空間に閉じ込められてしまったということだ。この部屋の中には二人のほかに、巨大な岩石のブロックしかない。

「……どうしよう」

このままでは酸素が無くなり、窒息してしまう。

絶望にくれていた、その時、部屋の中に、また岩をこするような轟音が響き始めた。もしかしたら出口が開いたのかと期待を持った紅だったが。

「どうやら……更に絶望を見せたいらしいな……！」

部屋の真ん中においてあった岩石のブロックが勝手に動き始め、その姿を徐々に現し始める。さながら子供の变形おもちゃのように、組みあがったそれは、岩石の巨人だった。

まるで遺跡の守護者のように、それは立ちふさがる。

「とにかく、脱出はこいつを倒してからのような！」
シリウスは勇猛果敢に巨人に挑んだ。

第八話 ゴーレムと壺

ランプを持ったシリウスは、岩石の巨人に勢い良く挑む。

そのシリウスを、まるで地を這う虫を叩き潰すかのように、岩石の巨人の拳が振り下ろされた。床が弾け飛び、砂煙が辺りを覆う。紅は壁に張り付いてみていることしか出来なかった。

「シリウスッ！」

「こっちだ！」

シリウスは巨人の足の間をぐり、反対側に回っていた。

身長四、五メートルもある岩石の巨人、つまり、『ゴーレム』と呼ばれるいわば魔術師の操り人形だ。術者の魔力によって力を得た岩石は、術者が死んだ後も遺跡を守り続けていた。

（こいつには体外からの攻撃は意味が無い……ならば！）

岩石で出来ているため、痛みどころか感情が無い。魔術によって形が構成されているため、その魔術のコアを破壊する必要がある。だが、一撃で中心のコアを破壊する必要は無い。岩石と岩石をつなぎ合わせている、関節のような部分を攻撃しても、十分にダメージは期待できるはずだ。

ゴーレムは、後ろに回ったシリウスを一瞬見失い、やや遅れて後ろを振り向こうとする。しかし、その緩慢な動作では遅すぎる。

「こいつでどうだ！」

シリウスはゴーレムのちょうど膝辺り、岩と岩の隙間に剣を突き刺した。

ザクリという小気味よい感触があったが、ゴーレムはピクリともしない。それどころか、膝を曲げて刺さった剣をへし折ろうとする。「クソッ、効いてないのか？」

慌てて剣を引き抜いたシリウスに、わずかな隙が生じてしまった。

そして、その隙を狙うように放たれた、ゴーレムのハンマーのような拳の横薙ぎをまともに喰らってしまった。

「うぐっ、！？」

一直線に壁に叩きつけられ、ズルズルとずり落ちる。その衝撃で、ランプと剣がシリウスの手から吹き飛んだ。意外にもランプは割れなかった。

「シリウス、大丈夫！？」

駆け寄ろうとした紅の行く手を塞ぐように、ゴーレムが迫り来る。二人の間に転がるランプは、その巨大なシルエットを映し出す。

「私が……戦わないと、」

シリウスはピクリとも動かない。早くゴーレムを倒して、ここから脱出しなくては、もしかしたらシリウスは大事に至るかもしれない。

紅は、魔術の詳しい理論なんて分からない。しかし、その胸に、熱い炎が灯ったように自信に満ちていた。今ならどんな敵にだって戦ってやる。そんな気持ちだった。

軽く息を吸い、まるで弓を引くように構える。その手には炎剣を発生させる。

感覚のままに、炎剣を発射する。

緩慢な動作でゆっくりと近づいてくるゴーレムの顔面を目掛けて、真っ直ぐ、煌々と光る炎剣が突き刺さる。しかし、その直前、ゴーレムの手のひらが振り払うかのように炎剣を薙いだ。

それだけで、炎剣は吸い込まれるかのように消滅してしまった。鋼鉄のような毛皮を持つワイルドベアーを、バターをきるようにあっさりと切り裂いた紅の炎剣ならば、岩石の巨人といえど、その腕を吹き飛ばすくらいの威力はあったはずだ。

だが、ゴーレムに、傷一つ無い。焦げてすらいなかった。

「どうして……、いや、ダメ。ここで諦めちゃ」

続けざまに、紅の周りに三本の炎剣が発生する。紅の合図とともに、三本の矢のようにゴーレムに襲い掛かる炎剣は、またしても腕でガードされ、消滅してしまった。

そうしているうちに、ゴーレムは徐々に距離を詰めて来る。元々壁際にいた紅はこれ以上下がる事が出来ない。

足止めのためにも、絶え間なく炎剣を発生させては発射する。しかし、そのどれもがダメージがあるようには見えない。

それでも、ゴーレムは必ず防御の姿勢をとり、少しひるんでいる。なんとか時間稼ぎをして、打開策を見つけないてはいけない。

しかし、絶え間なく炎剣を放ったところで、そう簡単に打開策は見つからない。さらに、続けざまに炎剣を放ちすぎたせいで、紅の体力の尽きてきている。もう三本も発生させることが出来ない。一本でも、最初より、はるかに小さい。

(どうすれば……、シリウス……?)

その時、シリウスがわずかに動いた。どうやら怪我をしたわけではなく、衝撃による脳震盪で気絶していたようだ。

「紅、大丈夫か!？」

フラフラになりながらも立ち上がったシリウスは、どうやらこの状況を見てはいたらしく、紅に向けて叫んだ。

「もう少し持ちこたえてくれ」

シリウスは動き出し、ランプを拾った。

ゴーレムの標的が、シリウスに移った。ゴーレムの傍を移動していたシリウスを踏み潰すように、足が振り落とされる。

「危ないっ!」

その直前に、紅は炎剣を足に向けて放った。

爆風とともに、ゴーレムの足が吹き飛んでいた。今度は打ち消されなかった。

「やった……!？」

しかし、喜びもつかの間だった。

吹き飛んだゴーレムの足が、映像を逆再生するかのように元に戻り始めている。どうやら表面を破壊しただけで、魔術のコアを破壊することが出来なかったようだ。

もう、紅の魔力も残り少ない。あと、せいぜい一発が限界だ。
絶望的状况だった。

「紅、こいつを撃ち抜け！！」

シリウスは何かを、ゴーレムの顔面の前に投げた。

いつの間にかランプを消したのか、辺りはほぼ真っ暗になっていたが、一瞬キラリと光るものが見えた。もうこれしかない。シリウスの秘策が最後の望みだ。

全身の力を振り絞って、最後の炎剣を発射した。

真っ直ぐの軌道を描き、シリウスの投げた物に激突する。

途端、あたり一面を閃光が包んだ。

カメラのフラッシュにも似た強烈な光が、薄暗闇になれた紅の目を焼くように照らした。

同時に、轟音が響いた。壁が崩れるような、岩が崩れるような音が響くが、紅は目が開けられない。

「おい、大丈夫か？」

シリウスに肩を揺すられ、ようやく目が慣れてくる。

瞳を開けると、どうやら外の光が差ししているようだった。

「うそ……すごい、でもどうして？」

紅の目には、今まで自分達を苦しめてきたゴーレムが後ろ側の壁を突き破り、倒れている姿が飛び込んできた。ゴーレムは完全に停止してる。更に言えば、もはやただの岩石の塊みたいなものだ。

突き破られた壁の向こうには、また別の遺跡につながっていたらしく、天窓がついていて光が差し込んでいた。

「最後になげたのはランプさ」

シリウスが自慢げに言った。

「あのランプは魔鉱石を燃料に使ってる。厳密に言えば魔鉱石の魔力を光に変換してるんだ、そしてお前の炎剣もいわば、魔鉱石とは桁違いの魔力の塊みたいなもんだ。つまり、あのランプに魔法を当てれば強烈な光に変換されるって事だ」

シリウスは、黒焦げになって転がっているランプの亡骸を拾った。
「でも、どうしてゴーレムが光に弱いつて分かったの？」

「俺も分かるのに時間がかったが、確かに奴の行動を見れば一目瞭然さ。もともとゴーレムは頭が良くない、せいぜい、動くものを攻撃するとか、その程度のことしか出来ないんだ。ゴーレムには音を聞いて敵を見つけたり、色なんかで判断する奴も居るが、この密閉された空間じゃ、音が反響して場所が判断しづらい。そして奴は光のある方にしか攻撃していなかったんだよ」

言われてみれば、最初にランプを持っていたのはシリウスだった。シリウスがランプを落した後、ちょうど紅とゴーレムの間にランプがあった。どうやら、ランプを目掛けていたらしい。

そして、暗闇の中に長い間居たゴーレムは、強烈な光で、感覚器官となる魔術の効果が消えてしまったのだろう。

「あ、でもどうして私の魔法が消されちゃったのかな？」

「それは……こいつのせいだろ」

シリウスはゴーレムの頭だった部分を、乱暴に蹴り崩した。なんと、中から箱のようなものが出てきた。箱を開けると、中から出てきたのは、幾重にも包帯で蓋をされた古びた壺だった。

「こいつは……やっぱりな。ウンディーネのみずがめ『吸炎之壺』だ。たとえばどんな魔法でも、炎だったなら吸収してしまう、超レアアイテムみたいだぜ」

紅の炎剣の威力は申し分なかったが、頭に仕込まれたこのアイテムのせいで無効化されていたのだ。足を破壊できたのは、おそらく頭から離れていたからだろう。

「さ、帰るぞ。ご丁寧に出口まで用意してもらったんだ」

「うん、」

シリウスは疲れたようにと壺を抱えて、ゴーレムの亡骸をまたいで、隣の遺跡に入っていた。

後に続いて紅も、天窓からの光の差す方へ、歩いていった。

第九話 盗賊と好み

隣に直結した、天窓から光の差す遺跡は、長い廊下のように続き、終わりが見えないくらいだった。さすがに天井から脱出するのは不可能な高さである。

シリウスと紅は並んで歩き、シリウスは小脇に大事そうに壺を抱えていた。

「ねえ、それどれ位の値段で売れるかな？」

「どうだろうな。でも指輪の時とは比べ物にならないくらいにはなるだろ」

シリウスもどこことなくうれしそうになっている。紅がいなかったらスキップでもしてしまいそうだ。

紅にはこの世界の物価がよくわからないので、どれほど貴重なものか分からないが、シリウスの様子を見れば、相当なレア物だった。分かった。

「……っ？」

シリウスが急に足を止め、腕を真横に突き出した。

紅はちょうどその腕にぶつかった。

「わっ、ちょっとシリウスどこ触って——」

「上だ！ 気をつけろ！」

急にシリウスが叫んだ。その次の瞬間、天窓の方から、チカッと光るものが風を切る速度で飛んできた。

「えっ？」

呆気にとられている紅を尻目に、シリウスが勢い良く剣を振りぬき、そのまま何かを打ち落とした。キンという金属音とともに、地面に、クナイのようなものが転がった。

「暗器の類か……？」

暗器とは、身に隠して簡単に持ち運べる武器のようなものだ。ち

ようどクナイなんかは、紅にとって漫画や映画等で忍者が使っているイメージがある。

「おい、あの天井を魔術で打ち落とせるか？」

「わかった、やってみる」

まだゴーレムとの戦闘での疲労が残っているが、炎剣の一本、それも威力も最小クラスのものなら発生させることが出来た。

さっきまでの要領で、炎剣を弓矢のように飛ばし、天井の一角、暗器の飛んで来た辺りを吹き飛ばす。

瓦礫が降ってくる中に、小柄な少女が混じっていた。

「いってて、なんだ？ 魔術師が混ざってたのか？ ちくしょう」
起き上がった少女は悪態をつきながらこっちを見た。

年は紅よりも少し幼く、ホットパンツにベルトを二本交差させて、そのベルトに色々な武器がさがっている。そのうえ、上着として羽織っているコートは膝ぐらいに届くぐらい長く、袖も手首まですっぽりと納まっている。ジャラジャラ鳴っているところを見れば、コートにも武器がいっぱい隠されているのだろう。

「お前、もしか盗賊か何かか？」

シリウスが警戒するように唸る。

「ふん、そんなこと見れば分かるじゃない。珍しい壺を持ってるわね」

「おい、ちょっと持ってる」

紅に壺を投げ渡し、剣を構えて前に躍り出る。

「ふふっ、行くよ？」

余裕たっぷりな盗賊にシリウスは大きく剣を振り下ろした。盗賊は後ろにバックステップを踏み、距離を取ると、袖からジャラジャラ鳴る鎖を取り出した。

次の瞬間には、鎖の端がシリウスの頭蓋骨目掛けて射出されている

た。

「クソッ!？」

咄嗟の判断で、剣を当て軌道をそらす、巧みに操作された鎖の先には分銅のようなものがついていて、剣ごとシリウスの体を絡め取ってしまった。

「ふふふ……残念でした」

盗賊の持つ反対側の端には草を刈るような鎌がついている。それをヒュンヒュン回して笑みを浮かべていた。

（ちっ、鎖鎌か。厄介だな……）

シリウスの剣とは相性が悪い。もしかしたらシリウスの武器に合わせて選択したのかもしれない。

（だが、まだまだ行ける!）

シリウスは自分の体に巻きついた鎖を大きく引いた。突然力が加わったため、鎖でつながっている盗賊もバランスを崩す。ここで安易に鎌を投げてしまっただけは意味が無い。盗賊も鎖を引っ張り立て直す。

「何っ!？」

シリウスが既に眼前の距離まで迫ってきていた。しかも距離が縮み、鎖が弛んだことで解けかかっている。

剣で鎖鎌を盗賊の手から弾き落とすと、そのままの勢いでのしかかるように押し倒した。馬乗りの状態になり、動きを封じる。

「まだまだよ」

盗賊は依然として余裕の態度を崩さない。

シリウスは反射的に身を振ると、つい先ほどまで顔があったところを、投げナイフが通過していた。どうやら袖に仕込まれていたようだ。

その隙を狙い、盗賊の蹴りがシリウスの腹に命中し、盗賊がシリウスの下から這いずり出る。

「ほら、もう疲れちゃったの？」

挑発する様に、今度はベルトに下げてあったマチェットと呼ばれる鉞に近いナイフを二本両手に逆手に持ち、立ち上がったシリウスの懷に飛び込んでくる。

剣で応戦するも、素早い動きと、時折他の武器も組み合わせるるので押され気味だ。しかもシリウスにはゴーレム戦の疲労が色濃く残っている。

そんなことから、シリウスは腹部に大きく切り傷を負ってしまった。

（このままじゃまずい……次で決める）

再び飛び掛ってきた盗賊に、咄嗟に足元にあったソフトボール大の石ころを蹴り上げた。

反射的にそれをナイフで防いだ盗賊に、シリウスは剣を横薙ぎに振る、しかし、これももう一本のナイフで受け止められた。だが、シリウスは片足を軸にし、身を半回転させ回し蹴りを放つ。防御手段がない盗賊はまともにこれを喰らい、二メートルほど吹き飛んだ。

「今だ、逃げるぞ！」

シリウスは振り向き、紅を探す、その姿が見当たらない。

「何？ おい、どこだ？」

「よーやく気づいた？ 案外抜けてるんだね」

盗賊が腹をさすりながら立ち上がった。

その姿を見てすぐにピンと来た。

（盗賊‘団’か……クソが！）

最近ギルドを悩ます黒蠍盗賊団。その一人であろうこの少女は何故一人で戦っていたのか。

その策にはめられたことに愕然とした時、遺跡をこだまするように、「シリウス」と呼ぶ声が聞こえた。間違いなく紅の声で。

「そっちか！」

声のした方、つまり遺跡の奥のほうへとシリウスは駆け出す。その後盗賊が続いた。

「させない！」

後ろから飛んできたクナイをかわし、紅の声のするほうへ向かう。遺跡の廊下の角を曲がったところで、十メートルほど先に、壺を持った紅ごと抱えた大男が走って逃げる姿を捉えた。

「コオラァァー！！ 女は捨てろって言っただろー！」

シリウスよりも先に盗賊の少女が叫んだ。事実紅を抱えて走るのはいささか苦勞である。

「し、しかしイネス姐さん、こいつなかなかの俺好みで……」

「知るかー！！」

大男の弁解も虚しく盗賊に一蹴されてしまった。しかも名前までばらしてしまっている。

そんな事情など無視してシリウスはペースを上げる。徐々に大男との距離も詰まり、あと少しで手が届きそうだ。

「！？」

その瞬間、横合いからブーメランが飛んできた。かろうじて前転し回避するも大男との距離が離れてしまった。飛んできた方向には、長身のひょろりとした、これもおそらく盗賊の一味であろう男が立っていた。

「くそ、お前らにかまってる余裕は無い」

無視して走ろうとするも、またブーメランによる妨害が来る。なかなか走り出せないシリウスは、紅が遠のいていくのを感じ、焦り始めた。

「シリウス、シリウスー！」

「うるさい小娘っすねー。そんなにアイツが好きなんすか？」

しれっと大男が、紅を抱えて走りながら聞いた。

「うるさい、良いから離さないよ！」

ガブリ、という痛々しい音とともに、紅は大男の手にかぶりついた。悲鳴を上げ手を離され、紅は地面を転がり、壺が手からこぼれてしまった。

コロコロ転がる壺は、後ろから走ってきた盗賊の少女、イネスが回収してしまった。

「ほら、さっさと逃げるぞ！」

「ううゝ俺好み……」

未練がましく紅を見る大男に、べゝと舌を突き出して答えた。

「大丈夫か？」

すぐに後ろから追いついたシリウスは、なんとかほかの盗賊を振り切ってきたみたいだ。

「うん、あの女の子が今壺持ってる」

シリウスは紅の手を取って走りだした。盗賊までの距離はあまり開いていない。

距離が徐々に縮まってくるが、「ほいっ！」っとフットボールのパスよろしくイネスが他の盗賊に壺を投げ渡した。

「くそ、かく乱作戦か」

シリウスが追いつこうとすればまたパスを回し、距離をあける。気がつくと応援の盗賊たちも現れ、イネスを含めた四、五人の盗賊が壺を回していた。

「ハア、ハア、もう無理……」

走りつかれた紅がその場にへたり込み、シリウスも並んで立ち止まる。

「ふふ、どうやらお疲れみたいだね」

イネスが息も切らさず二人の前に立ちはだかった。どうやら足止め係のようで、壺を持った盗賊たちはもう遺跡の奥に消えてしまっ

た。

「ふん、せめてテメエだけでもギルドに突き出して賞金にしてやる」
シリウスが剣を握りなおし、イネスを睨む。

「おやおや、ご苦勞なことで。残念だけれどもう足ががくがくに見えるのは気のせいかな？」

シリウスは連戦に続き、全力疾走を繰り返している。もう、本当に限界が近いだろう。それでも、せめて紅をかばうようにイネスと対峙する。

「小娘一人ぐらい、これくらいがちょうど良いのさ。オラ、構えやがれ」

再び緊張が走り、二人が火花を散らすほど睨み合う。

一瞬でお互いの得物が交錯しそうな気配の中、不気味な沈黙が包む。

そんな沈黙を破るように、「わああああああああ」という間抜けな叫びが二人と紅の横を駆け抜けた。

「お、おい、お前ら。どこへ行くんだ？」

イネスはうろたえた。何故なら彼女の仲間である盗賊が、壺を抱えたまま来た道を引き返しているからである。

「……ったく。なんなんだよ……」

微妙にしらけたシリウスに、「命拾いしたじゃん」とイネスはひやかす。「んだと？」とシリウスがまたも唸ると。

「あの……二人とも……」

蚊帳の外だった紅が、申し訳なさそうに声を出す。

「「ああん？」」

「後ろ……」

こんな時だけ仲良く後ろを振り向く二人。

その先には、今にも襲い掛かりそうな、四足歩行のゴーレムが構えていた。

「……逃げるぞ!!」

獲物に飛び掛る獣みたいな動きのゴーレムをかわしながら、シリウス達は再び走り出した。

第十話 換金と夕暮れ

「一体何体ゴーレムが出てくるのよ！」

「知るか！ 他の遺跡につながったんだからいてもおかしくないだろ！」

紅とシリウスは叫びながら走る。その後ろについていくようにイネスが続く。四足歩行の、さながらガゼルを目の前にしたチーターのように迫り来るゴーレムは、少しずつ三人との距離を縮めてきている。

「おい、炎の剣で何とかできないのか！？」

「無理！ もう魔力が無いみたいだし、振り向いて打つ隙が無いもん！」

お互い冷静さを失いながらも逃げ続ける。

「おい、イネス姐さん！ こっちから出れるぞ！」

遺跡の奥のほうから声が聞こえた。先に逃げていた盗賊団の仲間が、ロープを天窓から垂らし、先に脱出している。

「わかった、今すぐ行く！」

イネスはペースを上げ、ロープの垂れている方に走り出す。

「俺達もあれを使うぞ」

シリウスが紅に言ったが、「させないよ！」とイネスが遮る。

そんな三人を後ろから追いかけるゴーレムは、柱を薙倒しながら迫ってくる。ちょうど今も、柱を蹴散らし、岩石の破片が吹き飛んできた。

「痛っ！」

飛んできた岩石の破片が、イネスの足に直撃した。衝撃で、前のめりに倒れてしまう。

「姐さん！」

盗賊団の悲鳴とともに、ゴーレムは既に覆いかぶさるようにイネスを捉える。

「く、くそ……」

足が動かないのか、手で必死に後ろへ下がるも、ゴーレムから逃げることが出来ない。

ゴーレムの前足が、大きく振りかぶり、イネスは死を覚悟した。

遺跡の床を大きくえぐる一撃が振り落とされた。

目をギュッと瞑ったイネスは、最初何が起こったかわからなかった。てっきり感覚がなくなるほど潰されてしまうと思っていた。

しかし、徐々に状況を感じてくる。まるで誰かに抱えられているかのようだ。

「つて、貴様！ 何をしている！？」

「何をしているとは心外だな。助けてやったのに」

見ればシリウスが、イネスを抱きかかえてゴーレムの攻撃をかわしている。

「こんなところで死ぬのは面白くないだろ？」

「……ふん、お前に助けられる方が面白くない」

とはいったものの、シリウスも体力の限界が近い。ゴーレムの攻撃を回避したものの、まだ攻撃範囲を脱出できたわけではない。今もジリジリとゴーレムは攻撃を構えている。

「さて……もう賭けだな」

シリウスは立ち止まった。

ゴーレムの巨大な頭をじっと見つめる。

「お、おい、どうするつもりだ！？ 早く逃げろ！」

イネスがジタバタ暴れるのもお構い無しに、シリウスは動かない。やがて、先ほど地面をえぐったように、前足を振り上げて攻撃態勢に入る。

「さあ！ かかって来な！ 子猫ちゃん」

シリウスは剣を構え、ゴーレムは拳を落とし始めた。

途端、シリウスは剣を投げた。投擲された剣は、しかしゴーレムには当たらず、あさつての方向へ飛び、壁に激突して、キンという金属音を虚しく響かせた。

だが、ゴーレムの拳は剣が命中した壁の方へ振り落とされた。結果、無理な位置に拳を当て、バランスを崩したゴーレムは転倒してしまった。

「今のうちに逃げるぞ！」

シリウスがイネスを抱えなおし、そのまま走り去る。ようやくゴーレムが起き上がる頃には、二人は遺跡の外に脱出できていた。

「シリウス！」

遺跡の天窓から脱出した直後、紅が駆け寄ってきた。

「俺は無事だぜ……？」

「バカ！」

紅はそれだけしか言わなかった。

「……悪い、」

バツが悪そうにシリウスが呟く。

「……でも、やっぱりシリウスは悪人じゃないんだね。すごいお人よしだもん」

すぐに紅はパツと笑顔になる。なんだか調子の狂うシリウスだった。

「う、うるせえ」

「おい、お前。何で助けた？」

紅を押しつけてイネスが割り込む。

「なんでって……目の前で潰されるのなんか見たくなかったそれだけだ」

「ふん、……おい、壺をこっちに……」

イネスは盗賊団の仲間から壺をぶんどり、シリウスに押し付けた。「ほら、返してやる。今回の助けた分と、投げちまった剣の分。こ

れでちゃらにしてやる」

「おいおい、もともと壺だって俺のもんだぞ？　まあいい。それでお前の気が済むんだったらな」

「その代わり、次に会ったら、これの三倍分のお宝を奪ってやるからな！」

「はいはい、せいぜい気をつけとく」

適当に手を振り、紅に「おい、帰るぞ」　と言って去ってしまった。

「いいんすか？　お宝返しちまって」

盗賊団の一人がイネスに尋ねた。

「いいんだよ。大体の金は集まってる。それに……お頭ならそうしてたはずだよ」

イネスは、現在の黒蠍盗賊団でトップに立つ人間だ。少々若いのが玉に瑕だが。

「おい、お前ら。帰るぞ」

しばらくシリウスの後姿を眺めていたが、背を向けて部下達に言った。

遺跡を後にした二人は、再びゴトゴト揺れるバギーカーに乗り、ローアンバザーへ戻ってきていた。運転手はランプを壊したことを睨んだが、盗賊に襲われたことを言ったら血相変えてギルドに連絡を頼んできた。どうやら、もし盗賊のせいで何かあったら彼にも責任が降り注ぐらしい。

ともあれ、無事、お宝を手に入れ、街まで帰ってきた二人はまず、ギルドへ赴き壺を換金することにした。

「相変わらず混んでるな……ちょっと待ってろ」

「あ、待って」

紅は、銀行の窓口のようなカウンターに列を成している人達の中に、見知った姿を見つけた。同時に向こうも気づいたようで、手を振りながらこちらへ歩いてきた。

「よう、また会ったね。お嬢さん」

短い金髪で、映画俳優といわれれば納得してしまうようなルックスの青年。

「そういえば……まだ名前聞いていませんでしたね」

「ああ、俺はダルク・ハット。ダルクでいいよ」

「私は紅です」

「おいおい、こいつは誰だ？ お前に知り合いなんていたのか？」
シリウスが訝しげに割り込んでくる。

「ほら、喫茶店で話したでしょ。ギルドで声をかけてきた人がいたって」

そういうと、「ああ」と納得して、ジロリと見つめる。

「アンタが紅ちゃんの彼かい？ ……なるほどね」

「何なるほどだ」

「あ、いいや。気にしないでくれ。ふふっ、お似合いだぜ」

一触即発な感じの野郎二人を前に、オロオロしていると、ちょうど手前の窓口が開いた。係員の呼ぶ声に、シリウスはダルクを一瞥してから向かった。

「じゃあな。気をつけろよ」

ダルクも手を振り去ってしまった。

「はい、ダルクさんも気をつけて」

しばらくして、シリウスが小躍りしそうなぐらい上機嫌で帰って来た。それほど高価買取だったのだろう。

「とりあえずどっかで休むか」

続けざまに戦い、走り回ったのもうクタクタだった。ちょうど紅の服も取りに行くので、喫茶店『ドラゴンミスト』に向かった。そろそろ日も傾き始めている。

「いらっしやいませ〜って、紅さん!! 帰ってきたんですか」

店にはいると、リリイがお盆を片手に振り向いた。

店内はやっぱり、客が少なめで、落ち着いた雰囲気をかもし出している。

「うん。ちょうど今さっきね、服もう大丈夫?」

「はい、綺麗になってますよ」

そういうと控え室に飛び込み、なにやら倒すような音を一通り響かせた後、綺麗になった紅の制服をもって出てきた。

「はい、どうぞ!」

「あの…着替えるから控え室借りるね」

「ああ、はい!」

なんだか空回りしてるな、と思いながらシリウスは席についてコーヒーをすすった。

「ふう、やっぱりこっちの方が落ち着くね」

紅もいつもの制服に戻り、席に座って休んでいると、リリイがいつの間にか私服に戻り、鞆を持って控え室から出てきた。

「あれ、もうお仕事終わりなの?」

「はい、これから彼のお見舞いに行くんです」

リリイの彼は、事故で入院していたはずだ。その治療費を出すために彼女は必死に働いているという。

だが、そんな状況でもお構い無しに、好きな人に会いに行くということで、彼女はうれしそうだった。

「ねえ、私達も一緒に行っても良いかな?」

「本当に? 良いんですか!? とってもうれしいです!」

リリイはパツと明るくなり、手の平を合わせて喜んでるのが可愛らしかった。

「おい、達ってなんだ? 俺も行くのか?」

シリウスがつれないことを言った。

「いいよね？ リリイ」

「はい、大歓迎ですよ」

笑顔を向けられると反論できなくなってしまいうシリウスだった。勘定を済まして店を出ると、もう夕暮れだった。

「いいのか？ 大人数で押しかけても。怪我人だろ？」

「いえいえ、たかが三人ですし、彼もたまには私以外の人と話したいでしょうから」

そういう人なのだろうか、とシリウスは渋々納得し、彼が入院しているという病院へと歩き始めた。

第十話 換金と夕暮れ（後書き）

なんだかんだでもう十話です。
とつても書くのが楽しいです。
他の方が滞ってるのも知りながら……

第十一話 病院と風呂

ローアン・バザーの病院は、商業地の並ぶ通りを抜けた、街外れにあった。外見は、紅の世界のそれと大差なく、白を基調とした壁に、窓が規則正しく並んでいる。周りを囲う植物も、緑が生い茂り、活気ある街と比べて落ち着いた雰囲気を出していた。

唯一、違うところといえば、ぐるりを建物を囲う、背の高い無骨な塀が、頑丈な城を思わせた。

「彼は二階の角部屋なんです」

リリイは受付をするりと抜けて階段へ向かった。その後を紅とシリウスが着いて行く。シリウスが剣を買う前に来て正解だった気がした。

引き戸を開けると、病室には四つのベッドがそれぞれ四隅を陣取っていたが、使用されているのは一つだけだった。そのベッドの上には、一人の青年が上半身を起こしながら寝そべっている。

「リリイか……そっちは？」

青年を一目見て、紅は思った。シリウスと似た雰囲気を持っていると。

少し人と距離を持ち、ぎこちない人付き合いな感じだった。

「私は紅です、で、こっちがシリウス。リリイのお友達です」

シリウスはそっぽを向いて、少し後ろに下がったので、紅がまとめて言った。それにリリイが頷き、青年は警戒を解いたようにはにかんだ。

「そうでしたか……俺はジンです。リリイが迷惑かけてませんか？」

「いやあ……あはは、」

リリイは気まずそうに笑ったが、紅もなんだかおかしくて笑った。病室は簡素な造りで、特に何も無いというのが、ぴったりだった。

どうやら紅の世界ほど医療技術は高くないのかもしれない。窓から挿す夕日が、ベットの脇の小机の上におかれた花瓶を照らした。

「なにか変わったことは無い？」

「いいや、強いて言えばお前に友達がいたのが意外だったな」

リリーの問いに、ジンは軽く答える。

「もう、そんなこと……。えへへ、実は今日知り合っただけだね」
リリーは、ジンと話すときは凄く、可愛らしい少女のようだった。
実際は紅より年上なはずの彼女だが、その笑みは子供のように無邪気だ。

「あ、花瓶のお水替えてくるね」

リリーは花瓶を持って病室を出てしまった。

少し気まずい感じだったが、ジンは紅に声をかけてきてくれた。

「本当にありがとうございます。あの子、俺の医療費出すために必死に働いて……。そのせいで他人と遊んでられなくて。友達が出来たっただけで凄くうれしく思いますよ」

「いえいえ、私達も友達居ないですし」

紅にとっても、リリーはこの世界に来てはじめての友達といえるだろう。シリウスも含めて。

「それにしても、女に働かせてお前は一人ベットに寝転んでるのか？」

シリウスがやっと口を開いたかと思えば、怪我人には言うべきでない暴言だった。「シリウス、」と紅は制しようとしたが、ジンはお構いなしに返した。

「もちろん、俺だってそんなの心苦しいさ。あの子は働いてることを隠してるんだ、まあ、隠し事は下手なわけだが……。それでも、俺がやめてくれて言ったところであの子の思いは変わらないだろうし、こんな状況の俺でもやる事が……」

そこで言葉を切ったのは、足音が聞こえたからだ。

素知らぬ顔でリリーが花瓶を持って部屋に戻ってきた。さらに、

その後ろから白衣を着た、50代後半の白髪交じりで人がよさそうな笑みを浮かべた医者が入ってきた。

「おや、こちらの皆さんは……?」

「はい、私の友達です、ヴェッセル先生」

ヴェッセル医師は、片手にカルテを持ち、何かを走り書きしながら聞いた。

「見たところ、旅人かい?」

眼鏡をかけ、マジマジと二人を見つめた。視線を逃れるようにシリウスが身を振った。

「すごい、何で分かったんですか?」

「はっはっは。簡単だよ。君の服装は変わってる。この辺りじゃ見かけないし、リリイ君の友達なのに今まで病室に来なかったりね。まあ、本当は勘なんだけれども」

愉快そうに笑うヴェッセル医師は、リリイとジンに向きなおした。「それで、大事な話って……?」

「うむ、実は、街の理事会からね、特別労働者補助金が入ってね」「特別労働者補助金? ジン、知ってる?」

「俺に学が無いの知ってるだろ? だからあんな工場で働いてたんだ」

どうやら現地に住んでる二人でも知らないらしい。当然、よそ者二人も知るはずが無い。

「うむ、これは街のほうから出る補助金で、不当な重労働に強いられる人たちの救済措置みたいなものだが、これが君達に出ることになってね。そのお金で手術が出来るんだよ」

「ほ、本当ですか……?」

リリイにとっては願っても見ないような幸運だった。これのおかげでこれまでの苦労がやっと報われることになる。

「安心したまえ。明日にでも手術は出来る。お金はかかるがそう難しい手術でも無い。きっと成功する」

「よかったね！ リリィ」

「ああ、はい。……」

まだ現実と信じられないのか、震えているリリィに、ジンは対照的に落ち着いて訪ねた。

「どうして今更出たんですか？」

「どうも、理事会の方でゴタゴタしてるそうだけど、僕は詳しくは分からないなあ。でも実際振り込まれているんだよ」

釈然としないのか、じっと考え込んでいたが、リリィが大喜びしている様を見て、彼も釣られて笑い始めた。

病院を出ると、もう夜になっていた。結局、あの後も面会終了時間まで話しこみ、少しはシリウスも打ち解けた……ように見えた。

荒野の真ん中にあるローアン・バザーの夜は、昼とは打って変わって、よく冷え込む。初めは肌寒さが心地よかったが、徐々に寒くなり始めた。

通りには依然として人があふれ、所々に屋台が出ている。本当にお祭りみたいな光景だった。

「そろそろホテルでも取りに行くか」

シリウスは特に感慨も無いのか、眠そうな顔をしてゆっくり歩いている。紅も、今日はさすがに疲れてしまった。早く、ホテルで休みたくなってきた。

「もう部屋は取ってあるんですか？」

リリィは家に帰るので、途中でお別れになるだろう。

「いいや、そういえば取ってなかったな……」

「ええっ！？ この街は外から来る人も多いですから、部屋はもう満室になってるのがお決まりなんです……」

「なにい!？」

シリウスもびっくりして大声を上げた。

「部屋、もう満室なの？」

まだホテルに行つてないのでわからないが、言われてみれば、通りに面しているホテルの部屋はすべて人が入つてるように見えるし、何より現地の人の言うことだ。間違っているはずが無い。

「どうしよう!？ 今日野宿!？」

死ぬ!？ という感じを悟った紅は慌てふためき、シリウスは失態を後悔して座り込んでしまう。

「すいません、遅くまでお見舞いに付き合ってもらつて」

「あ、いや、リリーのせいじゃないよ？」

「そうだ、なら私の部屋に泊まりますか？」

「いいの!？」

「大歓迎ですよ」

リリーの部屋は、割と新めのアパートの一室で、広めのワンルームの部屋だった。

たしかに、一人暮らしの女性といえど、必要最低限の家具しか置いていないところを見ると、遊びよりも仕事を優先させてきた感じはある。

せつせと布団を準備するリリーの後姿は、心なしか楽しそうだった。

「私は床で寝るので、ベットとソファを使ってください、」

「ええ!？、いいよ。リリーがベット使いなよ。私が床で寝るから」

「おいおい……床で寝るのは俺で良いっての。女性陣が無理すんなつて」

三者譲らず、床大人気だった。

「じゃあ……みんな床で寝ます?」

結局、それに落ち着き、シリウスはさっそく窓際の端の場所を陣

取って、腕を枕に、ねっころがっていた。その隣に、紅、そして反対の端はリリイが寝ることに。

「あ、お風呂使います？」

「あ、いいねえ。リリイ一緒に入る？」

きやあきやあ楽しそうに騒ぐ女性陣に、背を向けたまま寝続けるシリウス。

「……覗かないでね？」

「覗くかボケェ！」

とは言ったものの、男の潜在本能は素直だった。

依然として、寝た姿勢のまま、窓に顔を向けてはいるが……

（クソ……何故こんな時に限って、やけに音が気になるんだ……？
アホか俺は。……ちっ、声が聞こえる……。ってなに聞いてんだ
よ俺はアァァ！！）

一人、修羅場のシリウスだった。

そうしている間にも、「すごい、リリイ、やわらかいですなあ」

とか、「やめてください……ふふっ」とか、……

背に汗がにじむ。

しかし、微動だにしないシリウスだった。

「シリウス？ もう上がったよ？」

どうやら風呂から上がり、若干頬が高揚した紅が、シリウスの肩を叩いた。

「ああ、わかった」

何故か汗びっしょりになっているシリウスだが、勝ち誇った顔をしていた。

（嗚呼……、俺は男のプライドを守りぬいたッ！ 紳士の中の紳士だッ！）

小一時間、まったく動かなかったシリウスは、枕にしていた腕が

痺れていた。

シャワーで体を流すだけで済ませ、服を着なおすと、女性二人はもう布団に入っていた。

「もう電気消しますけど、良いですか？」

「ああ、俺ももう寝る」

シリウスは今日一日の疲れがどっと出てきた。

「あ、そうだ。明日のお昼過ぎにバスが出るんだって。それでここから北の町まで行けるんだって」

「北の町といえば……フースカの町か。たしかに、荒野はあの辺まで続いていたな」

魔動力自動車はこの辺りの荒野しか走れない。それほど性能が悪いのだ。草原では草が絡まり、山道では、坂にずり落ちる。

ゆえに、行動範囲は荒野の続く限りにしかない。

「そうか、ならそれで行けばいいな。午前中に買い物を済ませとくか」

「うん、リリイが案内してくれるって」

「いいのか？ アイツの手術があるんだろ？」

「あ、はい、でも手術も昼からで、ちょうどバスが来る前ぐらいには終わってると思いますよ」

リリイが電気を落とし、シリウスの「そうか……」という声も、闇に吸い込まれた。そのまま意識も闇に落ちていった。

第十二話 彼と尾行

翌朝、部屋には朝日が差し込んだ。

顔を照らされたシリウスは自然と目が覚める。

(ん……暑っ)

反射的に布団を蹴り、退けた。何故か、紅の声で「ふござ……」と聞こえたのは、おそらく蹴った布団が顔に当たったのだろう。

シリウスが身を起こし、壁にかかった時計をみる。まだ七時前だが、シリウスにとっては寝すぎたくらいだ。改めて部屋を見回せば、女性陣二人はまだ深く眠っている。

「さて……」

おもむろに立ち上がり、二人をまたいで部屋を出た。

「次はどこへ行くの？」

時間は九時を回ったところ。紅とリリィが目を覚ました後、軽い朝食を取って、さっそく街へ買い物へきていた。午後にはジンの手術の後、シリウスと紅はバスを使い、ローアン・バザーを出発する予定だ。それまでの時間は、街でゆっくり散策と行くわけだ。

「そうですね……武器屋が向こうの方にあったはずですよ」

通りは今日も活気にあふれている。昨日まではゆっくり見ている暇が無かったが、良く見れば多種多様な怪しい店まで軒を連ねている。

その中でも、大きい規模を持っているのが、武器屋の一角だ。

「剣を買うぞ。二人は外で待ってるか？」

「いや、ついてく」の返事で、三人は武器屋の戸をくぐった。店の内部構造は、紅の世界で言う楽器屋のギター感覚で剣が並んでいる。他にも、斧や槍といった武器から、盗賊が使っていたようなマニアックな暗器なんてものもある。

「へえー、いろいろあるんだね」

ちなみに、紅が眺めているのはグラディウスという短く、太い剣である。

店の中には、人が多く、老若男女関係なく、武器を眺めている。ベテラン剣士のような老人や、盗賊みtainな格好をした女など。

「この変わった剣は何でしょう？」

リリィが興味深く観察しているのは、フランベルジェという波打つ刃の長剣だ。

「おいおい……あんまり騒ぐなよ？」

そういいながら、シリウスはエストックという剣を選び、レジへ持っていく。価格は比較的安価の剣を選んだのは、旅先でどれくらい費用がかかるか分からないからだ。

武器屋を後にした一行は、次に魔術師用品店へと向かった。この街にも一応魔術師達はあるのだが、そもそも魔術師自体、珍しい存在で、力任せに出稼ぎに来るこの街ではなおさらだ。つまり、魔術師用品店は、自然と小規模のひっそりとしたところになってしまった。

店内は薄暗く、魔術師用の雑貨がごちゃごちゃ並んでいる。

「ローブぐらいは必要だろ？」

紅は一応、魔術師に分類されるが、その中でも特異な存在、魔術の詠唱を知らない。普通は魔術の発動の補助として、呪文を唱えたり、魔法陣を刻んだ装備品に魔力を通すなどの工夫をする。しかし、紅はそんな理屈をすっ飛ばして、魔術を唱えることが出来るのだ。

「まだ炎の剣しか出せないけどな」

「む、だってあれの印象が強いんだもん。出しやすいみたい」

とは言ったものの、ローブなどの装備は、魔力を通すと防御力を向上させる効果がある。

「お前は魔力も結構あるみたいだし、あったほうが良いだろう」

適当に、ハンガーでかかったローブを漁るシリウスを尻目に、紅はリリイと別のコーナーへ行く。そこには杖が並んでいた。

「やっぱり魔法使いといえばこれだよ」

そういいながら適当に一本を引き抜く。クルクルとバトン見たいに回し、もてあそぶと、ポツッと火の粉が飛び出した。

「わわっ、凄いですねえ。どうやったら出るんですか？」

尊敬のまなざしをリリイから受けたが、今のも偶然暴発してしまっただけである。むしろ恥ずかしいぐらいだ。

「どうしてだろ……ほんとに」

魔術を唱えるたびに、いつも痛感する。異世界に来てしまったという事を。別に悲観しているわけではない、むしろ楽しいぐらいだ。ただ、元の世界のことが気にならないかといえば、気になるに決まっている。気になるというよりも、恋しいのかもしれない。

「でもね、結構簡単だよ？」

リリイに向けて、明るく言う。

「たぶん、リリイも使えるって思えば使えるんじゃないかな。結局は気持ちの持ちようだと思うよ？」

「ふふっ、そんなものですかね」

——結局は、前を見て進むしかないのだ。

「そろそろ休憩するか？」

あれから、街を端から端まで歩き回り、散々買い物をした挙句、疲労と暑さで足並みが遅くなってきた。

適当に傍にあったアイスクリーム屋の屋台で出来た日陰に這入っ

た。

「アイス食べたーい」

紅がいかにも気だるそうに催促した。シリウスが、「俺が買ってきてやる、何が良い？」と聞けば、「バニラ」「私もそれで良いです」と、遠慮することなく即答した。

そしてすぐに、シリウスはアイスを三本持って返って来た。

「ほら……」

バニラアイスを二人に手渡した。

「うん、ありがと。……」

「どうした？」

紅がなにやらこらえるような顔をしたので、怪訝そうにシリウスが訪ねると、ふふっ、っと笑った。

「シリウスってストロベリーが好きなんだね」

「なっ、い、いいだろ。別に」

男は黙ってバニラ。とでも言うのかと思っていた紅だったが、どうやら変な思い込みだったようだ。

「ふふふっ……仲が良いんですね。二人とも」

リリイは、どつきあっている二人を、保護者のような目線で眺めていた。

アイスクリーム屋台を後にした三人は病院に向けて歩き始めた。昨日、来た時は夕方だったので人通りが少なかったが、今は同じく見舞いにやってきた人々がまばらに見える。

「どうしたの？　なんだか浮かない顔して」

病院の門をくぐったところで、リリイが俯き、考え事をしているように見えた。

「いえ、……ただ、私の都合よく行き過ぎてるといえるか……」

リリイにとっては、友達が出来たこと、彼の手術費が支給されたこと、さらにその翌日には手術がされること。まるで、

「誰かが仕組んでる、とでも言いたいのか？」

シリウスが言葉を継いだ。

「ええ、」

「そんな、心配しすぎだつて」

そんなことを話しながら、病院に入り、病室の扉の前まで来た。

真っ白な引き戸の前で、一呼吸置き、やがてドアを開いた。

「ジン……？」

病室には誰もいなかった。

いつも、リリイが訪ねる時はいつでも彼がいたはずの場所は、なかった。

「リリイ？ あれ？」

後が続いて病室に入った紅も異変に気がついた。

「……チッ、どうなってんだ？」

「もしかしたら、外に出てるだけかもしれないよ？」

紅はそう言っていると、病室を飛び出し、看護婦達の居る受付に向かって走っていった。リリイは、彼の使っていたはずのベットの脇にある小物棚の上にある花瓶を眺めている。昨日、水を入れたそれは、あいも変わらず、そこにある。

「外に出られるはずが無いんです……彼はひとりで立ち上がることも出来ないんですから」

独り言のように呟く。

「落ち着け。まだ行方不明になったわけじゃない、今あいつが聞きに言ってるから、」

シリウスは諭すように言うが、彼自身も落ち着いていない。（くそっ、話が変な方向に向かってやがる……。確かに、誘拐はあるかもしれないが、何で怪我人なんか……）

その後、受付から返って来た紅いわく、ヴェッセル先生も今朝から行方が知れないという。しかし、最後に見かけた人の話によれば、二人は車椅子で外に出たらしい。手術前の気分転換だそうだ。

病院の周りには、遊歩道で出来た並木道がある。そこには、同じように車椅子と、それを押す、看護婦などが見られる。

「いないね……遠くのほうまで言ったのかも」

紅も明るく振舞っているが、それよりリリイの動揺が心配だ。今にも倒れそうなくらい青い顔をしている。

そんな中、シリウスは紅の肩をつつき、傍によって耳打ちした。

（おい、自然な感じで後ろを振り向いてみる）

（どうしたの……？）

言われて紅が振り向くと、後ろには誰もいない。

（よく見ろ。木の陰、女がこっちをつけてる）

よく見れば、確かに誰か木の陰に立っている。まさに、こちらを尾行しているかのようだ。

その時、木の陰から、女が出てきた。こちらが見ていることには気づかない風で、その格好は、ラフな服装に、ベルトからナイフを下げ、いたるところにジャラジャラなる金属が仕込まれている。

（盗賊！？ まさか……）

その女は初めて見るが、その格好は昨日遺跡の中で遭遇した盗賊と酷似していた。さらに、その女は街の中で度々見かけた気がする。それも、リリイの傍で。

（いいか……俺の合図で飛び掛る。お前は魔術で威嚇しろ）

（うん、）

その口ぶりから、ジンの行方不明は、盗賊による誘拐ということに納得しているようだ。

向こうはまだ、気づいてない。

少しずつ、シリウスと紅は歩くペースを落とし、リリイはそんな二人に気づかず、遊歩道の三メートル先を一人歩く。

(三……二……一……今だ!!)

急に二人は振り向き、紅は炎剣を最小限の力で発射する。盗賊の女はギョツとしてナイフを構え、炎剣を横に飛び回避する。

しかし、着地した隙を突くようにシリウスが飛び掛る。剣でナイフを弾き、女盗賊を押し倒し、馬乗りになる。ジタバタ暴れる女盗賊を何とか押さえつけると、シリウスは叫んだ。

「おい！ ジンの野郎をどこへやった！？」

「黙れ！ 逆だ！ 私が攫ったのではない！！ 私はリリイの護衛をしていたんだ！！」

力いっぱい叫んだ女盗賊の声を聞いた途端、はじけるように飛びのいた。

「クソッ、リリイ！？」

振り向いた先、びっくりした顔をこちらに向けてたたずむリリイが居た。

だが、その次の瞬間、遊歩道の植木の中から、黒服の男が飛び出した。そして、抵抗する暇も無く、リリイは口元に布を押し付けられ、そのまま黒服の男に抱かれ、植木の中に姿を消した。

「リリイ！！」

紅が炎剣を放ったが、はずれ、地面をえぐった。

「追いかけるぞ！！」

三人は黒服の男を追って、植木をくぐり抜けた。

第十三話 裏と裏

視界は真っ暗だった。いや、正しくは目隠しをされていた。

腕を車椅子の背もたれに回すように縛られ、足は元から感覚が無いが、おそらくこちらにも縛られているだろう。

「ここはどこだ？ 何をしようとしている？」

ジンは、車椅子を押す人物に向かって尋ねた。

「……………」

返事は無い。辺りには、車椅子を押す、カラカラと言った音だけが反響していた。

「答える気は無い、か。まあいいだろう、そっちがその気なら俺も好きなようにするさ。ヴェッセル先生」

途端、車椅子を押す手が止まった。

「それから、ここは街の北部の倉庫辺りか？」

そして、ジンの視界を覆っていた目隠しが取り払われた。辺りは薄暗く、わずかに隙間から日差しが差し込んでいる。

ここは、まさしくジンの言った通り、倉庫の中だった。倉庫といっても、今は使われていないようで、埃が舞い、むせ返りそうになる。その一角に、簡易ベッドと、なにやら手術の道具が用意された小机がある。

車椅子を再び押し始めたのは、他でもない、ヴェッセル医師だった。

「何故気がついた？」

きわめて冷徹に、事務的対応のような口調で彼は聞いた。普段の彼とはまるで別人だ。

「簡単さ、ここ空気は乾燥して埃っぽい。間違いなく倉庫だ、俺は知ってる。移動距離的にもジャストだ。そもそも俺は前からお前

が怪しいと思っていた。お前が主治医を勤めていた患者は俺以外にも、あの病室に三人はいた。その誰もが、手術を無事終え、退院した」

「そのどこがおかしいのだ？」

「おかしくはなかった。だから俺も最初は気がつかなかった。けどな、一つだけ患者には共通点があったんだ、身内が居ないんだよ。皆地方から来た出稼ぎや、家族には言えないような仕事の奴らばかりだ。まるで……退院したら、誰も行方を知らないような」

ジンは、拘束されたまま、朗々と喋る。決して相手に主導権を与えないような存在感がある。それをヴェッセルもむっと黙って聞き続ける。

「お前のことも少し調べさせてもらったぜ。元は王都で闇医者だったんだってな。こんなところに居るって事は、なんかヘマでもしたのか？」

「……自分の歩をわきまえろ。小僧」

ヴェッセルはぼそぼそ呟くと、二人を取り囲うように、一様の黒服をまとった集団が集まってきた。誰もが武器を手になっている。

「貴様は所詮、これから死ぬのだ。その亡骸を我らが効率よく処分してやる。それだけだ」

「へえ、今までの患者達も内臓を売り飛ばされてきたのか。……怪我人を絞め殺して、卑怯なやり方だよな」

減らず口を叩き続けるジンを、ヴェッセルは車椅子ごと蹴り飛ばした。破裂音にも似た衝撃が、倉庫の壁に反響し、辺りに緊張が走る。それでもジンは顔色を変えなかった。地面に顔面を押し付け、身動きが取れないまま、シニカルな笑みを浮かべていた。

「気に食わん」

続けてヴェッセルは、身動きが取れないジンの顔面を蹴り飛ばす。車椅子に縛られているため、首が仰け反るだけだが、悲鳴一つも上げない。

「ほらほら、どうした？ 苦言でも言ったらどうだ？」

更に、ヴェッセルはジンの脇腹、を蹴る。車椅子と体が反転し、転がるが、ジンは「フー、フー、」と息を吸い込み、堪える。

「餓鬼が。死よりも痛い目にあわせてやる」

見た目、声色も至極冷静なヴェッセルだが、その心中は燃えるように滾っていた。今までのターゲットは、この状況になると、泣き喚き、まるで、まだヴェッセルが優しい医師という仮面を被っているのだと勘違いしたまま縋り付いて来る。それが彼にとっては快感だった。

（クソッ、何を落ち着いていられるのだッ、所詮、貴様の身内はあの小娘一人、それも後に処分すれば済む様なものだ、何の助けにもならん）

なのに、いまだに余裕を見せるジンが、たまらなく憎い。

今度は、患部である足を踏みつけた。感覚はないが、衝撃的な痛みがその神経に訴える。足が炎で炙られているかのようにジリジリと痛い。痛くて痛くて痛い。

「くっ、……そんなもんかよ」

明らかに虚勢を張るジン。それをじめつとした目で見下ろして、ジンから足を退けた。

「ふん、その威勢がどこまで続くのかね……おい、メスをよこせ」
ヴェッセルが命ずると、黒服の一人が前に歩み寄り、白銀に反射するメスを手渡した。それを手にしたヴェッセルは、にんまりとする。

「いつまで耐えられるのか……見ものだ」

「おいおい、マジで俺がやられっぱなしだと思ってんのか？」

ジンは鋭く口笛を鳴らした。

途端、バタバタと音が響く。と同時に、倉庫の扉、窓、換気扇など、侵入できる限りの穴という穴を突き破り、人が流れ込んでくる。盗賊達だった。多種多様の格好と武装をした、何十人もの盗賊が、奇襲攻撃を仕掛けてきた。黒服の男達は反応が一步遅れ、攻撃を正

面から喰らう。

「何者だ!？」

突如の奇襲にヴェッセルも慌て、その隙に、ジンの車椅子を小柄な少女が立て直し、距離を取って退避させた。その間にも、ジンの腕を縛る縄を切り落とし、腕を解放する。

「ふふふっ、つまりこういうことさ。ありがとう、イネス」

付け加えるように言って、ジンは高らかに笑う。

「俺が、黒蠍盗賊団首領、ジーク・アンドレアだ。残念だったな。お前はもうお終いだ」

「ッ!?!？」

まるで挨拶代わりとでも言うように、ジン、もとい、ジークは投げナイフを放った。直線軌道を描き、ヴェッセルの腕に直撃する。

「さあ、反撃開始と行こうか!」

高らかに宣言するジークに、ヴェッセルは背を向けて後ろに逃げ出した。ちょうど、盗賊が倉庫に侵入したときに蹴破って解放された扉がある。

「逃がすな!」

ジークの指示に、イネスが反応する。素早く、ぶかぶかの袖から鎖鎌を取り出し、分銅がついた方を射出する。風を切る速度で、分銅がヴェッセルの頭部を捉えた。

ヴェッセルは辛くも体を振り、背後からの攻撃を回避したが、頭の皮膚を数ミリ剥ぎ取られた。数ミリの皮膚でも、強引に剥ぎ取られれば、血が噴出す。

「ひ、ひい……」

その場で足をもつれさせ、ヴェッセルは床に這いつくばった。その隙をイネスは逃さない。

分銅を回転させ、勢いを得て、今度は鎌の方を振り下ろす。処刑

のギロチンのように、息を飲む暇もないほど、素早く降りてくる刃を、ヴェッセルはただ見ていることしか出来なかった。

一閃、横薙ぎの剣筋が奔った。

次の瞬間には、イネスの放った鎖鎌の鎖が分断され、鎌はあさつての方向へ吹き飛んだ。

「何だ？」

その様を観察していたジークにも、一瞬何が起こったのかわからなかった。しかし、その答は至極簡単なものだった。

「ご無事ですか？ 主」

盗賊二人組みと、床に這いつくばるヴェッセルの間には、一人の黒服の男が立っていた。その手に握るのは、白銀に輝く、細身の剣。「カタナ、か。面白い、お前は他の奴らとは違うようだ」

倉庫では依然として、盗賊団と、ヴェッセルの部下の黒服達が交戦中である。しかし、徐々に盗賊団が優勢になりつつある。

「馬鹿者、もっと早く来い！ まったく使えん、」

生命を救ったものへには、信じられないような言い草だが、黒服は顔色一つ変えない。

「承知しました。では……参ります」

改めて、イネスにむきなおし、男はカタナを構える。

「橙国出身、剣士クルウ。いざ、参るッ！」

一飛びで、イネスの眼前まで距離を詰めていた。
「！？」

反応が追いつかない、素早く、無駄のない動作で繰り出される剣さばきは、様々な武器に対応し、その弱点の武器をチョイスして戦うことが出来るイネスの思考が追いつかないほど変幻自在だ。

加えて、クルウの戦いには体術が含まれている。小柄のイネスに

は相性が悪い。

「イネスッ、下がれ!!」

斬撃がイネスを捉える寸前に、横から、ジークが投げナイフで牽制し、一旦の隙を作る。

その間に、他の場所で交戦していた盗賊団の仲間が二人の下に集まった。

「成程、数で勝負か。気に入らんが有効な策だ」

クルウのほうも、攻めあぐねているようだ。

暫しの逡巡。

その静寂は、まったく別のもので破られることになった。

「ハハッ、もっと早くから出せばよかったなア」

ねっとり、粘りつくような不快な声の主はヴェッセルだった。

いつの間にか、倉庫の側部にある階段を登り、二階部分の内側に突き出したバルコニーのような部分に立っている。

「ジ、ジン……」

その腕には、首元にメスを突きつけられ、それでも怯えるのではなく、驚愕に目を見開いた、

リリィがジークを見下ろしていた。

第十三話 裏と裏（後書き）

更新が滞っていて申し訳ありません。

事情があり、十月まで、あまり更新できないかもしれません。
頑張りますのでよろしくお願いします。

第十四話 剣と赤

「クソッ、リリィ!？」

ジークは驚愕に目を見開いたリリィを見上げた。

(チッ、護衛をつけていたつもりだったが、出し抜かれたか……ま
ずい、いつからここに居たんだ?)

ジークは、先ほど自分が黒蠍盗賊団の首領であることを宣言した。
もちろん、リリィはこの事実を知らない。知らせてはいけない。

だが、彼女の顔が、メスを突きつけられた状況に対する恐怖では
なく、驚きに満ちていることが、すべてを示している。

「畜生ッ、……」

ジークは歯噛みした。あまりにも不甲斐ない自分に対して。

「武器を捨てろ、そのまま跪け」

ヴェッセルは頭から血を流し、ゼエゼエしながら、しかし狂喜に
満ちながら吼える。

その姿をクルウはじつと見つめ、カタナを腰の鞘に収めた。

「皆、武器を捨ててくれ……すまない」

形成逆転された。盗賊団は誰一人反発せず、武器を捨てる。ただ
一人、イネスが袖から隠しナイフを構えようとしたが、「ダメだ」
の一言でジークに嗜まれてしまった。

「ククク、そうだそうだ。もっと絶望しなければ……どの指がいい
?」

「何?」

「切り落とすのはどの指がいいのか聞いているんだぞ? ほら、言
え」

ヴェッセルはメスをちらつかせながら、ジークを脅した。

その間にも、盗賊団の味方たちは黒服たちに拘束されてゆく。

「くそっ……」

何もいえないまま、ジークは黙ってしまふ。その姿を見下して、ヴェッセルは続ける。

「早く選べ、どの指がいいんだア？　早くしないと……」

そういつて、ヴェッセルは腕をリリイの首にきつく絞め、もう片方の手で握っているメスを、リリイの真っ白な腕の上を滑らせた。

白い腕の上を、銀に反射するメスがなぞり、その後には赤い筋が通る。じんわりと赤い液体があふれてくる。それに比例してリリイが呻き、悲鳴を上げる。

リリイの腕には、燃えるような痛みがあるに違いない、しかし、ジークはただ見ていることしか出来なかった。

「ハッハッハア！　そうだ、もっと絶望しろオ！！」

リリイの腕からボタボタ血が流れる。必死にもがき苦しむが、ヴェッセルは離さない。

「やめてくれえ！！」

ジークは叫ぶが、ヴェッセルはニヒルな笑いを浮かべ、リリイは瞳に涙をためる。

「そうだ、せっかくだから条件次第ではこの小娘を解放してやらんでもないぞ？」

「何だって？」

ヴェッセルの気分次第の軽口に過ぎないが、縋りつくような思いでジークは尋ねる。

「この小娘は解放してやる、その代わり、盗賊団の奴らの首を今刎ねる」

「ッ！？」

ジークは言葉を失った。改めて見回せば、盗賊団の仲間達は全員手足を縛られ、黒服のヴェッセルの部下に、武器を突きつけられている。

リリィに気をとられ、仲間の方を気にしている暇がなかった。

「さあ選べ、仲間を取るか、女を取るか」

一瞬、ジークは悩んでしまった。たった一人の人間か、数多くの人間か。どちらを取ればいいのかなんて考えずとも済む事を、考えてしまった。

「……皆、俺、どうすればいいんだ……？」

振り向いたジークに、目を合わせるものはいない。

「俺、……」

「早くしろオ!! どうなってもいいのか？」

リリィの腕に、一筋の赤い傷口がある、その傷口と交差させるようにメスを走らせる。十字型の傷から、ドクドクと血があふれ出す。

「うっ、っつ、痛……。あっ」

耐え切れなくなり、リリィの瞳から大粒の涙をこぼす。それでも彼女は、助けを求めようとはしない。

「畜生が……もういい、もういい、俺を殺せ!!」

「ダメだア、お前は絶対殺さない、そこで見ていろオ。ククッ」

心底楽しそうなヴェッセルは、メスを振りかざした。まるで、肉にフォークを突き刺そうとする子供のように。そしてそれは、リリィの顔を目掛けている。

「やめろおおおおおおおおおおお!!」

紅い閃光が駆け抜けた。

それは、真っ直ぐにヴェッセルの手に持つメスを打ち抜いた。

倉庫の入り口から放たれたそれは、炎の剣だった。

「グヌウ、な、何者だ!？」

寸分の狂いもなく、ヴェッセルの手を命中した。少しでも狙いが外れれば、リリィの顔面に辺り、それだけで大怪我をさせてしまう

程だった。

だが、術者はそんな些細なことは、心配する必要がないとでも言うかのような面持ちで、倉庫に踏み入れた。

「紅さん、シリウスさんも!!」

リリーの表情がパツと明るくなった。依然として腕からは血が流れているはずだが、そんなことはお構い無しに喜ぶ。

「助けに来たよ。みんな!」

紅が大声を倉庫に響かせる。

その声を皮切りに、盗賊たちが一斉に動いた。もうヴェッセルは凶器を持っていない。何も恐れることはない。

「ふう……もっと上手に縛りなさいよ」

イネスは、いつの間にか手足の拘束が解けていた。彼女だけではない。もはやすべての盗賊が、拘束を解いている。

「今度こそ、痛い目見せてあげる」

さっき、全員が武器を捨てた。今も倉庫の床には武器がゴロゴロ転がっている。しかし、盗賊団の武器は一つではない。おのおのが袖やら、裾やらから暗器を取り出し、黒服たちと交戦を始める。

「うろたえるなァ! 捕まえろ!」

「うるさいよ、おじいさん」

ヴェッセルが目を向けると、既に紅が眼前に立っていた、炎の剣を構えて。

「こ、この小娘を巻き込むつもりかァ!？」

「えいっ!!」

そのリリーも力いっぱいヴェッセルを押し飛ばした。腕に大怪我をしていても、老人、しかも炎剣に怯えた状態を、押し飛ばすのは苦ではない。

そのまま階段でつまずき、二階の高さからゴンゴン体をぶつけて転がり落ちる。

「よう、クソ爺」

ゼエゼエいいながら立ち上がると、目の前にはシリウスが見下ろしていた。

「ッー!？」

急いで、這いつくばる格好で逃げ出し、倉庫から飛び出した。

「逃がすか！」

「させん」

追いかけようとするシリウスを、クルウがカタナを構えながら遮った。

「シリウス、先に追いかけてる！」

その二人を尻目に、紅と、黒服を蹴散らしたイネスがヴェッセルを追い、外に出る。

ジークとリリィを、紅たちとともに倉庫に入ってきた女盗賊が安全な場所まで退避させていた。

「いいのか？ 爺を追いかけて行っちゃったぞ？」

シリウスだけを遮ったクルウは、まったく焦る様子が見えない。まして、笑みまで浮かべている。

「ふふっ、あの爺が死ぬのは本望だ。俺には関係ない、ただ、お前と戦るのは楽しそうだ」

「ちっ、戦闘狂^{バイサーカー}かよ。くだらねえ」

はき捨てるシリウスに、返事のように、横薙ぎの一閃を放つ。

剣を抜き、その一撃を受け止め、受け流す。

「戦闘狂とは少し違うな……俺は刃なんだ」
「知るか」

クルウは更に距離を詰め、シリウスは縦切りをかわした。しかし、間髪いれずに、クルウの回し蹴りがシリウスの顔面を襲う。これを膝を屈めて回避したが、カタナによる追撃を恐れ、一旦さがる。

クルウはカタナを、突きの構えにし、シリウス目掛けて射出する。

これを剣で弾き、軌道をそらす、クルウの膝が、アッパーカット
よろしく、突き上げられる。腕を使って防御するが、クルウの狙い
は、そこからのつま先を使った蹴りだった。

ノーガードの鳩尾につま先が突き刺さる。思わず、身を丸めるシ
リウスの背中に、カタナを握っていないほうの腕が振り下ろされる。
「かつはあっ！」

肺の空気が吐き出され、上手く呼吸できない、しかし、精一杯の
力を振り絞り、剣を振り回す。クルウが攻撃を避けるため、自然と
距離を取る。

「ふん、そんな程度か？」

「まだまだあー!!」

シリウスの連続攻撃を、クルウはカタナですべて受け止める。千
変万化するシリウスの剣先の軌道を、すべてあらかじめ知っている
かのように、慣れた手つきであしらってゆく。

「王都出身か……？ まあいい、お前の剣術はその程度だ」

「ちっ、お前、ただのゴロツキじゃねえな」

シリウスは目の前の黒服の男を改めて観察する。

厳しい皺が刻まれたその顔は決して若くない。せいぜい三十代後
半程度か。扱うカタナは、橙国と呼ばれるごく一部でしか使われな
い剣だ。

「別に。ただの傭兵崩れとでも言うべきかな」

「まさか……大戦の？」

「答える義務はない、無駄口はお終いだ」

再び、二人の剣が交錯する。

第十五話 氣と魔術

シリウスとクルウの刃が交錯し、火花を散らした。その衝撃を利用して、シリウスは一旦後ろに距離を取るが、素早くクルウも前進し、一定の距離を保つ。

（ちっ、……至近距離の打ち合いじゃ勝ち目がないな……）

シリウスも素直に認めるほど、クルウは強い。腕力だけでなく、戦闘技術に加え、豊富な知識を持っているようだ。

シリウスの剣術は、王都にいた時に教わったものだが、それも必ず流派が存在する。そして、クルウはその流派を知っているのだろう。微妙な癖や、隙を見逃さず、また出来やすいように促してくる。

「守りだけでは戦には勝てん！」

カタナを大きく上から振り落とす。シリウスは避けることが出来ず、剣で受け止めた。ビリビリ衝撃が走り、思わず仰け反るが、何とか持ちこたえる。

「クソッ……」

「油断するな！」

交差していた刃と刃。その上をスライドさせるようにカタナが動いた。その勢いのまま、シリウスの剣の柄に直撃し、シリウスは剣を握る手が少し緩んだ。

その隙を、クルウは確実に突いてくる。空いた手でシリウスの剣を握る手を叩き落とす。衝撃で件が床に落ち、金属音が響く。

「調子に乗るなッ！」

シリウスは手をはたかれ、バランスを崩すが、強引に、ハイキックを繰り出す。狙いはカタナを握る方の手。シリウスの蹴りが、カタナを弾き飛ばすが、床に這うような体勢で転んでしまう。

すかさず、クルウの足がハンマーのようにシリウスの顔面を踏み

つける。だが、シリウスは床を腕で叩き、勢いを生かして横に転がる。その先には先ほど叩き落とされた剣が。

「狙いが単純だ。小僧」

クルウは足でシリウスの剣を蹴る。カラカラ音を立て、倉庫の床を滑ってく。

「ふっ、……それはどうかな！」

シリウスはブレイクダンスを踊る動作にも似た、カポエイラを改造した、体を軸にして、足をプロペラのように振り回す蹴りを放つ。

「成程、武術も出来るのか」

クルウは後ろに飛び、距離を取って回避する。

シリウスもそのまま立ち上がり、剣を回収する。

「なかなか面白い奴だ、使うつもりもなかったが……やむをえんか、いや、使わずに戦を終える方が失礼というものだろう」

カタナを拾いながら、クルウは呟く。

「隠し玉か……？ ……そういうことか」

シリウスは、クルウの変化にすぐ気がついた。

明らかに、彼のまとう空気そのものが変質していた。まるで見えない膜に覆われているかのように、輪郭がぼやける。そのくせ、無視できない圧倒的な存在感を誇る。

「『気』という事ぐらいは聞いたことがあるだろう？ 橙国の神秘とまで言われたこの力を」

橙国は、この大陸の中でも極めて小さい地域を指して言う。橙色だいたいいろの花が咲く地域に城を構え、他国との交流を一切断ってきた、閉塞された文化。それゆえに独自の歴史を持ち、その能力は他国には一切存在しないものが多い。

カタナもそのうちの一つ。他にも、シノビやジュードーなどの独

特な文化も持つ。

中でも、『気』は一線を越えている。魔術とも違うこの力は、複雑な理論を頭で組み上げるのではなく、身体にその業を染み込ませ、考えるよりも先に発動させることが出来る。

「ぬんッ!!」

そして、『気』は莫大な破壊力を持つ。

「切先が……伸びた？」

シリウスの目には、身体にまもっていた気をカタナに集中させるクルウの姿が映っていた。しかし、そのカタナの刃は、薄く発光する煙のような物質で、二倍近く伸びている。

「行くぞ!!」

クルウの足元が陥没した。正しくはクルウの神速の踏み込みが、床をえぐる。瞬きする間に、シリウスの眼前には、二倍以上に伸びたカタナが。

（足にも気を使ったのか!? クソが）

もはや反射の領域で、考えるよりも先にシリウスは身体を横になげうっていた。直前にその身体があった場所は、カタナの一撃で破裂し、その破片がシリウスの身体を打つ。

「ググッ、!？」

もう次の攻撃が開始されていた。打ち落としたカタナを斜め上に切り上げるように振り上げる。バランスを崩したシリウスは回避することが出来ない。剣を前に出してこの一撃を受け止めるが、

（まずい……!?!）

気をこめたクルウの一撃は、シリウスの身体を浮かせた。

地面から足が離れ、勢いのままに宙を飛ぶ。だが、すぐに倉庫の壁に激突する。

肺の空気が吐き出され、息が詰まる。気がつくとき、地面にへばりついていた。

「くっ……あ、」

見上げれば、既にクルウはカタナに再び気をこめている。

（さっきの攻撃は……地面に叩き落した後だから威力が落ちていたのか？ それにしても桁違いだ）

どこかにトリックがあるとも思えない、正真正銘の力。

（だが……あきらめないさ）

シリウスは這い上がり、クルウに背を向けて倉庫の中を走る。

「逃げるのか……？ いや、誘っているのか？」

気をこめる際には、集中が欠かせない。咄嗟に這い上がったシリウスを追いかけるのに、しばしのタイムラグがある。

視線の奥に行くシリウスは角を曲がった。おそらく、神速の踏み込みで距離を詰められないようにするためだろう。

「ふん、だが……いつまで持つか？」

シリウスの後を追ってクルウは悠々と角を曲がる。

「おい、魔術師、待って」

紅とイネスは、倉庫から飛び出したヴェッセルを追いかけて市街地まで走ってきた。ヴェッセルは傷を負って、しかも若くはない。足の速さは二人の方が早い、人ごみに紛れられ見失ってしまった。

「えっと……確か」

「ああ、私はイネス、それよりも闇雲に捜したってみつきやしないさ」

「じゃあどうするの？」

土地勘のない紅にとっては、まさしくどこから手をつけたらいい

かわからない。それでも、あの老人がそう遠くまでいけるとは思えない。

「へへっ、任せとけって」

そういうと、イネスは道行く人々に声を掛けて行った。騎士風の鎧の男や、ボウガンを担いだ女性等、様々だが、誰もがイネスに好意的に見えた。

「この辺りじゃ結構人気なんだよね」

ボソツと紅に囁いて、「あっちの路地に頭から血を流したジジイが駆け込んだってさ」と言って紅の手を引いて走り出した。

「あ、ねえ。遺跡であった時と雰囲気違うね」

興味本位で訪ねてみると、

「まあね、あの時は敵同士だったし、何よりリリイさんと私たちを助けてくれたからね」

「リリイとは面識あるの？」

「いや、兄貴……じゃなくて首領から聞いただけ」

「あれ！？ ジンと兄妹だったの？」

会話しているうちに、件の路地に辿り着いた。道幅は広いが、日当たりが悪く、表通りとは打って変わって人の気配がない。

その中をただ一人、老人が這いつくばっている。

「ヒィ、くっ、くそっ……奴等といい小僧共といい、狂ってる……」

「狂ってんのはアンタの所業だ。老いぼれ」

イネスが退路を塞ぐように、通路の脇に置かれたドラム缶目掛けて投石した。ガラガラ音を立て、ドラム缶が転がる。

「もう、逃がさないよ」

紅は三本の炎剣を溜め、ヴェッセル目掛けて構える。

その目には、リリイを痛めつけた事に対する復讐の意志がある。

「三倍返し、だよ？」

炎剣は勢い良く放たれた。

直線軌道が、三つ、ヴェッセルを焦点にするかのように飛ぶ。地面に腰をつけた彼にはもう避けられない。

「ヒィィアアアア！」

もう為すすべなく、腕で顔を守るくらいしか出来ないヴェッセル。空気を吸い込み、轟々と炎を猛らす炎剣は、ヴェッセルに直撃した。

筈だった。

だが、紅の放った炎剣は、空中で、まるで打ち消されたかのように消滅してしまった。

「なに？ どうして？」

愕然とするのは紅。「まさか……対抗呪文^{レジスト}か？」と驚愕して呟くのはイネスだ。

「この老人は私たちが引き取る。手を引きたまえ」

急に声が轟いた。重低音の唸るような声の主は、路地を作る建物の屋上から飛び降りてきた。

白い鎧をまとう、褐色の長身の青年と、顔が見えないくらい大きなフードを被った魔術師風の小柄な男の二人組みが、紅とイネスの前に立ちはだかる。

「な、何者だ！？」

イネスは二人に向けて叫んだ。どうやらこの街では見かけない連中らしい。

「答える義務はない、それよりも、この老人は私たちが引き取る」同じことを繰り返す言う鎧の男。そして何故か、ヴェッセルは先ほどよりも一層怯え始めた。

「ヒィ、ヒィ、……貴様ら、なんの用、ングッ！？」

突如、ヴェッセルは喉を押さえてもだえ始めた。見れば、フード

の男が、袖口から杖を構えている。

「安心しろ、舌を貼り付けただけだ。余計なことは喋らせない」

鎧の男が、紅たちの疑問に答え、おもむろに腰に挿していた剣を抜く。剣には、刃の部分にさえ、模様のような奇怪な線がえがかれている。何かの生き物の絵か、記号的な文字か、計り知れないが、おぼろげに光を放ち始める。

『我誓フ、守護代天使ノ使ヒ、神ノ如力、炎之裁ヲ与フ』

鎧の男が早口に何かを唱えた。

途端、男の構えていた剣が炎に包まれる。紅の炎剣とは比べ物にならないくらい大きさ、そして炎の勢い。

「退け、さもなくば、焼き切ってしまうかねん」

男は剣を地面に叩きつける。

その衝撃で、剣にまどわれていた炎が凝縮し、爆発を起こす。その衝撃で地面を巻き上げ、土煙を上げる。

「魔術師、ここは素直に退こう！」

イネスが紅に叫ぶ、だが、紅は引かない。

「だめ、逃がしちゃう」

「私たちの手に負えない相手だ！ 相手はマジの魔術師たちだ！呪文詠唱を聞いただろ！？」

やはり、男の唱えたのは呪文詠唱だった。だが、それでも紅は叫び返す。

「私だって、魔術師なんだから！！」

「ほう、……ならば容赦はいらんか？」

気がつく、剣を構えた男は紅の背後に立っている。巻き上げられた土埃がまだ、壁のようにある中を突っ切ってきたのだろうか。

「！？ だったら！」

今まで、紅は炎剣以外の魔術を使えなかった。だが、それは紅の

技術が不足していたわけではない。咄嗟に発動したその魔術以外知らなかったただけだ。それ以外の魔術を知らなかった。だが、今目の前にいる男は、紅と同じ炎を自在に操る。ならば、紅にだって自在に操ることが出来るはずだ。

「ぬ!？」

突如、紅の周りを炎の輪が地面から吹き上がった。すぐ背後に立っていた男は巻き込まれないように後ろに下がる。

だが、地面から噴出した紅の炎は空中で収束し、一つの形を作り上げる。それは巨人の腕。まるでゴーレムの拳のような腕が炎によって形成され、男に向けて降り注ぐ。

呪文を詠唱する暇もなく、剣で受け止める男、地面にヒビが入り、足が数センチ沈むが、大声を上げ、剣で巨人の拳の軌道をそらす。

周辺の建物の壁を大破させ、ようやく拳は消滅する。

「どう？　これが炎の魔術だよ」

紅が勝ち誇って宣言した。

第十五話 気と魔術（後書き）

一話ごとの文字量が増加中です。
だから更新が遅いのかもかもしれませんね……

第十六話 剣士と魔術師

クルウはシリウスを追って別の倉庫へ踏み入っていた。広さは先ほどと変わらないが、こちらは中身がすべて二メートル四方のコンテナで、縦に二つ積み上げられている。上のコンテナはリフトに載せられ、鎖で固定されていた。コンテナの隙間を縫うように通路が十字路を幾つもつくっている。

（成程……身を隠して不意を突く作戦か）

クルウはつまらなさにシリウスを追う。

この連続する十字路では、角を曲がるだけですぐに姿が見えなくなる。追いかけて角を曲がっても、更に曲がられていては、追いつくことが出来ない。見失った頃に後ろから攻撃されてしまうだろう。

そもそも、気を使ったカタナは、リーチが伸び、普通の剣では届かない。破壊力も桁違いになる。一見無敵の術に見えるが、使用者の気の制御と、体力の消耗が並ではない。長時間の使用は危険だ。

（時間を稼ぐつもりもあるのだろう、だが、気はカタナを強くするだけではない）

クルウは気を耳に集中させた。

一瞬、キーンと耳鳴りがした後、ヘッドホンをしたかのように鮮明に音を捉えるようになった。

「足音に気をつけろ！」

後ろを振り返りもせず、カタナを後ろに向け、突きを放つ。

まさに後ろから奇襲を掛けようとしていたシリウスは慌てて飛びのく。

「ちっ、無駄だったか！」

自分の策略を攻略されたシリウスは、再び角を曲がり、クルウから距離を取る。しかし、足音で正確に位置を知るクルウはシリウス

を捉えて逃さない。

「だが、その聴力が仇になるぞ」

シリウスは、倉庫の床に落ちている金属片を拾った。おそらく、何かの部品が、コンテナからこぼれたのだろう。それを勢い良く投擲する。

倉庫の辺りは金属製の壁や、コンテナで覆われている。直撃した金属片と、コンテナが轟音を出す。普通の人間でも耳を塞ぎたくなるほどだが、聴力が常人をこえたクルウにとっては、破壊音に匹敵する。

「グヌツ、だが、解除すれば問題ないッ」

シリウスは絶えず、金属片を投げ、聴力強化を阻害する。だが、金属片の飛んでくる方向を見極めれば、シリウスがどこにいるのか判断できる。

やがて、クルウはシリウスの退路を塞ぐように動き、追い詰める。

「もう、逃がさん……」

シリウスは角に追い込まれた。背後にはコンテナがあり、正面にはクルウが、気をこめたカタナを構えている。

「ちっ、一か八か……」

「構えろ！ 最期ぐらい、剣士として死なせてやるッ！！」

ダン、と床がなる。直後には、クルウの身体が弾丸のように跳躍してくるのが、何とか捉えることができる。しかし、シリウスの剣では反撃できず、退路も存在しない。

正面から喰らえば間違いなく死ぬ必殺の一撃。

（かわせまい……）

クルウは勝利を確信していた。

だから、シリウスの本当の策略に気づくことが出来なかった。

シリウスは、つみあがったコンテナを支える鎖を掴み、床とつな

がった部分を剣で切り裂いた。さび付いた鎖は脆く、容易く切れた。途端、シリウスの身体が、上昇した。鎖に引かれ、上空に回避する。ちょうど、鎖が断たれたことによって、天井にくっついていた滑車と、反対側についているコンテナの重さでシリウスの身体がエレベータのように登ったのだ。

突然の出来事に、だが遅れずクルウも反応する。切先を急に上に修正する、だが、鎖が切られたことによって傾いた、上に積み上げられたコンテナが降って来る。

「邪魔だッ」

カタナでコンテナを一刀両断するが、裂けたコンテナからは鉄片が降り注ぐ。その質量の多さと、カタナで蹴散らすことの出来ない圧倒的な物量に、クルウは飲み込まれた。身体を鉄片が殴打し、手からカタナが吹き飛ぶ、気がつく、地面に打ち付けられ、更に身動きがとれずにいた。

「つまりそういうことだ。俺の勝ちだ」

シリウスが勝ち誇ったように見下ろしていた。

「コンテナを切らせるところまで計算していたのか……中身が鉄片でよかったな」

「そうでもないさ、ちゃんと中身は確かめてたんだよ」

そこではっと気がついた。シリウスが金属片をコンテナにぶつけたのは、クルウの耳を阻害するだけでなく、中身の音を確認していたということだ。

「なあ、何であのジジイの部下なんてやってたんだ？ そのくせ、

ジジイほったらかしだし」

「さっきも言ったはずだ、俺は刃なんだ。誰かに使われることしか、自分で切るものを選べない男だ」

クルウは鉄片に埋もれながら、シリウスに話す。

「大戦に借り出され、そこで悪魔を見た。正真正銘の悪魔をな。俺はそれを直に見て、恐ろしくなって逃げ出したんだよ、それ以来、

何のために戦っていたのかわからなくなった。国のための戦いに背を向けた俺に、何を守れるのか、俺の業は何のためのものだったのか。だから俺は誰かに求められた時しか、カタナを握ることが出来なくなつた」

「知らねえよ。腑抜けた理由を、戦えない理由を他人に押し付けてんじゃねえ。ただな、お前の剣術は俺よりも強い。それなら、俺よりも多くの敵を倒せるだろうさ」

適当に吐き捨てるように、言い残してシリウスは走り去つた。おそらく、ヴェッセルを追いかけた二人のところへいくのだろう。クルウはそのまま動かなかつた。

白い鎧の魔術師と、紅はにらみ合つたまま、対峙していた。鎧の魔術師の後ろでは、ヴェッセルを掴んだフードの魔術師がいる。紅の後ろには、鎖鎌を構えたイネスがいた。

「面白い小娘だ」

鎧の男は焦りも見せず、剣を構える。

今度は無詠唱、炎弾を剣先から放つ。だが、狙いは紅ではなく、周囲を囲う建物の壁。破壊され、瓦礫がつぶてのように二人を襲う。(これも……炎を応用すれば、)

紅は腕を天に向けて扇ぐ。その軌道をなぞるように、炎の膜が紅の上空を覆う。瓦礫のつぶてを弾き飛ばす。

「周りが見えてないぞ、炎の魔術師」

眼前には、剣を振りかざす、鎧の男が。

咄嗟に、炎剣を発生させ、斬撃を受け止める。鏑迫り合いになり、お互い互角かと思つたが

「対抗呪文」
レジスト

一言、男が呟くと、紅の炎剣が消滅してしまった。

「わっ、まずい！」

イネスが思わず叫び、鎖鎌で男を攻撃するが、何かに妨害されてしまう。

みれば、フードの男が杖を操っている。

「ぬんッ」

身を守るものの無くなった紅に、鎧の男の剣が襲い掛かる。なすすべも無く、紅の身体が斜めに切り裂かれる。

「魔術師！！」

イネスが驚愕に叫ぶが、紅の身体はくるくる回り、萎んだ。

「……陽炎」

ポツリと、鎧の男が呟く。良く見れば、軽いもやのようなものの先に、紅が傷一つ無くたっている。満面の笑みに、得意げに言った。「まさか出来るとは思ってたけど、こんなことも出来るんだね」

自身の能力に感嘆しながら、再び距離を取る。

紅の操る炎の魔術の応用で、陽炎を作り出したのだった。炎で局地的に空気の密度を変え、そこに光が当たると、靄のように光が屈折する。男は距離感を見誤り、紅はその隙に距離を取ったのだった。

「ますます面白い、それほどの術、無詠唱で行うにはかなりの鍛錬が必要なはずだ。しかもその歳でとは」

男は素直に賞賛し、顔をゆがめる。

剣をしっかりと握りなおし、再び構えなおす。

その時、路地に足音が鳴り響いた。

「おい、二人とも大丈夫か？」

「シリウス！」

一足遅れて、シリウスが追いついた。その姿を見つけるなり、紅は安堵の表情をもらす。

「援軍か……面倒な」

男はつまらなそうに呟いた。

紅は、シリウスが駆けつけてくれたことで、一瞬の油断が出来てしまった。

何かが鎧の男の肩越しを駆け抜けた。

それは、あまりにも早すぎて目では捉えることができず、誰もが反応する事が出来なかった。だから、それが紅の額を貫通するまで、何が起きたのか誰にもわからなかった。

「え……？」

紅は声を漏らしながら、崩れ落ちた。糸が切れた人形のように、ピクリとも動かない。

「え、あ、おい……」

状況が飲めないシリウスが紅の下へ駆け寄り、辺りを見回す。鎧の男の、後ろに立つフードの男が、は術を放ったばかりの杖をおろすのが見えた。

「遊びすぎだ。ジェイド」

初めて、不吉な重低音で喋ったフードの男は、固まる皆に背を向け、ヴェッセルの襟を引っ張る。

「あ、ああ。ちっ、帰るか。……安心しろ、ただのショックだ。命に別状は無い」

ジェイドと呼ばれた鎧の男は、フードの男に続き、背を向けた。

「なんだよ……おい、逃げんのかよ！俺が八つ裂きにしてやるッ」
シリウスが剣を握り、背を向けた魔術師達に切りかかった。だが、その剣先が触れる直前、シリウスの足元の床が巻き上がった。後方にシリウスの身体が吹き飛ばされ、魔術師達は姿を消す。

「待ちやがれえええええ！！」

遠吠えのように叫び、魔術師達が消えた方を一瞬睨むと、背を向けて紅のほうへ戻る。イネスに抱きかかえられている紅は、目を開

けない。

「おい、大丈夫か！？　おい、紅！　目を覚ませ、」

シリウスは必死に紅の身体を揺するが、反応が無い。

「一応、あいつら、大丈夫だっていったけど……」

「信じれるのかよ……」

確かに、何かに貫かれた額には、傷が無い。他にも目立った外傷は見られず、呼吸も安定している。

ふと、紅の唇が動いた。

「シリウス……」

「紅！　大丈夫か？」

「やっと、名前で呼んでくれたね……」

うつすらと、瞳を開け、呟いた。

「馬鹿、そんなこと……」

「私は大丈夫、それよりも……リリィとジンのところへ行っ
てあげて」

「……ああ」

シリウスはイネスから紅を受け取り、背中に負ぶって歩き始めた。
やがて、紅はシリウスの背中で眠り始めた。

紅は、とても暖かった。

第十七話 別れと旅立ち

「ん……あれ？」

目が覚めると、リリイの部屋のベッドに横たわっていた。記憶をたどってみると、倉庫を飛び出し、魔術師達と戦って……

「そうだ、シリウスは？」

ベッドから跳ね起き、ドアを開く。「わあっ、」と言う声がして、ちょうどドアの前にいたリリイとぶつかりそうになった。

「あ、紅さん。もう大丈夫ですか？」

心配そうに覗き込むリリイに「大丈夫だって、」と返し、シリウスはどこにいるのか尋ねると、少し顔をうつ向かせた。

「あの、彼の病室に皆集まっています。大事な話、というか、事のすべてを話してくれるそうです」

その顔に不安がよぎり、腕に巻かれた包帯をきゅっと押さえる。ヴェッセルに付けられた傷。紅にはその時の状況が上手く理解できてなかったが、リリイを助ける事で頭がいっぱいだった。

ジンが入院していた病院に着いた。リリイにとっては通いなれたその病室、いつもは精一杯の笑顔で扉を開けていたが、今日はそれも出来そうに無い。

彼から一体何を言われるのだろうか。彼の本当の姿、彼の本当の仲間達を見て、自分の今までの行為の意味はなんだったのだろうか。自分は彼に何を出来たのだろうか、そんなことばかり頭の中を占める。

「大丈夫、ほら、あけるよ」

紅がいつまでもドアの前で佇むリリイの手にその手を添えて、ドアを開いた。

そこには、いつものようにベッドに横たわるジンと、その隣にシリウスが立ち、更に周りには盗賊団のイネスを代表に数名が、ドアを開けた二人を見つめていた。

「あ……」

思わず、言葉を失ってしまった。それまで、自分しか傍にいないと思っていた場所に、沢山の人が立っている。それが……とてもうれしかった。

「リリイ、聞いてくれないか。俺の、本当の話を」

ただ、頷くだけで返事をして、それを見たジンも、満足そうに頷き返す。

「俺が初めてリリイと会ったとき、俺はまだ、盗賊団の首領に成りたてだった。前の首領、俺の親父は、それはよく出来た人格者で、何で盗賊なんかやってんだってくらいいい人だった。昔から、人から物を奪うことしか脳のない盗賊たちに、わざわざ遺跡に出向いてお宝探しをさせるなんて、俺の親父しかいなかった。

だが、その親父もあっけなく死んだのさ、何てこと無い新入りをかばってな。その新入りも盗賊団を抜けやがったが、まあいい。とにかく、俺が親父の息子だからって繰り上がりで首領になっちゃった。年端もいらない餓鬼に従うことになった仲間達はどう思っただろうな。ただ、もしもの時は首領の座を息子に譲るって言う親父の一言があったから、渋々従ったんだろう。

俺はどうしたらいいかわからなかった。とにかく親父の意思を継いで、遺跡のお宝を発掘していたが、遺跡には罠がある。皆で力を合わせねえとどうしようもない、でも俺は、皆に命令できるような奴じゃないと思ってた。武術だって、妹のイネスの方が強いし、親父みたいに仲間に信頼されてない。どうしようもなく、どうしたらいいかわからなかった。

そんな時、俺は一人、喫茶店に入った。なんとなく、アイスコーヒーを頼んだら……頭からぶっ掛けられた。怒りそうになったけど、

そいつの必死に謝る様に、なんだか怒る気も失せると、そいつはぱつと笑って、ありがとう、って。正直意味がわからなかった。他人に迷惑賭けてんのに、どうしてここまで笑って、しかもそれを許してんだらうって。

その日以来、俺は毎日、喫茶店に通ってた。仲間とのすれ違いを感じながらも、彼らに命令をできないでいる俺は、自然と癒しを求めてたのかもしれない。日を重ね、会話を交わすたびに、俺は彼女に惹かれていた。それと同時に、彼女の胸の奥にある苦悩も垣間見た気がした。

それから俺は、彼女の真似をして、失敗して、仲間迷惑かけるのを恐れずに、最後には笑い合えるようにすることにした」
その結果がこれだ、とでも言うかのように、盗賊団の仲間を見回す。

「うん、」

心なしか、安心したように、リリイは頷く。

「盗賊団のみんなも、リリイさんには感謝してるんっすよ？」

イネスがぎこちなく声をかける。その様に、ジンがきつく言う。

「それはいいが、どうして黒蠍盗賊団が、トレジャーハンターを襲うようになったんだ！俺の不在の間はお前に任せてただろ！」

「あ、ゴメン兄貴……じゃない、首領。でも手術には莫大な金がかかるって……」

「だからって親父の意思を曲げんな。……ったく、もうやっちゃったことはどうしようもない。これから信用を取り戻せばいいさ」

簡単にジンは言うが、信用なんて簡単に取り戻せるようなものではない。しかし、ここにいる誰もが、そんな不安は感じていないようだ。

「それで、……リリイ。俺は、もうジンじゃないんだ、黒蠍盗賊団首領、ジークとして話がある」

「な、なに……?」

改まって真剣な面持ちで話しを切り出す。

「……俺が、お前の心を盗んだ。返して欲しかったら、結婚してくれ」

「……え?」

「……だめ?」

不安そうにジークが伺うと、リリイがふき出してしまった。「え? お、おい……」狼狽するジークをよそに、病室にいるみんなに、笑いが伝染していく。

「はい。ありがとう、ジーク」

リリイは、この上ない笑顔で答えた。

ジークのプロポーズ大作戦から、しばらく経ち、時間は昼下がりで、そろそろローアン・バザーを出発するバスの時間だ。

見送りに、ジークとリリイがバス乗り場まで着いてきた。

「そうだ、ジーク。君に聞きたい事があるんだが、ヴェッセルはどうして連れていかれたんだ?」

少し早めに着いてしまい、時間を持て余している中、シリウスが尋ねた。

「ああ、奴は元王と周辺の暗部グループの医者だったらしい。まあ闇医者と変わらんさ。その奴がヘマをしてこの辺りまで逃げてきたらしい。だが、元グループの奴に見つかり、金を要求されたそうだ。

それで、この街の旅人を分解して金を稼ぎ出したらしい。たぶん、連れて行ったのは昔の奴の仲間なんかじゃないのか？」

その答に、釈然としない様子のシリウスはじっと考える。

（奴ら……いや、まさかな。こんな辺境の地まで闇医者を追いかけてくるはずが……）

その思考を遮るように、バスの汽笛の音が響いた。

バス、と言うよりは汽車に近い形状のその乗り物は、いかにも燃費が悪そうな音を立て、四人の前に止まった。

「じゃあね。リリイ、ジークさん。私たち、もう行きます」

お別れの言葉を述べ、紅はバスの開かれた扉に乗る。

「きつと、また会えますよね。……いや、会いにきてくださいね！
いつでも歓迎するから！」

リリイはとびきりの笑顔で、手を振った。

紅に続いてシリウスもバスに飛び乗る。

「絶対に……また会おうね！」

紅もリリイとジークに手を振り替えし、バスの扉が閉まる。

ゴトゴトと大きな音を立て、バスは発車した。扉についている窓から、いつまでも、手を振り続けた。

「おい、紅。早く座ろう」

シリウスが紅に声をかけると、「もう……少しだけ」と返した。

バスはローアン・バザーを抜け、荒野に入った。

それでも紅は、いつまでの窓の外を眺めていた。その景色を目に焼き付けるために。

第十七話 別れと旅立ち（後書き）

はい、と言うわけで、プロローグ的な部分が無事、終わったわけですね。

え？ 長い？

第十八話 悪魔の目覚め、旅の始まり

大陸の南東に位置する小さな孤島。火山活動のおかげで海底から隆起し、出来たこの島は、今でも噴火の影響で瘴気が満ち、人が暮らすには厳しい島だった。

とある、一人の国王が思いついた。重罪を負った犯罪者を島流しにする時、この孤島は適しているのではないか。植物の生えない死の孤島と化していた。島流しにされた者は、やがて発狂し、自然と姿を消したと言う。

それ以来、この島は犯罪者を閉じ込めておく島となり、人々は監獄島と呼ぶようになった。

「本当に……その、いいんですか？」

監守が、後ろについてくる男におずおずと尋ねた。

監獄島には、時代が流れるにつれ、牢屋などの設備が作られていた。その間を縫うように細い通路が出来ている。中では囚人達が、絶望にくれた顔を向けている。

あたり一面が、瘴気で黒くくすみ、陰湿な空気を持つ中、監守の後ろをついてくる男は、場違いなほどに真っ白のローブをまとい、フードを目深に被っていた。

「良いといっているだろう。すべての責任は私が負う」

気品を漂わせる男は、王都から来た使者なのだが、その役目とは、とある重罪人を解放することらしい。どういう経緯があるのか、監守にはわからないが、この男に逆らうことが出来ない。

「しかし……相手はあの悪魔と呼ばれた……」

「黙れ、自らの役目を忘れるな」

短く言うと、それ以降喋ることを許さないような威圧感を放っている。

渋々、男の要求どおり、監獄島の最奥部に辿り着いた。

そこには、明らかに他とは異質な大きな鉄の扉がある。ドアノブの変わりに、大きなハンドルがついていて、金庫のようにも見えた。監守が、扉の周りを囲む鎖を、一つずつはずし、ようやくハンドルを回し始めた。

その間、白い男は、フードで隠れていたが、笑いをかみ殺しているようにも見えた。

「あ、開けますよ……」

監守は、まるで自分にい聞かせるように呟き、大きな鉄の扉を引っ張った。

壁をそのまま引き剥がすような、べりべりと言う音が、辺りを満たし、一つの通路が中から現れた。と、同時に、二人を温風が吹きつけた。

内部の通路は、洞窟状になっており、岩肌が丸見えで、一人がやっとな広さしかない。

「いくぞ」

白い男が短く促した。

通路には明かりが無いのに、ぼんやりと光が満ちている。監守が松明で道を照らし、島の奥深くへともぐっていく。途中には幾つもの鉄格子があり、そのたびに監守が鍵を開けていった。

しばらく歩くと、一つの部屋に出た。部屋は円形で、中心部には井戸のような縦穴と、その上に滑車がついていて、縦穴には一本の鎖が垂れている。

「上げろ」

白い男の命令に、息を飲みながら監守が従う。

滑車の近くにはレバーがあり、それを勢い良く引き上げた。

ガゴン、と言う音とともに鎖が巻き上げられ始めた。

「あ、暑いですね……」

監守が、時間を持て余して呟いた。それもそのはず、この縦穴はマグマに直結しているのだ。鎖は特別な魔術刻印がされ、強度を増しているが、その鎖につながれた者はそんなことはされていない。「もう、死んでしまっているのかも……」

うわごとのように監守が呟く。男は表情を変えない。

鎖の巻き上がる音が大きくなり、やがて、巻取りが終りそうだ。「うわっ……」

監守が思わず声をあげる。鎖の先には、一人の人間、それも少年がつかわれていた。

十年もの間、マグマに炙られ続けられ、投獄時に来ていた囚人服が熔けてドロドロになり、体にこびりついている。そのくせ、身体が熔けている気配が無い。

眠っているかのような表情の少年は、白い男によって鎖からはずされ、床に横たえられた。

「素晴らしい……まだ生きている。どれ、」

いいながら男は少年の胸に両手を重ね、衝撃を加える。

ただの心臓マッサージではない。魔力をこめた一撃。少年の身体がビクンと跳ね、また静かになる。それを何度も繰り返すと、少年が目を開けた。

「貴様……ちっ、なんで」

少年が小さく言葉を放つ。その様を、壁にへばりつきながら、あわあわと見つめていた監守と少年の目が合う。

何も言わず、少年が立ち上がり、監守に近づく。

「あ、あの……」

監守が言葉をつむごうとした瞬間、少年の手が動いた。

胸部に軽い衝撃を感じた監守が見下ろすと、少年の手には、鼓動する心臓が握られていた。

「死ね」

少年が、心臓を井戸に落す。それと同時に、監守は崩れ落ちる。

「お遊びは終わったか？ では、さっそく本題に入ろうか」

「貴様是谁だ？ 何故、俺を起こした？」

「……すべては神のために」

「はあ？」

白い男は、不敵に笑う。

————悪魔は目覚めた。すべては神のために。すべての人のために。

バスは荒野を走っていた。内装はむしろ汽車のようで、向かい合った椅子が一つのブロックを形成し、それが幾つも並んでいる。あまり混雑していなく、紅とシリウスで一ブロック占領しても余裕があった。

紅は、初めはバスから見える景色を眺めていたが、やがて疲れが出たのか、今は窓に額をあて、眠っている。シリウスもそれを眺めて、一眠りしようかと考えていた。

これから向かっているのは、ローアン・バザーを北上し、荒野の果てにある小さな集落、ヘミスラという町である。ここから、更に北に行くと、大陸の中央平原になるのだが、その間を山脈が遮っている。バスでは荒野しか走ることが出来ないので、山脈は自力

で越えるしかないのだ。

(それまでの休息だな……)

「あの、相席よろしいですか？」

シリウスが見上げると、黒いローブに三角帽を被った、紅より少し年下ぐらいの女の子が顔を伺っている。その手には、重そうな黒いトランクを持っていた。

「ああ、どうぞ」

相席に座った少女は、トランクを椅子におき、帽子を取った。

そのままローブを取り、ブロックと通路を遮るカーテンを閉め、おもむろにカーディガンを脱いだ。そして、躊躇無く、中にきていたシャツを脱ぐ。

「おいおいおい！！ ちょっと待て！」

「はわわっ、すみません！ 少し目を瞑ってください！」

どうやら天然でシリウスの視線を忘れていたらしい。急いで目を瞑るシリウスだが、状況がまったく飲めない。

「も、もういいですよ……」

おずおずと少女が言う。

困惑しながらシリウスが目を開くと、

紅が驚愕の眼差しでシリウスを見ていた。

「いや、違う！ コレは違うぞ！ 勘違いだ！」

必死に弁解するが、紅の表情が非常に冷ややかになる。

「いや、うん。大丈夫、シリウスがどんな趣味嗜好でも、王都まで一緒にいてあげるよ……」

「いやいやいや！ 違うから！」

シリウスはぶんぶん手を振って否定する。

そこで、自分もまだこの少女のことを何も知らないのを思い出した。

「あの……お願いがあるんですけど……」

すっかり着替え終え、パーカーのような上着にプリーツスカートをきていた。

「な、何？」

とりあえず、紅を放っておき、シリウスは少女と向き合う。

「私、悪い人たちに追われてるんです、あの……しばらく一緒にいてくれますか？」

「なるほど、つまり、悪い人をぶっ飛ばして欲しいって事？」

紅は笑いながらいった。

「いえ、そこまでしなくてもいいんです。むしろ、見失って欲しいので」

少女は困ったように言った。

「追われてるってのはどうしてだ？」

「あの……私は占い師をやっているんですけど、ローアン・バザーにいる姉を訪ねにきてたんです。姉は人形師をやっているんですけど、悪い人といざこざが合ったみたいで」

「そうか、確かにあの街は治安が悪いしな」

「それに、お姉ちゃんは、悪い人を見つけると放っておけない性格なんです」

「それ、困ってる人とかじゃない？ 普通……」

紅は呟きながら、少女に尋ねる。

「つまり何、あなたのお姉ちゃんといざこざがあったけど、狙われているのはあなたなの？」

「ええ、おねえちゃんとは年が結構離れているんですけど、顔立ちが似ていて、それにお姉ちゃんは人形師だから、悪い人たちは、私に変装したお姉ちゃんだと勘違いしてるみたいなんです」

それでいきなり着替え始めたのか、とシリウスは納得する。

「あ、そうだ、まだ名前聞いてなかったね？」

「はい、私は、マナと言います。マナ・フォンレーゼです」

マナは可愛らしい笑顔で答えた。

第十八話 悪魔の目覚め、旅の始まり（後書き）

ただ自分が楽しければいいなと思います。

第十九話 占い少女、新たな街

「私、これから王都にある師匠のところに行こうと思ってるんです。よろしければ、途中まで一緒に行動しませんか？」

マナは申し訳なさそうに尋ねるが、紅が手を合わせて喜びながら答えた。

「私たちも王都に行くんだよ！　ね、シリウス、一緒にいてもいいよね？」

「ああ、まあ……」

シリウスは何か考え事をしているようだ。

「あのさ、もしかして、その師匠ってのは……」

「はい、グラン・マチレアです」

「んのクソババア……弟子なんて取らないとか抜かしてたくせに……ああ、マナは悪くないよ」

シリウスは思わず悪態をついてしまい、マナに急いで謝罪した。

「いえ、私はマチレアの孫に当たりますから」

「マジかよ!？」

シリウスは椅子から飛び上がるほど驚いた。

「ねえねえ、誰なの？　その人」

「ん、王都の腕利き占い師さ、俺も縁があるんだが……まあ、厄介なことこの上ない」

「ふうん」

紅は、占い師と聞くと、水晶やタロットカードを思い浮かべるが、まさかそれにも魔法的な効果があるのかと思うと、ちょっと楽しくなった。

「そうだ！　マナちゃんは占い出来るの？」

「はい、一応……」

そういうながら、荷物の中からバスケットボール大の水晶玉を取り出す。

「あ、名前聞いてませんでした」

「私は紅、それで、こっちがシリウス」

紅が言うと、マナは「姓も教えてくれますか？」と問うた。

「俺はいい、お前がやれよ」

シリウスが興味なさげに言うので、紅は渋々、「雛沢紅……」と教えた。

「ヒナサワさんですか。ムムム、これは……？」

マナは水晶とにらみ合っている。なにやら水晶の中が靄みみたいなものでモヤモヤしているが、マナは何かを読み取っているようだ。

「過去が見えませんが、まあいいでしょう。あなたには……これから……何か……大変な……出来事が……」

「偉く抽象的だな……」

シリウスがげんなりしながら言った。

「はわわっ、すいません。普段はもつとよく見えるんですけど……」

「ババアなら、名前を言う前に不吉な予言を言うけどな」

「おばあちゃんは熟練だから……私なんてまだまだ見たいですね」

えへへ、と笑うマナに、紅は「大丈夫、気をつけるから」と励ました。

「初めて会ったのに、なんだかすいません」

マナが感謝をこめて言うと、

「当たり前じゃない。困ってる時はお互い様、助け合わないと」

紅は当然のように返した。

突然、ボックスと通路を遮るカーテンが取り払われた。

「見いーつけた、お嬢ちゃん」

ぬうっと顔を突き出してきたのは、厳つい格好の、おそらくトレジャーハンターと見える大男、その後ろに、バーテンダーのような長身の男、用心棒のような鎧の男が立っている。

「何だ？ 用か？」

シリウスが立ち上がり、男達の前に仁王立ちになった。

「あん？ テメエ誰だよ、俺はそのお嬢ちゃんに用があんだよ」

酒臭い息をシリウスに吹きかけ、手に持っていた金属製のとげのある棍棒をちらつかせる。

「この人たちです……」

マナが小さく紅に囁いた。

「……うわ、すごい三下の台詞ね」

紅もシリウスに倣い、マナをかばうように立ち上がる。すると今度は男達の反応が変わった。

「いいねえ、こっちの嬢ちゃんもなかなか……しかもこっちは俺らの好きに出来んじゃないかねえか？」

にやけながら紅を指差すと、後ろの二人もゲラゲラ笑い始めた。

「いい加減……」

「あん？」

「酒くせえんだよ……」

シリウスの突然の頭突きが、大男の鼻面に直撃する。思わず仰け反り、後ろの二人に支えられる。

「こんの野郎！」

棍棒を力いっぱい振り回すが、バスの通路は狭く、壁やらに当たって上手く振れない。シリウスが攻撃を避けてしゃがみ、足払いをする。大男は無様に転んでしまった。

「おいおい、足腰がなってるな。三人で女の子追い掛け回して、恥かしく無いのか？」

「黙れ、クソガキ！」

後ろに立っていたバーテンダーの格好の男が、ポケットからナイフを取り出し、素早くシリウスに振りかざす。だが、その刃がシリウスの肌を切り裂く前に、腕をはたかれ、ナイフが床に落ちる。

すかさず、シリウスが天井についている荷台を掴み、バーテンと、トレジャーハンターの男の顔面に蹴りを入れる。狭い車内で吹き飛

ばされたため、壁に激突する。

「さあ、もう終わりか……」

「やめなさい！ 全員下ろしますよ！」

男同士のぶつかり合いに、どうやらバスの乗組員らしき、細身の男が制止に割り込んできた。シリウスが無然とした表情で紅と目配せしたが、紅はむしろ止めてくれてありがたかった。

「チッ、退くぞ」

男のうち、一人が言うと、三人組は去っていった。

「くだらねえ。中途半端だ」

「こら、シリウス。弱いものいじめは良くないよ」

紅はしかりつけるように言ったが、「それともどうかと思えます……」というマナの一言が聞こえた気がした。

「あなた達も気をつけてくださいね？ この辺り、なにやら怪しい組織が渦巻いているようですから」

「大丈夫だ、気にするな」

乗組員の親切な忠告にも、素っ気無く答え、席に戻った。

バスはそれから、素知らぬ顔で荒野を駆け抜けた。

「ふう、やっと着いたの？」

バスが、それから半時ほど走り、やっと終点の山の麓までやってきた。バスの機動力の問題で、山を駆け上ることが出来ないのも、ここからは徒歩での移動になる。

「よし、今からこのジリル山の中腹辺りにある鉦山都市・グレイバレーに行くぞ」

シリウスとマナもバスを下り、山道の方を見上げる。人が通りなれた道は、舗装こそされてないものの、人が通るには申し分ない道だ。

「あの、よろしければ案内しましょうか？」

バスの乗組員の細身の青年が、顔色を伺いながら申し出た。

「いいんですか？」

「はい、僕もちょうどグレイバレーに向かう所です。人が通りなれた道と言えど、野生生物も多いですし。……ああ、僕はアーバスつていいです、そちらは？」

軽く自己紹介を済ませ、歩き始めた。

野生生物といえば、いつかの森で魔力を持つ熊に遭遇し、大波乱があったことを思い出すが、シリウスいわく、あれは稀、との事。

アーバスの後に続き、シリウスと、その後ろに紅とマナが山道を登る。

「わひゃあい!？」

奇妙な悲鳴とともに、マナが道に突き出た木の根に足を引っ掛け、転んでしまった。そのはずみに、バックから水晶玉が転がり出た。

「あっ、大丈夫？」

紅が手を貸して起こしてあげると、急いで水晶玉の様子を確かめ始めた。

「よかった、割れてませんでした」

心底安心したような表情で、水晶玉を抱きしめる。その様子を苦笑しながらシリウスとアーバスが眺めた。

「大事なもののようですね？」

アーバスが尋ねると、まるで聞いて欲しかったかのようにマナが頷く。

「はい、祖母からもらった大事なものです。修行の最後にこれをもたらしたときはうれしかったなあ……」

まるで遠い日の思い出にふけるようなマナに、アーバスは「そうですか」と一言。

「ねえ、それよりもまだ街に着かないの？ 疲れちゃった」

紅は、足が確実に重くなるのを感じながら前を行く男二人に尋ねた。

「もうすぐですよ……ほら、見えてきました」

アーバスが指差すその先には、山肌を強引に切り崩したかのように平たい面が続き、その中に多くの家やら建物がひしめき合っていた。所々に坑道のような穴も見える。

「ここが鉦山都市・グレイバレーだ」

第二十話 手厚い歓迎、夜の帳

鉦山都市・グレイバレーは、鉦山で働く、労働者が集まって出来た集落で、それが時間が経つにつれ、巨大化し街となった場所だ。労働者が多いからなのか、酒場や飲食店が軒を連ねる大通りが街の中心を抜けている。

「どうです？ 僕の知り合いの店があるんです。食事でもどうですか？」

アーバスは、街角の一軒の食事店を指差した。

「悪いな、なにから何まで」

シリウスが驚きながら聞くと、アーバスはちよつと困ったように肩をすくめて言った。

「この辺りは旅人も少ないですから。少し珍しいのかもしれませんが、もちろん他意はありませんよ？ 歓迎します」

「いいじゃん、お言葉に甘えようよ」

紅がシリウスの背中を押しながら、アーバスに着いて行く。

「お前は腹が減ってるだけだろ」

シリウスがぼそりと言うと、マナがくすくす笑った。

アーバスの導く飲食店は、あまり賑わっていないようにも見えるが、ある程度の固定客がいるようで、一定の席は埋まっていた。導かれるままに、カウンターの前に腰をかけた。

「大将、こちら、ローアン・バザーからの旅人です」

アーバスが紹介すると、店のカウンターの奥から、大柄の男がぬうつと現れた。凶暴な風貌が、一挙にやわらかい笑顔に変わった。

「そうかいそうかい、いやー外のモンなんてめったに来ないからうれしいなあ、っはっはっは」

乾いた笑い声を上げて、頼んでもいないのに食事とドリンクを出す。

「遠慮しないで食ってくれや。こっちは同じ面子ばかりで話のネタもそろそろ尽きてきてるんでね」

店主の男は豪快に笑いながら、また別の料理の準備を始めた。シリウスはこの歓迎ムードに戸惑っているが、紅はお構い無しにチキンにかぶりつき、「おいひー!」と叫んでいた。

「ところで、皆さんどこへ向かわれるのですか？」

アーバスがポテトをつまみながら、シリウスに尋ねた。

「ん、王都までだな、長いたびになりそうだよ」

「王都……遠くまでご苦労様です。僕も王都には行ったことがありますよ」

世間話を続けていると、店員やら、常連の客やらも会話に参加してきた。

「おっ、こっちのお嬢ちゃんは占い師かい？」

「え？ ああ、はい。そうです、まだ修行中ですけど……」

店員の気のよさそうな青年がマナに声をかけると、恥ずかしそうに顔を俯けた。

「修行の旅かい？ 大変だねえ」

「いえ、王都まで行くのは祖母を訪ねにいくので」

話は続き、三人は手厚く歓迎された。時間が過ぎ、辺りは次第に暗くなり始めた。やがて、人々は食事を終え、ひとしきり騒いだ後、夜の街へと出て行った。

「俺達も宿を探そうか」

シリウスは、まだ食に未練がありそうな紅を引っ張り、店を出た。その後を追ってアーバスも着いて来た。

「宿なら、あちらの角を曲がった辺りにありますよ、そこも気のいい人たちばかりなので心配なく」

そういうと、くると背を向けて、「じゃあ、また機会があれば」といって夜の闇に消えていった。

「良い人でしたね」

マナが笑顔で言う、シリウスは軽く頷いて、「じゃあいくぞ」と足早に角を曲がった。

宿はこんな時間だが、空いていた。どうやら旅人が少ないのは本当らしい。宿だけでは稼ぎが少ないのか、こちらにも飲食店やら、雑貨屋などが、一階のスペースを埋めていた。

シリウスがチェックインを済まし、紅とマナは足早に部屋へ向かった。

「二部屋しか取らなかった。お前ら二人で一部屋で良いだろ？」
シリウスから鍵を受け取り、さっそく部屋に入る。

「ふー、なんか眠いかも、疲れたのかな」

ベッドに腰かけると、急に睡魔が襲ってきた。炎剣でも撃退できそうに無い。

「もう寝ましようか。まだ山道を歩かなきゃいけないわけですし」
マナも眠そうに目をこすっている。

結局、二人はすぐにベッドで横になり、あっという間に眠りに落ちた。

……………。

……。

「ん、暑う」

紅は布団の中で寝返りを打った。身体にまとわりつく汗が気持ち悪い。まるで熱でもあるかのように頭がぼうつとした。

少し、夜風にでも当たろうか、そう思い、だるいからだをベッドから起こした。

シリウスは、まだ眠りについていなかった。今日は星がよく見える良い天気だ。窓際に座り、月明かりだけで手元を見ながら、地図を広げる。

（この山を越えれば中央平原に出る……そこから、中央市街を抜けて、北に行けば王都・グランアビイリア。待っている。俺はすぐに帰る）

一瞬、帰ってどうする？ という疑問が頭をよぎった。だが、首を振り、その思いを振り払う。

行けばわかる、そんな不確かな気持ちを抱いていた。

ふと、物音が聞こえた。

（そろそろか……よし、）

シリウスは剣を握り締め、荷物をまとめ始める。

「いつでもかかってきやがれ」

一人、口の中で呟く。

「何の音？」

紅は、宿の二階にあるテラスに出ていた。すると、街の方から物音が聞こえる。ゴソゴソと何かが動く音、次第に街に明かりが灯り始めた。

足音が響く、それも大勢の。そして、足音は徐々に近づいてくるようにも聞こえる。

「……やばっ!？」

足音ではなく、蹄の音だった。馬に乗った山賊のような連中が、紅のいる宿を目掛けて猛進してくる。その手には松明が灯され、その数は十ほど。

「シリウスに知らせないと……」

急いで宿の中に戻る。

すると、階段の傍で、慌てて上ってきたアーバスと鉢合わせになった。

「大変です、紅さん。山賊が攻めてきました、急いで避難してください、奴らは旅人の所持品が目当てでしょう」

「待って、シリウスに伝えないと!」

「大丈夫です、先ほど宿の外にいたのを声を掛けておきました。今頃、夕食をとった店に避難してるでしょう。さあ、マナさんも起こして」

言われるままに、部屋で熟睡していたマナを起こし、まだ寝ぼけているが、状況を察したらしく、飲食店まで一緒に走った。

「こっちだ、ほら、早く」

店の軒先で、店主の大柄な男が手招きしている。街には相変わらず蹄の音が響いているが、見つかった気配は無い。

「ありがとうございます、」

店の中に入ると、先ほど食事をとにした面子がそろっていた。全員神妙な面持ちで、武器を構えている者もいる。

「シリウスは? 先に来てるはずだけど……」

見回すが、どこにも姿が見えない。まさかとは思うが、戦いに向かっているのかもしれない。

「安心しろ、奥の倉庫にいる、ほら、こっちだ」

カウンターの奥に厨房がある。その端の方には、食糧倉庫のよくな分厚い鉄の扉がある。店主に、促されるままに、扉をくぐる。

四畳半ほどある広さの空間には、所狭しと食料が積まれていた。人が三人ほど入るスペースが空いているがシリウスの姿は無い。

「あれ、どういう……」

後に、マナも中に入ると、店主は何も言わずに、ドアを閉めた。その勢いの強さで、ボタン！ と大きな音が耳を叩いた。

「出して！ ねえ！」

紅が、ドアを叩くが、びくともしない。外から鍵がかかっているようだ。

「もしかして……騙されたんでしょうか？」

マナが驚愕に顔をゆがめながら呟いた。

第二十一話 裏切りの街、流れる時間

監獄島の先端に位置する船着場には、一隻の巨大な船が停泊していた。中には、全員が一樣に白で統一された服装の、騎士や魔術師が乗り込んでいる。

その船に、一人の男と、一人の投獄者が歩み寄る。

「俺をここから出すつもりか？ どうなってもしらねえぞ？」

投獄者は、横を無然と歩く男に吐き捨てた。男は顔色一つ変えず、歩き続ける。辺りはまだ暗い、船を出すには夜が明けた方が良いのだが、そんなこともお構い無しに出航の準備がなされる。

「一つ忘れていることがある、当時、地獄とまで謳われた貴様を、この息が詰まる監獄に納めることの出来る力を持つものたちは誰なのか」

投獄者の脳裏には、戦場で突如現れた白服の集団を想起させられた。た。

「テメエたちが、まあいい」

諦めを込めた溜息をつき、投獄者は船に乘せられる。

「ところで、貴様。名をなんと言う？」

「名は無い、好きなように呼べ」

投獄者、それ以上の名前は無い。

「では、当時のように。地獄と、便宜上呼ばせてもらおう」

白い男は、船室の一番奥、幾つもの封印術式が施された一室へ招いた。

船は出港し、監獄島を後にした。

「目指すは……王都、グランアビリア」

白い男はそう、囁いた。

シリウスは夜の鉦山都市を駆け抜けていた。街中には山賊のような者達があふれているが、良く見れば昼にバスで出くわした者達や、酒場で飲んだくれていたものまで混ざっている。

（とんだ街に着ちまったみたいだな……一つの組織みたいに統制感がある）

シリウスは、宿で既に紅とマナの姿が見えないのに気づき、奴らに先を越されたことを知ったが、大体の監禁場所はめぼしが着く。だが、そこまでの道を、ことごとく山賊が埋めてしまっている。

（まずいな……俺を徐々に追い込んでいやがる）

奴らにも、大まかな位置はつかめているのだろう。地の利は向こうにある。

「おや、こんなところに隠れていたのですか」

シリウスの後ろから、声がかかる。

振り向けば、温和な笑顔をしたアーバスが息を切らしている。今までシリウスが隠れていたのは、街の南端にある建物の屋根、平たい屋根だったので上るのは容易く、街を見回すにはうってつけの場所だ。

「捜しましたよ、さあ、一緒に逃げましょう」

「そうだな、まず、その右手に隠した凶器を捨てろ」

シリウスが言うと、ピクリと額に青筋が走った。

渋々、背中に回した右手を、前に差し出す。形状は普通のナイフだが、刃が紫色に変色している。おそらく、たつぷりと毒が染み込んでいるのだろう。

「気づいていましたか……ご安心ください、まだあの二人は生きて

ますよ」

「ちっ、やっぱり捕まってやがったのか」

シリウスはつばを吐くと、剣を握り締める。

「おやおや、野蛮ですねえ、言っておきますが、二人を『生かしておいてあげてる』と言うことをお忘れなく」

アーバスの顔が、それまでの温和な笑顔から一転、皮肉に歪んだおぞましいものとなる。

「馬鹿が。紅のことを良く知らないな……」

「なに？」

「魔術師、だったらどうする？」

「それはそれは……しかし、貴方達も何か勘違いしていませんか？」

アーバスは、徐々に声色が、気のよさそうな青年から、皮肉っぽいシニカルなものに変わる。

「ドレッドノート、というのはご存知ですか？」

「ドレッドノート？」

「はい、おねえちゃんが追いかけてた悪党の組織です。その全貌は謎に覆われ、噂によれば、時には下請けの小企業、時には大規模な闇組織、時にはただ一人の殺し屋とも言われています。ですが、おねえちゃんはその手がかりを掴んだみたいで……」

倉庫の中、これまでの経緯をマナが話していた。

倉庫の中には、紅の炎で、マナの持っていた占いの小道具であるろうそくに火を灯していた。じめつとする空気をこらえながら、紅は尋ねる。

「それで居なくなっちゃったの？」

「はい、私はどうしたら良いかわからなくて、とにかくおばあちゃ

んのところへって思っで。すいません、黙ってて。まさかこんなことになるとは……」

「いいのいいの。それじゃあ、バスで絡んできた三人組はやっぱりその組織の奴なの？」

昼のバスでの出来事を想起した。

「だと思ひますけど……弱すぎませんでしたか？」

その世界では有名な組織の一員なら、あの程度で引くとは考えにくい。

「芝居……だったのかもね、誰かを引き立たせるための」

よし、といいながら、紅は腰をあげる。

「どうするんですか？」

「こうすんのよ」

途端、紅の手のひらから放たれた炎剣が、分厚い倉庫の壁を吹き飛ばした。

「さあ、行こ」

紅はマナを手招きした。

「ドレッドノートか、それは良いことを聞いた」

シリウスはにやりと笑う。

それまで、噂にしか聞いたことの無い組織、その実態を目の当たりにしたというのは、なかなか出来る体験ではない。

だが、もちろんアーバスにも、軽々しく喋ってはいけないこととわかつている。

「逃がす気は無い、ということですよ？」

瞬間、両者の得物が交差した。

どちらも一歩も退かない。先に次のモーションに動いたのは、軽

いナイフを持つアーバスだった。素早く身を低くしてシリウスの懷に入ろうとする。だが、その動きを予測していたかのように、シリウスの右足が打ち上げられる。

「ツツ、変わった動きですね……」

顎をかすり、一旦退くアーバス。

シリウスは、ついこの間の一人の剣士との戦いを思い出す。

「断然……遅いぜ」

シリウスは既に、アーバスと眼前の距離まで迫っていた。慌てて対応するが、ナイフでは剣を受け止めるのに、少々難がある。

シリウスの剣先が、アーバスの腕を切り裂き、その手に握るナイフを弾き落とす。

その勢いのまま、シリウスの右足による回し蹴りがアーバスの腹部を直撃し、建物の屋上から吹き飛ばす。ちょうど路地裏のゴミ箱に直撃する。

「ははっ、良い気味だ」

シリウスは言い残し、屋上を後にした。早く紅たちを捜さなければいけない。

飲食店の倉庫の扉が急に吹き飛んだ。その付近に立っていた見張りの男が二、三人巻き込まれ、巻き上がる埃の中から、二人の少女が飛び出す。

「何だと！？ 小娘、何をした！？」

「こうしたのよ！」

店主である大柄の男は、巨大な斧を構えていた。その顔面目掛けて炎剣を放つ。

いきなり飛んできた魔術に戸惑いながらも、斧で炎剣を切り裂き、

相殺すると、怒号を飛ばして援軍を呼ぶ。

「気をつけろ、魔術師が居るぞ!!」

店先からも沢山の男達がなだれ込んでくる。狭い店内で、キッチン側に紅たちは追い込まれる。

(まずい、ボーガンみたいなの持つてる奴も居る……よし、)

「かかれ!!」

大柄な男の掛け声で、一斉に攻撃が放たれる。ボウガンの矢が、一同に紅を狙う。

「マナ、気をつけてね!」

紅は一瞬、身を屈め、床に手を着いた。もちろん、矢をかわすためではない。

紅たちと、男達の間、壁のような火柱が上がった。飛んで来た矢は、一瞬で焼け落ち、男達は攻めあぐねることになる。

だが、このままでは紅たちも、出口へ向かうことが出来なくなる。つまり、この火柱が消えた瞬間、再び一斉攻撃を喰らうことになる。

男達は、火柱のせいで暑くなった店内で、じんわり手に汗を握らせながら、攻めの瞬間を待つ。

「消えるぞ……今だ!」

掛け声とともに、火柱が弱まった。その期を逃さず、男達はキッチンに乗り込むが。

「クソッ! やられた!」

キッチンに二人は居なかった。

かわりに、人が一人、優に通れそうな大穴が開いていた。

紅の魔術にかかれば、建物の壁を突き破るくらい、容易いものだった。

「追え、追うぞ!! 絶対に逃がすな!」

大男の声とともに、男達がいっせいに夜の街へ駆け出した。

第二十二話 逆転のカード、動き出す地獄

「はぁ、はぁ、マナ、大丈夫？」

紅とマナは鉦山都市を、北に向けて駆けていた。理由は二つ。後ろから追いかけてくる秘密組織、ドレッドノートと思われる男達から逃げる事。そして、シリウスと合流することだ。

シリウスとはぐれてからは連絡が取れていないが、おそらくシリウスも北、つまり、鉦山都市を抜けた山道側を目指しているだろう。という予想があった。

もはやこの街にいる意味は無い。一刻も早く立去るべきだ。

「す、すみません……少し、意識が……」

先ほどから、走る足がふらついて来ている。

「どうやら、食事に睡眠薬が混ざっていたみたいです、私を置いていっても構いません、早く逃げて」

後ろからは、既に追っ手の姿が見え始めている。このペースでは追いつかれてしまいそうだ。紅の魔法でも戦えないことは無いが、囲まれるとさすがに分が悪い。

「バカ、置いてけるわけ無いでしょ。ほら、手を握って」

「は、はい……」

同じく食事を食べた紅は、何故か睡眠薬の効果が無いようだ。睡眠薬も、生易しいものではない。今も、マナは意識を保つのでやっとなのだ。

「……ん、こっち」

急に紅が脇道に入った。裏路地のような場所で、もともと薄暗そうな場所が、夜ということにより一層薄気味悪くなっている。

「ここでやり過ぎそう」

これ以上マナをつれているのは良くない。ここで大人しくやり過

ごす作戦に出た。

ゴミ箱の陰に潜み、表通りを駆け抜ける飲食店の男達を尻目に、別の道に行く。

「紅さん、これからどうしますか？」

「そうね……まずシリウスに会わないと……！？、マナ！ 伏せて
！！」

紅の目には、マナの背後に迫る細身の男の姿が、暗闇の中からうつすらと見えた。

マナが反応する前に、男の腕が、マナの首をロックする。マナの身体を盾にするような体勢になり、その手には真っ黒な刃のナイフが握られていた。

「動くな……魔術師、このナイフには猛毒が仕込まれているぞ……」

そこには、気さくな笑顔を殴り捨てたアーバスが立っていた。

「マナ！」

紅の魔術で、アーバスと戦うのは問題ないかもしれない。だが、マナも巻き込めば、彼女は無事では済まされないだろう。

それに、アーバスには、魔術師であることを伝えていなかった。それなのに、彼はそのことを知っている。今までの男達は、不意をつく形で効果があった。しかし、それも今は上手くいかないだろう。

「両手を後ろに回せ……言うことを聞かなければ、……」

そう言いながら、手に握るナイフを少し動かす。

アーバスの顔は脂汗でべっとりしていて、息も荒い。衝動を必死に堪えているような、そんな一触即発な雰囲気を持っている。紅は大人しく従うことにした。

「良いんですか？ 私を殺せば……」

首に腕を巻かれているマナが、必死に言葉をつむぐ。

「黙れ！」

すぐにアーバスの腕に力が入る。首が締め上げられ、足がわずかに宙に浮く。

「彼女に対抗する反撃のカードを失いますよ……?」

それでもなお、声を絞り出した。

紅にはどうすることも出来ない、ただ、マナにも何か策略があるような、そんな気がした。

「うるさい！ 貴様ら、よってたかつて俺の計画を邪魔しやがって、こ、殺してやる……」

言葉ではそういつつも、ナイフを動かすことが出来ない。やはり、彼にはマナを殺せない理由があるようだ。

「ツツ、動くな！ 魔術師、」

マナを腕で締め上げ、紅に身体を向けて、そのままアーバスは後退を始めた。逃げるつもりだ。

紅は魔術を使えば、マナに攻撃してしまうかもしれない。素直に相手の要求に従うしかない。

「そのまま、そのままだ……いいぞ、黙っている」

アーバスとの距離が徐々に開く。このまま走り去られたら追いつけるかわからない。

「、紅さん！ 今です！」

首を絞められた状態で、マナがありったけの力を振り絞って叫んだ。

途端、その声に呼応するかのように、アーバスの足元、マナの背後辺りの地面から、氷柱が突き出した。氷柱はマナとアーバスの間を分断するかのように、アーバスの腕を切り裂き、その衝撃を利用して、マナは彼の元を離れた。

その隙を見逃さず、すかさず紅が炎剣を飛ばす。

何の盾もなくなったアーバスは、炎剣が直撃し、そのまま吹き飛んだ。

「死んでないと思うけど、まあ立ち上がれないでしょ」

紅は一応、手加減をしたつもりだ。もちろん手を抜いたというわけではないが。

「さあ、行きましょう。今の騒ぎで追手に見つかるかもしれません、」

依然として息が苦しそうだが、マナが力強く言った。

「ところで、さっきの水柱はなんなの？ 魔術みたいだったけど」

「ああ、あれはタロットカードを利用した呪文の一種です、本来、戦闘用ではないんですけど。先ほどののは、魔術師のカードの正位置の効果で創造、それとカップの7の小アルカナで、幻想、そしてカップは水の四大元素をつかさどりますから、水柱が創造されたわけです。でも、先ほどののは幻術の一種で、一瞬の効果しかありませんが、それでも効果は確実にあり、――――」

「も、もういいよ。わかったから」

これっぽっちも紅にはわからなかった。だが、良く見れば、水柱が発生した地面のところには、二枚のカードが重なって落ちていた。

「これが仕掛けてて訳ね。よし、じゃあ早く行こう」

再び、マナの手を掴んで、二人は走り出した。

「ちっ、やっぱり来ないか……」

シリウスは、鉱山都市の北側、山道へ抜ける道の門の付近に身を潜めていた。門は閉ざされ、見張りの男が四、五人居る。戦っても援軍を呼ばれたら厄介だ。

紅達が、シリウスの意図を読んでここに来るかと思いきや、なかなか手間取っているようだ。

「捜しにいくべきか……いや、入れ違いになるのは避けたいな」
シリウスは一人、夜の街に身を潜める。

「^{いかり}錨を下ろせ、船を止めろ」

真っ白な集団を乗せた船は、一時港に止まっていた。

監獄島を出発し、早くも本島までやってきた。東西南北に突き出た半島を持つ、十字型のような島の、今はちょうど南の半島と、東側の半島の付け根部分に間、入り江のような場所に着ている。

目指す王都は北の半島に位置するため、海路を使えば、東の半島を回っていかなければならない。それにはさすがに時間がかかるため、一時の食料供給のために寄った。

「まだ、着かないのか……？」

船室の一番奥、窓も無い閉ざされた部屋の柱に、鎖でつながれている男が居た。

身体には囚人服が溶けてべったりと固まり、すすけた顔や、伸び放題の髪。

「まだだ。もうしばし、待つが良い」

その男を見下ろすように、真っ白なローブを纏う男が言った。

「アルタイル氏、着岸が完了しました。これより積み込み作業を開始します」

鎧の男が部屋に入り、呼びかけた。

アルタイルと呼ばれた、白いローブの男は、「見張っている」と言い残し、部屋を後にした。

「おい、」

囚人服の男、ゲヘナが、鎧の男に呼びかける。

「何だ？ こっちは忙しいんだ。なんで貴様の見張りなんて……そもそもどうして今更貴様を監獄島から連れ出すというんだ……」

独り言のように、まるでゲヘナを人間としてみていないかのよう
に、呟く。

「こっちに来い……話したいことがあるんだ……」

「ハア？ ちっ、何だ？」

鎧の男は渋々、ゲヘナに顔を寄せる。

「醜いその顔をどうにかしろ。クズ」

瞬間、鎧の男は何が起きたのかわからなかった。

そして、終に、何が起こったのか知らぬまま、鎧の男は床に崩れ
落ちた。

「ふん、やっぱり、あいつ以外は雑魚みたいだな」

ゲヘナは、手に握る、鎧の男の頭部を適当に投げ捨て、部屋を出
る。

つながれていた鎖はとうに千切れていた。

「奴は居ない……な。ふん」

自嘲気味に笑い、船の甲板に出る。

夜の月に照らされた辺りを見回し、道を塞ぐものはすべて殺戮す
る。

一瞬にして、船の上は地獄と化した。

「出てこないのか？ アルタイル。それならば、俺はまだ生きるぞ」
ゲヘナは船を飛び降り、再び、本島の大地を踏みしめた。

第二十三話 月の明かり、漆黒の洞窟

紅とマナも、北側の門まで辿り着いた。門には見張りの男が四、五人ほどいるが、シリウスの姿は見えない。

辺りは月明かりでぼんやりと照らされ、門には松明が掲げられている。

「どうでしょう……このままだとシリウスさんと合流できないかも知れません」

「いいや、その心配は無いみたい」

紅が指差す先には、建物の影から手を招いているシリウスの姿があった。

「無事だったか？」

シリウスの元へ駆けつける。シリウスは特に傷を負っていないようだ。

「マナが少し体調が悪いみたい、でもそれ以外は大丈夫」

シリウスが、マナの様子を確かめる。額に手を当て、熱を測る。

良く見れば、マナの顔は汗で濡れ、息も荒くなっている。

「これから森を抜けることになるが……大丈夫か？」

「大丈夫です、私を気にしないで、」

マナは力強く頷いた。

「よし、じゃあ行くぞ。まずあの見張り達をどうにかしないといけないわけだが」

改めて、門を見る。見張りは全員武装している。正面から戦っても、勝てるかわからない。更に、タイミングをうかがっているうちに、次々と見張りの人数が増えていく。

「ちっ、街から出させないつもりか……」

シリウスが舌打ちをしながら言った。

「ねえ、シリウス。一人だけならあの中に飛び込める？」

紅は申し訳なさそうにシリウスに問うた。

その意味を図りかねているシリウスが、不思議そうに紅を見る。

「あの松明、消すことが出来る？」

「出来なくは無いが……。だが、完全に暗く出来ないぞ？」

松明の明かりを消すには根元から切ってしまう方がいいが、切ったところで地面に落ちた先の部分の火が消えないかもしれない。

「それなら……これを使ってください」

マナが懷から二枚のカードを取り出した。

「タロットカードです。これを重ねれば、水流の呪文が発動します。それで火を消せるかと」

「こんなものまで持ってたのか……よし、任せろ」

シリウスがマナからカードを受け取り、闇に紛れて門に近づく。

「どうするんですか？ 明かりを消して。私たちまで見えなくなりそうですけど……」

「大丈夫。心配ないって」

そういう間にも、シリウスは屋根の上に上り、飛び移り、門に近づいた。そこから、忍者のように飛び降りる。突如現れたシリウスに、門番達は不意をつかれ、シリウスの先制の一撃を喰らう。

その後、シリウスはタロットカードを松明の下の地面に叩きつける。一瞬にして水が、間欠泉のように飛び出し、門を包んでいた明かりが消失した。

「今がチャンス！」

紅とマナは、暗闇になった門に駆け出す。

辺りには明かりが無い。だが、視界はいまだ保たれていた。

「あ……月明かりだ」

マナは夜空を見上げる。そこには、暗い夜をぼんやりと照らす満月があった。

そして、紅たちは、暗闇の中を常に動いていたので、暗い場所に

は目がなれている。逆に、門番達は常に松明を灯し、明るい方に目が慣れていたため、急に暗くなると、辺りが見えなくなってしまうた。

門の前では、完全に混乱した門番達を、シリウスが叩き伏せ、門の鍵を開けていた。紅とマナも合流し、無事に鉦山都市を抜け出した。

「これから森を抜ける！ 追手を振り切るぞ！」

三人は月明かりの照らす森へと駆け出した。

森は、人が通る山道があるが、いかんせん暗いため、危険である。更に、後ろからは、新たな明かりを灯した追手が迫りつつある。

特に人が手を加えていない原生林は、様々な生物も多く存在する。

「とにかく、この先にある山越えトンネルまで行くぞ」

シリウスに腕を引かれ、マナが続き、その後ろを紅が走る。

時折、追手の放つ弓矢が三人を掠める。

「シリウス！ 追いつかれる！！」

三人の後ろには既に追手が迫っている。

体調が悪いマナをかばって走っているため、やむを得ない。

「クソが……俺が一旦足止めをする、紅がマナをつれてくれ！」

一瞬、紅とシリウスの目が合う。

「絶対に……無事でいてね、絶対帰ってきてね」

「任せとけ」

軽く言うと、シリウスは引き返した。

その背中が闇に紛れる前に、追手の松明が彼の姿を照らす。突如、引き返してきた彼に驚きながらも近接戦闘を開始する。

「さ、行こう。シリウスは大丈夫だから」

紅は、自分に促すように言うと、息を切らしているマナが頷いた。

未知の森に、加えて足元を照らすのは月明かりのみという状況で、

苦戦しながらも進み続けた。すると、突然高い崖のような場所に突き当たった。良く見れば、道は崖の中に掘られたトンネルに続いていた。

「行くよ……」

ポツリと呟き、入り口に近づく。

木で出来た柵がかかっているが、鍵は掛かっていない。トンネルの中には明かりが無く、真っ暗で先が見えなかった。紅は手近な木の枝を集め、魔術で火をつけようとしたが、マナにとめられた。

「私の荷物の中にランプがあります、つかってください」

そういうと、ロープでリュックみたいに背負っていたトランクの中から、水晶玉をどけて、ランプを取り出した。

「ありがと、これは魔力で光る奴ね」

前に、シリウスと遺跡に行った時、使ったものと同じタイプだ。

柵を乗り越え、洞窟の中に這入ると、途端に空気がジメジメと纏わりつくような不快なものに変わった。依然として、道はあるのだが、夜ということもあるのか、全体的に怪しい雰囲気包んでいた。「追手は来ないみたい……シリウスが頑張ってる、私たちも頑張らないと」

ランプがあるとはいえ、洞窟の奥までは光が行かない。一步踏み出すごとに、足音が反響し、感覚を狂わせる。

「そういえば、夜の洞窟にはナイトウォーカーが出るそうですが……」

マナが不安げにポツリと呟いた。

「ナイトウォーカーって何!？」

紅が聞いた途端、洞窟の闇の奥から、ガサリという何かが動く音が聞こえた。

「バットとラットが合わさったような……」

マナが上手い言葉を考えている間に、闇の中からそれが姿を現す。マナの言葉はあながち間違っていない。何故なら、四足で歩く

鼠顔の生物の、背中からコウモリの羽が生えていたからだ。しかし、明確な間違い点もある。それは、鼠や蝙蝠と比べ物にならないくらいの大きさだったからだ。一メートルはありそうだ。

「どうするの!？」

「安心してください、獲物以外には大人しく、やり過ごすそうです」「そう、ところで獲物ってどんななの?」

「すみません……あまり詳しくありませんが、獲物と面した時は牙をむき出しにして鳴くんだそうです——」

その言葉を遮るように、二人の目の前にいるナイトウォーカーが、牙をむき出しにして鳴き叫んだ。

「……。逃げるよ!」

紅がマナの腕を掴み、飛び跳ねるように道を引き返そうとするが、それも遮られた。

後ろからも、それも群れになったナイトウォーカーが迫ってきていた。

「た、戦うしかないのね?」

正直、その強さよりも、グロテスクな見た目の方が恐ろしい紅であつたが、意を決して戦う構えに入った。

急に飛び掛ってきた一匹のナイトウォーカーに、躊躇なく炎剣を飛ばす。しかし、ナイトウォーカーはその骨ばった羽を羽ばたかせ、宙を滑空する。炎剣の狙いははずれ、洞窟の天井をえぐるだけだった。

その間にも、地上を這うように別のナイトウォーカーが迫る。上から飛び掛ってきたのは四だったようで、紅は完全にしたに注意が回らなかった。

「わっ、まずい!」

紅はてつきり、足をかじられるかと思った。

だが、ナイトウォーカーは、まるで紅を恐れるかのように避けて通り、その後ろにいるマナを捉える。

「えっ!？」

不意を突かれたマナは、ナイトウォーカーに足をすくわれ、バランスを崩す。そこに畳み掛けるように、別のナイトウォーカーが飛び掛る。

「マナ!!」

紅は急いで助けに回ろうとしたが、急に目の前をナイトウォーカーの羽が覆った。咄嗟のことで、むしろ驚いて身をたじろいでいる間に、マナは何体ものナイトウォーカーの背中に乗せられるような形となっていた。

（炎剣を放ったらマナに当たる……!）

他の紅の魔術を使っても、この洞窟自体を落盤させてしまうかもしれない。

ためらっている間に、マナの姿は闇の中へ引きずり込まれていく。「紅さん、こいつらは魔力を食べるんです!　ただ、大きすぎる魔力には――――」

紅がその先を聞く前に、マナの姿が完全に闇に消えた。

ランプを構えて急いで追いかけても、既にその姿はもう無かった。

「……マナ、待ってて。絶対に助けるから」

紅はシリウス無しでは一人の女の子も守れなかった。

だからといって、助けることが出来ないというわけではない、絶対に助けるために、紅は洞窟を進んだ。

第二十四話 魔物の巢、這い出す巨影

「ふう……こんなもんか」

シリウスは、森林の中に身を潜め、敵の様子をうかがっていた。敵はシリウスの攻撃によって半壊していたが、それでも続々と街から援軍が来る。

（正直、女の子一人に対する追手の数じゃないな……それほどにヤバイ奴なのか？）

シリウスも、実際の所マナのことを良く知らない。まして、彼女の姉と、この巨大な組織『ドレットノート』の関係も不明瞭だった。（ともかく、早く合流しないとまずいな……）

敵をかく乱することには成功したが、いつまでも身を隠していれば、奴らは道を進み、山越えトンネルへ向かってしまう。適度に森の影に身を隠しながら遠距離攻撃をしつつ、自分も進まなくては行けない。

「まってるよ……二人とも」

シリウスは闇に紛れ、二人の元へ急ぐ。

「困りましたね……」

マナは洞窟の、おそらく最奥部にいた。『おそらく』というのも、辺りは真っ暗で、ナイトウォーカーに連れてかれるままにされているからである。

ここはナイトウォーカーの巢のような場所であるだろう。むしろ、食事場という方がふさわしいかもしれない。辺りに転がる白骨は、果たしてどの生物のものだろうか。

その中心部に座っているマナだが、ナイトウォーカーは彼女に指一本触れることが出来なかった。彼女の座っている点を中心に、星型の結界が張られていた。星型の各頂点には、タロットカードが置かれている。結界とは、突き詰めればただの魔力を垂れ流しているだけのようなものだ。しかし、高密度の魔力が放つ膜は、とても強固な壁を作り出すことが出来る。

（でも、この結界はニセモノ、張りぼてみたいな物）

マナの使う呪文では、形式は結界でも、中身はスカスカのニセモノしか作り出せない。タロットカードを触媒として、水晶玉の持つ魔力を借りて、ようやくナイトウォーカーを退けるものを作り出せている。

そして、それも長くは持たない。既に、各頂点に置かれたタロットカードは、焦げ始めてきている。本来、タロットカードはこういうものに使わないのだ。

（私が連れてこられたのは、たぶん水晶玉の放つ魔力につられたからだと思う……だったら、この水晶玉をおとりに使えば……）

ナイトウォーカーは魔力を食う生き物である。しかし、大きすぎる魔力には恐れを抱き、逃げ出すという。先ほど、襲われたときに思い出したが、そもそもマナは魔術師ではないので、魔力をほとんど使えない。そして、紅は魔術師だが、先ほどの戦闘では、彼女を避けているようにも見えた。他に魔力を持つものは、やはり水晶玉しかない。

（でも、これは御祖母ちゃんからもらった大切な……）

立派な占い師として、水晶玉を大切にしなさい、と。

（やっぱり、手放せない。お願いします、紅さん。助けに来て……）

マナは、ナイトウォーカーの大群に囲まれながら、助けを待つ。

「あれ……？ 迷った？」

紅は一人、洞窟を駆け回っていた。

マナを助けるために、洞窟の奥深くまで来たのは良いが、明らかに道はずれ、更には幾つも枝分かれがあり、しばらくすると一度通ったような場所に戻ってきていた。

早くしなければ、マナが食べられてしまうかもしれないという焦燥感から、冷静に考えていなかったが、一回りしてようやく落ち着いていた。

最後にマナが言った言葉を思い出す。

（奴らは魔力を食べる、でも、大きすぎる魔力には……）

そういえば、先ほどからナイトウォーカーと遭遇していない。あれほどの大群がいたのだ、洞窟を駆け回っていれば、一匹ぐらいは見かけるだろう。

（……つまり、私の魔力をおそれているのかな？）

すると、洞窟の奥から、何者かの足音が響いてきた。

（追手！？ まさか、こんなに早く？）

紅は息を潜め、ランプの明かりを掲げた。足音は徐々に近づいてくる。

紅は魔術を使う構えになり、いつでも敵が来て良いようにする。

足音が迫り、角の向こうにはもう来ていた。紅は意を決して、角を間がった。

「！？ って紅か」

「シリウス！？ はあ、よかった」

そこには、驚いた顔のシリウスがいた。

安堵で腰が抜けるかと思ったが、何とか踏みとどまった。それどころではない。マナのことをシリウスに伝えた。

「……そうか、ナイトウォーカーか。急ごう、早くしないと喰われちまうぞ!」

シリウスに急かされ、再び洞窟を駆け出す。

「でもどこにいるかわからないんだよ!」

しかし、シリウスは首を振り、洞窟の奥を指差した。

「良く見ろ、ナイトウォーカーが逃げてるだろ?」

シリウスの指の先には、確かに慌てて、洞窟の奥に逃げてくナイトウォーカーがいた。怯えているようである。

「紅の魔力の大きさで、奴らはびびってるのさ。そして、逃げる場所……」

「巢?」

「そういうことだ。やばい時には家に籠ろうとする。そして、捕らえた獲物を食う場所……」

シリウスの言わんとしている事を察し、二人は足を速める。

逃げるナイトウォーカーを必死に追いかけると、徐々に洞窟の幅が狭くなってきた。だが、まるで誰かが整えたかのように、綺麗な筒状になっている。

「それほど行き来が多いんだろ。気をつけろ、巢にはかなり居るぞ」シリウスの忠告を受け、思わず背筋がぞわっとする紅だった。

洞窟は、枝分かれが幾つもあり、そのどれもがうねっていて足をくじかないように気をつけなければいけない。しかし、確実にナイトウォーカーの数が増してきている。

すると、一つの大きなドーム状の空間に出た。

そして、そこには数多のナイトウォーカーに囲まれ、今にも消えそうな結界に包まれたマナの姿があった。

「マナ！ 待ってて、今助けるから！」

紅が近づくと、ナイトウォーカーの輪が一斉に退いた。そして、出来た道を走り抜ける。

だが、マナは慌てて手を振り、逃げるように言う。

「ダメです、今来ちゃいけません！」

マナの慌てぶりを見て、不信に思い、改めて周りを見回せば、確かにこれまでとは桁違いにナイトウォーカーが、飛ぶように逃げている。すぐに、ドーム状の巣には、一匹も残らなかった。

「どういこと……？」

戸惑う紅の耳に、奇妙な音が聞こえてきた。低く口笛を吹くような、沸騰したヤカンのような、トンネルを内側から削るような、重苦しく鳴くような。

「カドウケイオン……くそっ、災難続きだな！」

シリウスが罵ると、洞窟の奥から、巨影がぬうっと現れた。

巨大な蛇の眼が、紅を睨んでいた。

第二十五話 洞窟の主、撃鉄の響

カドゥケイオン。それは山岳地帯の極わずかな地域にしか生息しない、巨大な蛇の一種だった。その体内に、魔力を内蔵し、血液には特殊な効果が含まれ、その用途も様々だが、捕らえるのが大変困難で、その生態も謎が多い。

そして今、大蛇は紅たちを睨みつけていた。

「避ける!!」

紅は状況が理解できないのか、呆然としてしまっている。そんなことにも構わず、大蛇は牙をさらけ出し、舌を這わせて、狙いを定める。次の瞬間、大蛇の頭蓋が射出されたのかと思うほどに、暴力的な頭突きが放たれた。

咄嗟にシリウスの身体が動いた。紅を突き飛ばし、洞窟の壁に押し付ける。

洞窟の壁を粉碎するほどの威力を持つ頭突きを何とかかわし、再び立ち上がる。

「シリウス……どうしよう……」

圧倒的な大きさを持つカドゥケイオン。その姿に、既に紅は戦意喪失気味だった。

シリウスは紅を抱き起こし、走ってマナの元へ駆け寄る。もう結界は破壊されていた。

「逃げるぞ、ほら」

手を差し出して、マナを連れて走る。だが、カドゥケイオンの巨体が、ドーム状のナイトウォーカーの巢の出口をぴったりと塞いでしまっている。

もしかしたら、ここまでの通路はすべて、この大蛇が動いたこと

で出来た道だったのかもしれない。

「どいて、私が壁を開ける」

紅が前に踊り出て、炎剣を放ち、洞窟の壁に穴を開ける。

その間にも、大蛇が頭をこちらに向け、再び攻撃の姿勢に入る。

「クソッ、喰らいやがれ！」

シリウスがその首元に飛び込み、剣を突き立てる。だが、大蛇の鱗は鋼のように堅く、貫くどころか、傷一つ負わすことが出来ない。大蛇の頭が横に動いた。かと思えば、鞭のように首をしながら、シリウスを薙ぎ払う。シリウスの身体は浮き、洞窟の壁に身体を打ち付ける。

「ぐっ、」

肺から空気が吐き出され、咳き込む。

見上げれば、大蛇の二つの眼がシリウスを睨む。その巨大な、割れ目のような口からは、人を容易く串刺しに出来るような牙が、二本収まっていた。

「シリウス!!」

紅は誰かに後押しされるように、反射的に動いた。

大蛇の口がバツクリと開かれ、シリウス目掛けて発射される。走って間に合う距離ではない。このまま、シリウスは大蛇に噛み殺されるかもしれない。

だが、洞窟の中を轟音が響いた。

大蛇の口はシリウスを捕らえることは無かった。

「大丈夫!？」

紅が駆け寄る。

大蛇は今、紅の魔術によって出現した、巨人の腕によるアッパーを喰らい、天井に打ち付けられていた。

「大丈夫だ、それよりも早く逃げるぞ」

見たところ怪我をしていないようだ。紅は少し安心して、シリウスの手を引き起こす。

紅が開けた穴は、どうやら、別の通路に通じたようで、マナが先に行っていた。

「どうでしょう、これから」

マナが心配そうに尋ねると、シリウスが先頭に出て言った。

「とにかく洞窟を抜けよう、ドレッドノートの奴らもさすがに追ってこれないだろう。山を下れば、ヘミスラの町がある、そこで落ち着こう」

三人の行く道を照らすランプを、高く掲げて洞窟を出口の方へ走り出す。マナもシリウスも、そろそろ疲れの様子が見えてきている。早く抜けて休むべきだ。

「何か聞こえませんか？」

「……ああ、まあ、あれだけじゃ退治できないだろうな」

三人の背後、先ほどまで走ってきた方から、洞窟内部からズルズルとこするような音が響いてくる。

「来るぞ!!」

シリウスが叫んだ途端、再び大蛇の頭が闇から這い出た。口から舌を小刻みに出し、ぎよろりとした目は確実に獲物を狙う。

「それでも喰らえ！」

紅は振り向き様に炎剣を、三発飛ばす。一直線に大蛇の顔面に降り注ぐが、まるで火の粉を払うかのように首を振ると、炎剣を打ち消してしまった。

「奴の鱗は尋常じゃない、とにかく洞窟の外まで逃げるぞ！」

退治するのは、不可能だ。

今はとにかく逃げることを優先して考えるしかない。

洞窟は依然として暗闇のまま、外の光はまだ見えない。

大蛇の移動速度は、洞窟の中だからあまり速くないが、その巨体が動く速度は、人間のそれとは桁が違う。大蛇にとっては遅くても、人間にとっては十分早い。

「お、追いつかれる！」

紅は背後に迫り来る巨大な息遣いに身震いしながら、足を速める。だが、最近走りすぎたのか、足が痛い。

そうしている間にも、蛇の頭との距離は縮まっていく。このままでは逃げ切れない。

「くそっ、下がってろ！ 俺がやる！」

シリウスが足を止め、剣を構えた時、蛇の口が呼応するかのように、バックリ開いた。洞窟の狭い通路の中に、もう一つの穴が開いたように感じた。

上下から、四本の牙が、一斉にシリウスを目掛けて降りかかる。

「シリウス！ ダメエ！！」

紅は手を伸ばそうとしたが、その背中では遠すぎた。

シリウスは恐れることなく、大蛇の口の中に飛び込んだ、ように見えた。

その直後には、長い、鋭い大蛇の牙がシリウスの身体を分断するはずだ。

紅は目の前の惨状に思わず、目を塞ぎたくなったが、それはしなかった。シリウスは大丈夫だ。そう確信して、彼を信じて、すべてを見届ける決意をした。

シリウスの吼えるような叫びが、洞窟を反響する。

彼の腕が、牙の間を掻い潜るかのように動き、剣先を大蛇の口中、口蓋の部分へ突き立てる。だが、それと同じくして、大蛇の牙が降りかかる。

一瞬の間に、勝負は着いた。

シリウスの肩には、大蛇の牙が深く突き刺さった。

大蛇の口蓋には、シリウスの剣が貫通していた。

大蛇の目元からは、銀色に光る剣先が飛び出し、真っ赤な鮮血を噴出していった。その痛みに、あの大蛇、カドゥケイオンもひるんだのか、大蛇は首を引っ込める。

「もっと鍛錬をつみな。そしたらまた戦ってやるよ」

大蛇に捨て台詞を吐き、シリウスは紅とマナの元へ戻る。

「大丈夫なの？ 肩から血が……」

「ああ、まあな。傷口は浅いみたいだ」

幸いなことに、口蓋に剣が刺さった衝撃で、大蛇の動きが鈍くなったようだ。後一步、シリウスの剣が遅かったら、大蛇を攻撃できても、肩から先が無くなっていただろう。

布で止血をし、洞窟を進むと、外の明かりが見えた。

「良かった、これで外に出られるぞ」

シリウスも安堵しきっていた、

その時、

背後から、不気味な鳴き声、むしろ唸るような、怒りに震えるような、そんな咆哮が響く。

「まさか……まだ懲りてないの？」

紅が呆れたように言うと、その予感は的中した。

目を真っ赤に染め、狂うほどに首をのた打ち回る大蛇が、三人に

襲い掛かる。

「外に出るぞ!!」

シリウスの声に、二人は走り出す。シリウスも後に続き、洞窟を脱出する。

まだ月明かりが明るい。雲ひとつ無い山道には、適当に森林を切り開かれた広場のような場所がある。どうやら、キャンプに使う人もいるらしい。幸運なことに、今は誰もいない。

三人を追って、大蛇も洞窟からすべり出てきた。

その全長は、二十メートルを裕に越す。今までは頭しか見えなかった。だが、今、その全体像を見たときに、比べ物にならないほどの威圧感を持つ。

大蛇、カドウケイオン。

「ここを下れば村がある、そこまで逃げよう!」

「待って!」

シリウスの提案に、マナが鋭く遮る。

「このまま私たちが逃げていったら、この大蛇も村まで着いてきちゃいますよ!?!」

村には、もちろんのこと、この大蛇を退治する術など無い。むしろ、この真夜中に、起きている人間も少ないかもしれない。

「じゃあどうするの!?! あれを倒せって言うの!?!」

紅は愕然として叫んだ。シリウスが決死の思いで、放った一撃。しかし、それを受けてもなお、この大蛇は三人を追ってきた。

「一旦、逃げ切るしかない、姿を隠そう」

シリウスが森へ向けて走ろうとするが、それを遮るかのように、大蛇の巨体が這い出る。

「ちっ、鬱陶しい、」

シリウスが背を向けようとした瞬間、彼の背中を強打した。大蛇の太木のような胴体が、鞭のようにしなり、辺りを薙ぐ。

「ぐっ、くそ、」

受身を取るが、紅に助け起こされた。

「それでも、喰らえ！」

紅は両手を天に掲げる。

そのはるか上空三十メートルほどに、炎の玉を作り出す。腕を振り下ろすと同時に、炎の玉は、大蛇の顔面に直撃した。

「逃げよう、」

シリウスの腕を引き、大蛇から距離を取ろうとした時、

「ダメだ、紅！」

シリウスが急に紅をかばうように抱きしめた。直後、大蛇の首がへし折った樹木が降り注いでくる。うめき声をもらすシリウスだが、何とか耐え切った。

「シリウス、ゴメン……」

紅の炎の玉を回避した拍子に、辺りの樹木を薙倒したようだ。

シリウスは背中に木々が降り注いだが、大怪我は無いようだ。

「気にすんな……それよりも、これをどうするんだ？」

ふと、月明かりが遮られた。大きな影にすっぽりと覆われたように、暗くなる。

見上げれば、大蛇がもうすぐそこまで迫っていた。

もう逃げようにも、立ち上がることが出来ない。シリウスは紅をかばったまま、大蛇を見上げ、睨みつける。

（もう体力が限界だ……せいぜい、後一回剣に触れる程度だな……）
冷静に分析した上で、この状況は絶望的だった。

「俺は、お前を絶対守ってみせる」

シリウスは紅に宣言した。

「うん。大丈夫、信じてる」

紅は答えた。

刹那、大蛇の大口が二人を飲み込もうと迫った。

もう避けられない。

だが、二人は死を恐れてはいなかった。二人でいるからなのか、不思議と恐怖はない。だからといって、この状況を打開する術もない。

大蛇の牙が二人を引き裂こうとした瞬間————。

連続する銃声が森に響き渡った。

かと思えば、大蛇の頭は、何かに撃たれたかのように、弾かれた。大蛇が二人を喰らうことはなかった。

「なに？ 誰なの？」

「よう、お二人さん。お邪魔だったかな？」

紅が見上げると、一人の男が視界に入った。

金髪の短い髪で、まるでハリウッド俳優と言われても不思議に思わないような風貌。少しキザに構えた細長い銃からは薄く煙がのぼっている。

「ダルク……ハットさん？」

「おや、まさか忘れてたともいうのかい？ 悲しいなあ、ハハッ」

ローアン・バザーのギルドで知り合った謎の男、ダルク・ハットは銃を構え、大蛇から二人を間一髪、助けてくれた。

「さあ、立ち上がれよ。反撃開始だ、まだダンスは終わらないぜ？」

第二十六話 反撃の一撃、炎の刃

「どうしてこんなところにいる？」

シリウスが立ち上がり、訝しげににらみがなら聞く。

するとダルクは肩をすくめて腕を広げて、オーバーなりアクションをとりながら答えた。

「お互い様だと思うけどな、まあいいや。あそこのお嬢ちゃんに呼ばれたんだよ、たまたま森で歩いていたところをね」

ダルクが指差す先には、木の陰に隠れたマナの姿があった。少し、得意げに微笑んでいる。

「そうじゃない、どうして森の中を歩いていたかを聞いているんだ、たまたま歩くような場所じゃないだろ」

シリウスは詰問するが、それは大蛇が首を起こす音にかき消された。「詳しい話は後にしようぜ」というダルクの言葉とともに、再び大蛇と対峙する。

「おい、イス、奴の動きを止めてくれ！」

ダルクが叫ぶと、森の木の間から一つの影が動いた。素早い動きに、目が追いつかないが、その影は大蛇の喉元に飛び込むと、長い槍を首筋に突き立て、大蛇の動きを止める。

ようやくその姿を捉えることが出来た。

褐色の肌に、アッシュブロンドの髪やや背が低い青年、彼もギルドでダルクといった人物だ。

「さーて、イスが奴の動きを封じてる間に一気に決めるぞ」

「どうするの？ あいつの鱗は私の魔法も、シリウスの剣も効かないんだよ！？」

これまでの死闘を思い返し、この大蛇を退ける方法は皆無に思える。

だが、シリウスがおもむろに呟く。

「いや、奴の口内……外に面してない皮膚はやわらかかった。なんとか口を開けたままにできればあるいは……」

「ならそれで決まりだ」

ダルクが、あらかじめ考えていたかのように、あっさりと同意し、構えに入る。

「まず俺の魔導銃で奴の注意を引く、その後は、イースが口を開かすから、止めは任せたぜ？」

ダルクは手に握る銃を振りながら駆け出した。

それに呼応して、イースが大蛇の喉元から飛びのく。間一髪、踏み潰させそうになりながらも、その素早さで距離を取る。

ダルクの持つ、魔導銃が連続して火を噴く。発射されているのはただの鉛玉ではない。それぞれが魔力の付加効果をもつ特殊弾だ。大蛇の皮膚をえぐるように命中し、大蛇の意識はダルクに向けられる。

「……いいか、俺が飛びこむ」

手短にイースがシリウスに言った。

その直後、大蛇の頭がダルク目掛けて射出された。それほどの速さで大蛇の首が動き、彼を丸呑みにしようとした。そして、ダルクはそこから一步も動くことが出来なかった。

「ダルクさん!!」

紅が悲鳴を上げるが、軽薄な返事が返って来た。

「へへっ、俺は無事だぜ？」

ダルクの目の前には、大口を開けた大蛇と、その口の、上あごと下あごを突っ張り棒のように支える槍を持ったイースがいた。

「嘘だろ……なんて速さだ」

シリウスが呆れながら、剣を構え、走り出す。

大蛇の上あごに、槍が刺さっているのか、大蛇は口を閉じること

も、開けることもできない。動けなくなった大蛇の弱点目掛けて剣を振るう。

だが、大蛇の口に辿り着く直前、シリウス目掛けて、鞭のような尻尾が難いだ。

「ちっ、……!!」

強烈な体重の乗った一撃を、剣で受け流し、なんとか回避する。後ろからダルクの援護射撃で、尻尾を退ける。再び、剣を振るおうとしたが、あることに気づいた。

「剣が……」

剣が真っ二つに割れていた。

度重なる連戦で、既にボロボロだったようだ。

「おいおいっ!?　しっかりしろよ!」

ダルクが呆れたように怒鳴ったが、状況は樂觀できるものではない。

ダルクの持つ魔導銃でも、大蛇の口内を攻撃することは出来る。

しかし、根本的な武器の違いがある、今必要なのは、奴の皮膚を大きく切り裂く必要があるのだ。

「なら、私の魔法で!」

紅が前に踊りだし、炎剣を身の回りに発生させる。

だが、それをシリウスが制止する。

「ダメだ、奴に魔術は効かない、奴の体内には魔力を持つ血液が流れているんだ、たとえ魔術を放ったとしても吸収されちゃう」

「そんな……」

この絶体絶命の状況で、役に立てないことに肩を落とす。

もはや打開策は無い。

イースが大蛇を押さえていられるのも、あと数秒程度。その後は、更に凶暴に暴走した大蛇が、彼らを喰らい尽くすだろう。

「……、おい、ダルク。その革の手袋を貸せ!」

シリウスが急に、ダルクに叫んだ。

ダルクの銃を握る手には、革の手袋がはめられている。この状況でそんな物を催促する意味がわからなかったが、その意味を図りかねている間にも、大蛇は暴れる。

「もう、限界だ……」

イースの槍を握る手が震える。大蛇は強引に顎を開き始めているのだ。

「早く!!」

「ちっ、ほらよ!」

革の手袋をはめると、折れた剣を握りなおし、今度は紅に向かつて言う。

「炎剣を俺に飛ばせ!」

「えっ!?!」

紅の周りには、先ほど発生させた炎剣が漂っている。もちろん、威力はそのままで。

人間であり、魔術師でもないシリウスが喰らえば、当然、ただではすまない。

「いいから! 早くしろ、俺を信じろ!!」

切羽詰ったこの状況で、適当なことを言っているわけではない。必ず意図があるのだ。

シリウスを信じる。その言葉に、紅は後押しされ、すべてを預ける思いで炎剣をシリウスにはなった。

炎剣は一直線に、オレンジ色の軌道を残しながらシリウスへ猛進する。

シリウスは守ろうとも、避けようもしない。

既に真ん中から折れてしまった剣を構え、

炎剣を切り裂いた。

「行くぞ!! カドウケイオンッ!!」

シリウスの持つ、折れた剣。その刃と、紅の放った炎剣の刃が合

成された。折れてしまった剣先を補う形で、一本の炎剣がシリウスの手に握られる。

しかし、この炎剣は、その名の通り、炎で出来ている。柄から下は鉄で出来ているため、熱をそのまま伝えてしまう。ダルクから借りた手袋があるが、それもジリジリと音を立てて、完全に熱をシャットアウトできるわけではない。今でもシリウスの手には焼けるような熱さが伝わっているはずだ。

その炎剣をしっかりと握りしめ、大蛇の大口目掛けて疾走する。

口に飛び込むような形で、横薙ぎに炎剣を振るう。

それまで、どんな攻撃も弾いてきた頑丈な鱗でさえも、バターのように、熱したナイフで切り裂かれていく。金属の剣と、魔法の剣が合わさって、大蛇の口を真横から裂くように切断する。

大蛇が悲鳴を上げた。

その時には既に、身体が二枚にスライスされていた。

「ハア、ハア、ハア、やったか？」

シリウスの手は焼け焦げ、剣を放り投げた。

大蛇は完全に動きが止まっている。

「シリウス、大丈夫!？」

急いで紅が駆けつけるが、シリウスは得意げに笑って、「心配すんな」とだけ言った。

「ハハッ、まさか本当にやつつけちまうとはね、伝説級の化物だったはずだが……まだ子供だったのかな？」

ダルクが一人、呟いていた。

「ダルク、どうする？」

そこに、イースが尋ねたが、「俺に任せとけ」と一言返した。

「ところで、俺の手袋の落とし前はどうするんだい？」

ダルクがシリウスの手を指差すと、完全に黒く焼け落ちてボロボロになった手袋があった。

シリウスは申し訳なさそうな顔もしないで、「そうだな……出世払いで」と流した。

「そんなことより聞かせろ。どうしてこんなところに居たんだ？偶然なんてありえないだろう？」

神妙な顔つきで、鋭く睨む。

ダルクは気にも留めないで、軽口を有用な調子で返した。

「あまり人のことに口出しするのは良くないぜ？……まあ、一つ、言っておく。お前は覚えてないだろうが、昔、俺は王都でお前と会ったことがある」

「なんだと!？」

シリウスは驚愕に目を見開いた。

「ただ……名前までは知らなかったぜ。シリウス」
そう付け足した。

シリウスは飛び掛らんほどの勢いでダルクに詳しく聞こうとしたが、

「あの……ケンカはやめてください!」

というマナの可愛らしい叫びで遮られた。

「ハハッ、ケンカじゃないさ。それよりも早く行こうぜ、ヘミシアの村で休もう」

ダルクが先陣を切って歩き始めた。

第二十七話 不思議な気持ち、煌く星空

開けた山道をシリウスと紅、その後ろにマナが続き、しんがりをダルクとイースが歩く。山道は空を覆うように木々の枝が伸び、暗さを一層際立たせていた。ふかふかした腐葉土を踏みしめ、少しづつ山を下る。目指すは山を下った先にあるヘミシアの町だ。

「紅、気をつけろよ、あの二人、何かたくらんでるかもしれない」
シリウスが声を潜めて紅に言った。

「でも、良い人みたいだよ？ さっきも助けてくれたし」
あの二人も、わざわざ危険なところに命がけで紅たちを助けてくれた。確かに、よほどの親切な人でなければそんなことはしないかもしれない。

「おいおい、心外だな。俺は女の子が困ってたらどこへでも助けに行くんだぜ？」

距離の開いた後ろから、ダルクのわざと気取った声が聞こえてきた。

「そんな調子で言われて信用できるか」

シリウスがぼそりと呟くと、その様子を一瞥したダルクが付け足した。

「まして、惚れた女なら尚更だな」

「なっ!？」

「ハハッ、俺はどの女性にも惚れてるようなもんだからな」

からかう様に笑うダルクに、牙をむいてシリウスは「あいつは絶対に信用するな」と怒鳴る。

そのやり取りに、笑ってしまう女性陣二人だった。

結局、シリウスも過剰に警戒するのが疲れたのか、それとも呆れたのか、ダルクとイースを黙認するようになり、山も大分なだらか

なところまで下ってきた。

マナのランプを高く掲げ、先のほうを照らすと、木々が開けたちよつとした広場のような場所に出た。

「わあ、すごい……」

急に、それまで屋根のように覆いかぶさっていた木々の枝がなくなり、夜の空が頭上に現れた。それまで落ち着いて見る機会が無かったが、今、こうして眺めると本当に素晴らしい景色だった。

文字通り、降り注ぐような星空。

満天の空に、散りばめられた星の一粒一粒が、バラバラに並び、不規則な光を放つ。それが本来真っ暗であるはずの夜の空を、青白く彩っていた。

「そうだな、山に来てここまでは見れないだろうな」

立ち止まって紅の横に並んだシリウスも、星空を見上げている。

元の世界でも、星空を見る機会があった。小学生の宿泊研修では、展望台でクラスの皆と空を眺めた。中学の林間学校でも、夜テントを抜け出して友達と見に行った。それでも、ここまでの気持ちにはならなかった。

不思議な気持ちだった。

悲しいのか、感動しているのか、安心しているのか、うれしいのか、それともやっぱり悲しいのかわからない。一つじゃない幾つもの感情が、胸の中で渦巻いて、あふれて、消えてゆく。

「あそこはなんだろう？ 星座かなあ」

ふとした疑問を口にしてみると、シリウスが肩をすくめて、「あー、星座って何だっけ……」と顔を曲げた。どうやらこっちの世界ではあまり普及していないらしい。物知りなシリウスが困るのも珍しかった。

「そっちが星座ですよ」

横から指を挿して、マナが教えてくれた。

マナが指差す先には、確かに、星がまとまっている。だが、星にあまり詳しくない紅は、それが何座か、見当もつかない。

「占いではよく星の位置関係や、動きを利用するものがありますからね。たとえば、ほら、あそこに見えるのがヨルムンガルド座で、季節が違えば向こう側にニーズヘッグ座が見えるはずですよ」

「ふ、ふーん。そうなんだ……」

戸惑う紅に、「ああ、そうだそうだ」と納得するシリウス。

「星を眺めると、不思議な気持ちになるよな」

紅の後ろから、ダルクが歩み寄ってきて言った。それに、紅は一瞬心を読まれたのかとびっくりした。

「そうですよね、私もです!」

「そうか、……いや、お節介は俺の性分じゃないな」

そういうと、紅の脇をすり抜けて、先に行ってしまった。

紅は改めて、星空を見上げた。

星空、元の世界でも見た星空。

今は違う世界で見上げる星空。

——本当に、帰ることができるのだろうか。王都に行けば何かわかるかもしれないとシリウスは言うが、帰れるという保障は無い。今頃、元の世界はどうなっているのだろうか。紅がいなくなったら、皆心配していないだろうか。お母さんはもしかしたら、紅が事件に巻き込まれたのかと思って、今も探し回っているかもしれない。あの日、待ち合わせをしていた香織は、どう思っているだろう。学校は、紅がいなくても普通に授業しているだろうか。そしたら、勉強についていけないかもしれない。そういえば、友達から借りたCDがあったな。返せないや。

「……っ、」

星空を見上げる。まだ、見上げていたい。見上げていないと……今頃になって、不安が押し掛かってきた。異世界に迷い込んでしまったことを実感する。もしも、あの日、あの場所にいなければ、こんなことにはならなかったのかもしれない。

—————帰りたい。

流れ星が、流れた気がした。

「どうかしましたか？ 怖い顔になっていますよ？」

不安そうに、マナが顔を覗き込んできた。

「もしかして、先ほどの戦闘で怪我を……？」

マナの瞳があせてクルクル動く。どうやら回復の呪文用のタロットカードを探しているようだ。

「ううん、大丈夫。大丈夫だから」

心配しないで。

そういつて、また、星空を見上げようとした。

「そんなに上を見てると危ない」

イスが、珍しく口を開いた。決してこちらを見ないで、なんてこと無いかのように言った。背中に担いだ槍が、大きく見えた。

「ちゃんと前を見て歩くんだ」

そういい残すと、ダルクのいる少し先まで歩いていってしまった。彼のことはよく知らないが、それでも紅の味方でいてくれるような気がした。

「本当は大丈夫じゃないんだろ？」

シリウスが、言った。

すべて見透かしたような顔で。

「そんなこと無いよ？ 怪我だってしてないし……」

慌てて取り繕うように言う紅に、シリウスは少し怒ったように詰

め寄った。

「嘘は言うな。顔にかいてあるぞ。だから、つらい時は頼ればいいんだ。大体、違う世界に来たなんて、普通ならすぐに頭がおかしくなりそうになるだろ。お前は十分頑張ってるんだよ。だから、少しくらい疲れて、つらくて、もうダメになりそうだったら、溜め込まないで、頼れば良いんだよ。頼るだけじゃなくて押し付けてくれたって構わない。俺だけじゃ不安なら、俺以外にも受け止めてくれそうな奴は結構居るぜ。だから、そんな顔しないでくれよ」
そういつて、頬をつたう涙をぬぐってくれた。

「……うん、ありがとう、……」

今度は、涙がとめどなく流れた。

そして、星空に浮かぶ、一つだけ、他の星よりも煌きの強い星を眺めた。

「シリウス」

「ん？」

「なんでもない」

笑って言う紅に、シリウスは苦笑しながらも、「さあ、行こうぜ。奴らが待ってる」と紅の手を引いた。

もしも、あの日、あの場所にいなければ、シリウスや、他の皆とも会えることが無かったのかもしれない。

星空を見上げると、不思議な気持ちになる。不思議と心強かった。

第二十七話 不思議な気持ち、煌く星空（後書き）

この話はラルクアンシエルのTwinkle, Twinkle
でも聞きながら読んでくれると……いえ、なんでもないです。

第二十八話 始る闘争

夜通し山道を歩き、日の出の光をあびながら、ようやく山道を下り終えた。

それまで、道の周りを覆うように茂っていた木々が無くなり、一気に視界が開けた。見渡す限りに広がる大地と、果てが見えない地平線。目を細めてみると、少し先に町が見える。

「ここが大陸中央に広がる、中央平原。そのまんまだな」

東西南北に飛び出した半島があるこの大陸の、中心部に広がる平らかな平原、それが中央平原だ。平原部の中には樹木が茂っている部分もあったり、大きな湖なども見ることが出来る。

「とりあえず、ヘミシアの町はもうすぐそこだ、早く行こうぜ、もう眠い」

ダルクがあくびを噛み殺して歩みだした。

時はまだ夜が明ける前、港に停泊していた船舶の中では、皆一様に白を基調とした服を纏った人々が慌てたように走り回っていた。

一人の護送の犯罪者が逃走した。

既に見張りは無残な姿になり、人々は奴を探し回っていた。

「アルタイル氏、船の中にはもういません、搜索網を陸の方へ広げましょうッ」

船室の一番奥、先ほども、犯罪者が捕らえられていた一室には、真っ白なローブを纏った背の高い男が、重苦しく悩んだ顔で、イス

に腰かけていた。

「うむ……。だが、大勢での行動は避ける。騒ぎにはしたくない。最低3、4人で行動しろ。発見次第、捕縛術式、もしくは奴の行動力を削ぐように攻撃しろ。安心しろ、奴はまだ当時の実力の百分の一にも満たない」

一通り指示を出すと、部屋に訪れていた部下は退出し、おそらく船の中を探し回っていた者達にも指示を伝えているだろう。

部屋にはアルタイル一人になると、彼は大きな溜息をついた。

「おやおや、ずいぶんと楽しそうだねえ」

皮肉に満ちた、声変わり前の少年のような、幼い声が部屋に響いた。だが、依然として、部屋にはアルタイルしかない。

「カースか、相変わらず悪趣味な奴だ。この状況を楽しそうだと？」
アルタイルが部屋の角、何も無い一帯を睨んだ。すると、まるでフォーカスが修正されていくかのように、少しずつ、ぼんやりと輪郭が現れた。

大きな黒い仮面が、顔を覆った、中背の人物。アルタイルとは打って変わって黒い衣装を纏っていた。

「あらあら、さすがの騎士団長様も今回はお手上げかい？　まあね、かつて世界を震撼させた古都ノーティスの悪魔が再び野に放たれたと聞けば、世界中の人々は君をどう思うかなあ？」

「黙れ。本来、第九番の貴様が私に気安く口をきくな」

吐き捨てるように言々と、イスから腰をあげた。

「うんうん、さすが大司教様のお気に入りはちがうねえ、コネで手に入れた第十三番はそんなにお気に入るか？」

「黙れといっているのが聞こえなかったか？」

勢い良く剣を振りぬいた。黒い仮面の下、喉元に切先が向けられる。だが、そんなことを、まるで気にしないように幼い声は続く。

「落ち着けよ。そして考えろよ。今僕を殺したら、本当に立場が揺らぐぞ、大司教様もそこまでされたら君を庇えなくなるよ。でもま

あ、史上最年少で騎士団長まで上り詰め、悪魔討滅術式の開発も手がける君はこの程度のことじゃ立場は揺らがないだろうね」

「……………」

アルタイルは無言で剣を虚空へ仕舞い込み、黒い仮面に背を向けた。

「地獄は必ず見つけ出し、捕らえてやる。余計な心配はするな」

「はいはい、せいぜい見守らせてもらおうよ」

そういうと、黒い仮面は再びぼやけ、夜の闇に溶けていった。

裸足のまま、夜の森林を駆け回る。後ろには、真っ白い騎士が三人いる。

（ちっ、意外と足が早いな……逃走も想定内ってか）

物理的な足の速さではなく、追手が自分を発見する早さに驚きながら、木を掻き分けて走る。時々、神経が張るような痛みが走るのは、二十年のブランクがあるからだろう。本来の千分の一も力が出ない。

「フライヤは右、ロンドネスは正面を頼む、」

白い騎士達の会話が聞こえる。本人達は、聞こえないように言っているつもりだが、彼は並みの人間と感覚神経も桁違いに優れている。まる聞こえだった。

「ラインハルト氏はどうなさいますか？」

「私は上から攻める、」

三人の騎士のうちの一人、おそらく上司と思われる男がスツット消えた。おそらく音も無く空に飛んだのだろう。上は木の枝が覆っているので、地面からは見えない。

(……来るッ！)

二人になった騎士のひとりが、右から飛び出した。並の人間の速度ではない。手に握る大きな剣を真っ直ぐに振りぬく。

「脆いんだよ」

剣は彼の素手に受け止められた。いや、正確には、剣先を握りつぶされていた。生身の腕で、鋼鉄よりも堅い大きな剣をいとも容易く粉碎した。

「なにッ!？」

常識を超越した存在を目の前にして、身体が硬直してしまった。更に、脱獄者の追撃が迫る。

一瞬のうちに、懷に迫るほど近づき、拳が白い服の男の腹部に突き刺さる。ベキリ、という鈍い音とともに、じんわりと痛みが広がる。だが、これで終わらず、前方に仰け反った男の首を、背中側、つまり、本来とは逆の方向に曲がるように、手のひらが額に打ち付けられる。視界がぐるりと回り、意識はそこで途切れた。

「フライヤアア!！」

同僚が無様に殺される様を見せ付けられて、正面から迫る白い鎧の男、ロンドネスが憤り、手に持つハンマーを強く握り締める。

その時、脱獄者と目が合った。

その瞳の中で、炎が燃え滾っているような、そんな恐怖が、ロンドネスの胸の中に広がった。だが、ハンマーを握る手は緩めない。むしろ、より一層力をこめて、上段から振り下ろした。

岩石をも粉々に砕くその一撃を、奴はかわそうともせず、正面から喰らった。頭蓋に直撃したハンマーの、その衝撃波だけでも周囲の木々が嵐が過ぎたようにゆれた。

「……なんだ、それは……」

ロンドネスは、その光景を直視できなかった。

奴は傷一つ負わず、頭上にあるハンマーはひび割れていた。

「ったく、こんな程度のおもちゃで遊んでる暇ねえんだ」

奴の右腕の先、広げた手のひら辺りに、黒い魔力の塊が渦巻いていた。無理やり引きずり出しているようなそれを、奴は握りつぶす。バチバチと耳に突き刺さる音が響く。ロンドネスは一步も動けない。「格の違いってのを見せてやろうか？」

右手の中で渦巻いていた黒い魔力の塊が、一つの姿を形作った。長い剣。それは、いわゆるカタナにも似た、刀身が異常に長い剣。一閃された。

また一つ、首が飛んだ。

「そろそろかかって来いよ」

ゲヘナは天を仰いで叫んだ。すると、木々のゆれが、ふと止まった気がした。

天を遮る木々の枝が割れた。上空から極太の閃光が降り注いだ。それが地面をえぐる前に、ゲヘナは地を蹴り、はるか上空へ跳躍していた。

「見つけたぜえ……」

ゲヘナは、上空に浮かぶ一人の騎士と対峙した。全身を真っ白い鎧で包み、背中からは巨大な光り輝く羽が生えている。その腕には、先端の細い、円錐形の槍のようなものが握られていた。長さは二メートルを超えるのではないかというほどの破格なものだ。

「下賤な悪魔め。私の同僚を二人も……」

重苦しく、鎧の中から声が響く。

「ハッ、あんな雑魚兵を戦場に借り出すからだろ。死んだのは俺が殺したからじゃない。あいつらが弱いからだ」

言葉を吐き捨て、ゲヘナは空を蹴り、鎧の男、ラインハルトへと猛進する。右手に握る黒い魔力で出来たカタナを大きく横薙ぎに振る。だが、ラインハルトの翼が大きく羽ばたき、さらに上空へ逃げる。

「逃がさねえぞ」

ゲヘナの右手のカタナは収縮し、再び黒い塊に戻る。それを上空

へ逃げるラインハルトへ振りかぶる。大砲のように打ち出された魔力の塊は、空中で数倍異常に膨れ、辺りに火花を散らす。

「術式展開、天使魔導装填、“天罰術式”」

ラインハルトは巨大な槍に魔力をこめる。槍を囲うように、空中に円形の魔法陣が発生した。青白く光を放ち、槍の先端に、白い光の魔法が装填される。

「射出！」

白い魔力と、黒い魔力が空で激突した。お互いの力が混ざり合い、押し合い、鬨ぎ合い、周囲に魔力があふれ出す。衝撃波が二人を煽るが、二者とも動じない。

「う、打ち消した？」

ここで初めて驚いた声を出したのはゲヘナだった。

大規模の黒い魔力塊が相殺された。二十年前前までは無双の威力を誇り、誰にも止めることが出来ず、町ひとつでも吹き飛ばすことが出来た力が。

「覚悟しろ！」

驚愕に動くことが出来なかったゲヘナに、ラインハルトは追撃を迫る。破格のサイズを持つ槍を上段から振り下ろす。

しかし、ゲヘナは正面からの攻撃を、無意識のうちに、腕を掲げて、まぶしい日の光を遮るような体勢で受け止めた。

その時、彼の腕、ちょうど槍を受け止めた部分から、ジュツという焦げるような音がした。

「痛ッ、！？ 何だ？」

慌てて振り払い、距離を取って腕を確かめる。

腕は火傷にも近い、ただれた状態になっていた。そして、遅れて来る痛覚。それも、二十年前から忘れていた感覚だった。

「……やはり、天罰術式を用いれば、貴様の肌を傷つけることも可能か」

しめたように、嘲笑うラインハルト。

ゲヘナは忘れていた感覚に戸惑い、恐怖を覚えていた。いや、思

い出していた。

「く、クソがッ！」

ゲヘナは再び、黒い魔力の塊を発生させる。今度は両手に握り締め、二刀の巨大な剣を握る。大きく振り回すように連続斬りを放つ。だが、ラインハルトは空中を自由に羽ばたき、掠めることすら出来ない。再び天罰術式とやらが装填され始める。

（くっ、またアレを放つつもりか？）

徐々に焦り始めたゲヘナを尻目に、空を逃げ回るラインハルトは、槍の先端に白い魔力を装填させる。

ラインハルトが大きく上空へ舞い上がった。

ゲヘナが追いかけようと、空を蹴る直前に、ラインハルトが白い魔力を放った。

今度は、空中で拡散した。一粒一粒は、雨粒ほどの小ささだが、この術はゲヘナには効果が大きいらしく、一粒でも当たれば、肌が焼け焦げる。

だが、この白い魔力はゲヘナの持つ黒い魔力で相殺できる。両手に持つ剣を球状に収縮させ、盾のように掲げて、白い魔力の五月雨の中へ飛び込んだ。

時折、相殺し切れなかった。魔力の粒が肌を焼く。それでも、上空でこの魔力の雨を降らすラインハルト目掛けて猛進する。

「畜生ッ、この糞野郎がアアア！」

怒号とともに、ゲヘナが魔力の雨を突き抜ける。ラインハルトも魔力の放射を強め、ゲヘナの接近を阻止する。

（ちっ、魔力が……）

魔力の雨を相殺する黒い魔力の盾が薄くなってきた。だが、ラインハルトまであと少し。

「これで最後だ」

ラインハルトが魔力の雨を一点に集中させた、突如、ゲヘナの盾に穴が開き、顔面から這うように白い閃光が肌を焦がす。それでもゲヘナは止まらない。

正面から魔力を受けても、強引に突破し、ラインハルトの槍の先を殴る。槍が空を飛び、閃光の向きが反れ、ゲヘナはようやく解放された。

「だが、これで仕舞いだ」

ラインハルトが腰にささっていた剣を振りぬき、瀕死のゲヘナの額に剣先を向ける。

「お前に地獄を見せてやる」

ゲヘナの目が、狂喜に笑った。その表情に、思わず身構えるラインハルト。

その刹那、ゲヘナの左手がすっとラインハルトの腹部に当てられた。ラインハルトが反応を起こす直前、彼の腹部が暴発した。

黒い魔力が溢れ、ラインハルトを飲み込む。

「馬鹿なっ、魔力を使い切ったのではッ!？」

ミシミシと鎧がひしゃげ、視界がぶれる。

「ああ、使い切ったぜ。右手の分だけはな」
音が消えた。

黒い魔力の塊は、人間一人を飲み込んで、爆発した。

「……ツクソ、こんな雑魚相手に、へばるなんてな……」

顔面から腹部にかけて、肌が焼け焦げたゲヘナは、空中で力を失い、そのまま深き森へと自由落下していった。

第二十八話 始る闘争（後書き）

長え

第二十九話 一時の休息

意識が再び戻ると、木の茂みの中で横たわっていた。落下の衝撃よりも、ラインハルトに喰らった顔から腹部にかけての火傷のような傷が痛む。

「ッ、聖痕……って訳でもないようだな」

傷の様子を確かめる。皮膚がただれ、流血している部分もあるが、本来この程度ならば、彼の自然治癒能力が癒してくれるはずだ。だが、傷はむしろ広がっている、より悪化している。早く対処した方がよさそうだ。

「グッ、アアッ、」

足に力を入れて立ち上がろうとするが、上手く力が入らない。何度かよろけて転倒しながら、木に寄りかかる形で立ち上がった。

しばらく、森の中を木に寄りかかりながら歩いた。どちらに向かえば良いのかも分からない。だが、立ち止まっていれば、確実に、追手に見つかり、再びつかまってしまう。

足元で、ガチッっと何かを踏む音がした。見下ろすと、見覚えのある白い鎧があった。だが、もはや無残にズタズタに壊れている。

「へっ、無様だな……」

鎧の中にはその持ち主もいたが、とても人間と呼べる状態ではなかった。

その鎧に、大きな文字で『?』の文字が刻まれているのが、目に入った。

「……ふん、」

鎧から目をそらし、再び歩き始めようとしたが、鎧の破片につまずき、転んでしまった。手も満足に動かせないこの状況で、顔から茂みに突っ込んでしまった。

「うわっ、びっくりした……あなた、大丈夫？」

茂みの奥には、森道が通っているようで、女が一人歩いていた。女は三角帽にローブを纏っていた。背中には大きな、棺のような箱を背負っている。

「触れるなッ、無視しろ」

手を差し伸べようとした女の手を振り払い、立ち上がろうとするが、失敗してまた転んだ。

「傷だらけじゃん、ほら、手を貸しなさい」

彼の顔面の怪我を見て、臆するのではなく、むしろ助けようとしてくれた。それが彼にとっては鬱陶しかった。だから、もうこの女に自分と関わらないように言い放った。

「関わらない方が良く、俺は悪人なんだ」

その一言で、しばし女の顔が固まった。

だが、不釣合いなほどの笑顔で答えた。

「私はね、悪人を見ると放っておけない性質なんだよ」

そういうと、ゲヘナを手をとって立ち上がらせた。

「紅さーん。あーさでーすよー」

マナは扉を開けて部屋を覗き込んだ。質素なつくりの宿屋の一室の中の、ベットには誰も寝ていなかった。

「あれっ？ 紅さん？」

部屋の中に這入り、改めて見回すと、ベットの下に人影が見えた。「紅さんですか？」

マナが身を乗り出して覗き込んでみると、床には糞虫みたいに毛布に包まった紅が、スースー寝息を立てていた。

「よう、ようやくお目覚めか、社長さん」

「んー、おはよう」

紅は眠い頭をカシカシと搔いて隣の部屋のシリウスを訪ねた。そこには既に、紅を除くみんなが揃っていた。

結局、昨夜は明け方ごろに、ヘミシアの町に着き、そのまま宿を取って寝たというわけだ。朝とは言ってももう昼に近い。

ヘミシアの町は、旅の人が立ち寄る小さな町で、宿や雑貨屋は多いが、それ以外には特筆することも無い、田舎町だった。紅は宿の古臭いイスに腰掛け、シリウスはテーブルの上に地図を広げた。

「じゃあ、今後の方針を決めるぞ」

シリウスは小さなチェスの駒みたいな置物を地図の上に置いた。そこが現在地である。

「このまま中央平原を北上、中央市街を通り抜けて、しばらくすればもう王都だ」

シリウスは一口に王都といったが、実際のところ中央平原は大きい。地図の大半を占める平原は、とても二、三日で移動できそうも無い。

「まあ、それでだ。俺達は中央市街まで行こうと思う」

ダルクが脇から、別の駒を地図の上に置いた。

ちょうど中央市街、地図の真ん中である。

「え、王都まで一緒に行かないんですか？」

マナが驚いたように声をあげた。マナとダルクはほぼ初対面のはずだが、気を使っている様子はあまり見られない。

「ああ、俺達はもとも中央市街に用があったんでね。だから旅路を共にするのもそこまでだ」

ダルクは残念そうに言い、イスは話しに加わらず、窓から外を眺めていた。

「俺はせいせいするけどな」

シリウスが犬歯をむき出しにしていた。

「ははっ、お前のハーレムに俺が参加するのがそんなに不服か？」

「バーカ、色ボケ野郎が減るからだよ」

マナは、二人のケンカをとめるべきか、オロオロしていたが、紅はそんな二人を見て笑ってしまった。

「あ、そういえば、ダルクさんの使ってる武器って銃ですよ？」

紅はふと疑問を口に出した。紅の世界にも銃はあったが、それは形状が結構違うようだ。

「うん？ こいつの何か。確かに、こいつは魔導銃だな。このカートリッジのところに魔石が入ってて魔力を供給するんだ」

ダルクが、腰のホルダーから銃を取り出して、テーブルの上に置いた。それを見たシリウスが驚いたような顔をした。

「馬鹿な、魔導銃なんて、代物は存在しない。魔力を供給させたら、反動が大きくなりすぎて銃身が壊れるはずだ！」

シリウスが大声を張り上げたが、ダルクは得意げに指先を振って、たしなめるように言った。

「それは世間の一般常識。これは俺が完全自作したんだ。結構特殊な作り方をして、撃ち方にも工夫があるんだぜ？」

製造法は企業秘密だけだな。と付け加えて、自慢するように銃を振る。銃身は太くて長く、確かに頑丈そうだ。シリウスは今だ釈然としない顔だったが、ダルクはお構い無しに続けた。

「俺はガンスミスっていうか、武器全般なら開発できるんだぜ、なんなら剣先から水を出せる剣でも作ってやろうか？」

「魚を開く時便利そうだな。そんなの誰が欲しがるんだよ」

「でも、お前、剣無いだろ」

シリウスはちょっと悲しそうにうなだれた。

「何を見てるんですか？」

紅は、テーブルにシリウスを残して、窓際にいるイースに話しかけた。イースは大体紅と同じくらいの年齢で、背も高くない。褐色の肌に、アッシュブロンドの髪、そして、よく見れば、瞳に薄くグ

リーンがかっている。

彼は窓から紅に視線を移し、不思議そうな顔をした。

「別に。雲を見てただけ」

平坦に、感情をなるべくこめないような声だった。

「雲？ 何か変わったことでもあった？」

「変わったことが無ければ雲を見ちゃいけない？」

「そうでもないけど……」と紅はちょっと困ってしまった。シリウスやダルクは結構おしゃべりだから色々教えてくれるが、彼は基本的に戦闘時以外は無口のようだ。これでよくダルクと二人旅をしていたものだ。

「魔術」

「ん？」

「君はどうして魔術をそんなに使える？ 下等呪文だけど無詠唱だし威力も高い」

イースはじつと紅の瞳を見つめ、独り言のように聞いてきた。

正直、答は当の本人である紅にもわからない。

「ええと、あんまりわからないの、生まれつき……なのかな？」

適当にお茶を濁すようなことを言ってみたが、イースは「遺伝……もしくは家庭環境で日常的に魔術を……？」と熟考し始めてしまった。適当に言ったというのもなんだか恥ずかしかったので会話を切り替えることにした。

「中央市街には何をしにいくの？」

「……、君達が何しに王都まで行くのかも気になるけど、僕たちはちょっと調べごとだよ、」

そういつて、ふいつとまた視線を窓の外へ移した。もう雲は流れていた。

「おい、二人とも。外に買いものに行くぞ」

シリウスに呼ばれて、紅たちは部屋を後にした。

第三十話 王都に迫る影

「……。ここはどこだ？」

ゲヘナが身を起こし、辺りを見回すと、どうやらどこかの宿のようらしい。今、彼はベッドの上に横たわっていたようだ。身を起こしたことにより、掛け布団がめくれた。

（……、俺は、寝てたのか……？）

寝る。気絶ではなく、寝る。

それは、遠い昔の習慣だった。この二十年、彼は一睡もしていなかったのだ。しかし、それが彼にとっては取るに足らない些細なものでもある。

ベッドから立ち上がり、部屋を物色する。ありふれた宿の一室のようだが、部屋の片隅に大きな棺のような荷物がある。

「あの女の持ち物か……」

棺に触ろうとした。

「あっ、目が覚めた？」

扉が開き、素知らぬ顔で女が部屋に入ってきた。ゲヘナは荷物に伸ばした手をさっと戻し、部屋に入ってきた女に向き合った。

「おまえは何者だ？ どうして俺を助けた？」

女はイスに腰掛け、無言でゲヘナにも座るように促した。渋々ゲヘナも従い、女が話し始めるのを待った。

「私の名前はアイリーン。アイリーン・フォンレーゼよ。おまえじゃないわ」

「戯言はいらない。どうして俺を助けたのかを聞いてるんだ」
詰め寄ると、アイリーンは鬱陶しそうに首を振って話し始めた。

「二十年前の大戦時、古都ノーティス側が劣勢になった時、前線に一人の戦士が現れた。後に悪魔だの地獄だの呼ばれた彼は、たった一人で王都側の戦士を薙ぎ払い、一夜にして戦局を一転させた。王都滅亡も時間の問題とまで言われたが、王都側から真っ白い騎士団

が派遣され、対悪魔用術式によって彼は力を封じられ、拘束された。当時、処刑されなかった、することが出来なかったが、彼は監獄島に閉じ込められ、再び大地を踏むことは無いと伝えられた……。そして、貴方がその、」

「悪魔だ。間違いない」

ゲヘナは自ら言葉をつなぎ、肯定した。

「だが、それを知って、何故助けた？ あのままにしておけば、例の白い騎士団が俺を再び拘束してくれただろうに」

「それじゃ困るから。具体的に言えば、王都が滅ぶかもしれないからよ」

「本望だ。滅ぼしてやる」

ゲヘナは、祖国の恨みをこめて、吐き捨ててやった。だが、アイリーンは顔色一つ変えない。

「……確かに、貴方にとって見たら、私たち王都の人間は滅ぼすべき敵かもしない。でもね、もうアレから二十年たっているの。大戦後に生まれた人たちも多くいるわ。それを滅ぼすなんて、貴方は本当に悪魔になってしまおうわよ？」

「……ふん、まあいい。だが、どうして俺があのまま白い騎士団に捕まると、王都が滅びるんだ？」

どちらかといえば、滅びるのはゲヘナ自身だ。

「実はね、王都側の人間でも、今の国王が気に入らないって人たちがいるの。もっと簡単に言えば、世界征服を企んでる連中がいるのよ」

「ふーん」

ゲヘナは興味なく頷き、アイリーンは頭を抱えそうな溜息をついた。

「そいつら、ドレッドノートっていう組織なんだけど、王都転覆に貴方を利用しようと考えてるみたいだね。あのまま騎士団が輸送していたら、王都のご真ん中で貴方を暴れさせることになっていたわ」
その言葉を聴き、ゲヘナは急に怒りが湧き上がってきた。人を道

具のように考えている。

「待て、一つ聞かせろ。どうして俺は二十年ぶりにあの島から引張り出され、王都に向かったんだ？」

「そんなの簡単よ、終戦二十周年の式典の裏で、秘密裏に貴方が処刑されることになってるのよ」

ふと、顔に走る火傷のような傷が疼きだした。

二十年前は、処刑することが出来ず、誰にも彼を殺すことが出来なかった。だから仕方なく、あの島に封印されていた。しかし、時代は流れ、彼を殺す手段が生み出された。

もはや最強ではない。

悪魔でも、地獄でもない。ただの死刑囚。

「クソが……」

「それにね。今の貴方じゃ、王都に乗り込んでも返り討ちにあうだけよ」

ゲヘナの脳裏には、先ほど戦闘を行った白い騎士団が浮かぶ。ラインハルトに傷つけられ、アルタイルには、立ち向かうことすら出来なかった。

今はもう、二十年前のように行かない。

「……悪いな。俺は一人で行動する」

「待って、私が協力するから……」

「黙れ。なに企んでるか知らねえが、俺はおまえを信用しない。殺すぞ」

部屋を出て行こうとしたところを、ひきとめようとしたアイリーンを睨みながら言った。

肩にかかった手を振りほどき、彼は部屋を飛び出した。

外に出ると、辺りは暗かった。気を失ってから、どれくらい時間が経ったかわからないが、今はそんなこと関係なかった。

後ろからアイリーンが追手これないように、素早く道を反れ、人気の無い場所に入る。

知らない町だ。そもそも、ゲヘナはこの辺りの地理なんて知っているはずが無い。あまり大きくない町のような。ここからどこまで歩けば、王都に辿り着くのかもわからない。

「よろしいですか？ その御方」

背後から声が聞こえた。ゲヘナが振り返ると、壮年の黒いローブを纏った老人が立っている。腰は曲がっていないが、顔に刻まれた皺が時代を物語っている。

「失せろ。構ってる暇はない」

「ほう、ですが、騎士団がもうすぐそこまで迫ってきてますが？」
老人は特に感情をこめず、平坦に言った。

「……ちっ、どいつもこいつも……」

「申し遅れました、私の名はワトー。ドレッドノートの一員でございます」

ドレッドノート。それはあの女、アイリーンが言っていた、王都を転覆させ、世界征服を企むろくでもない組織。そして、彼らはゲヘナを利用しようとしている。

ゲヘナは身構え、臨戦状態になる。

「構える必要はございません。私たちは貴方と共同戦線を張りたい、と考えております」

「共同戦線？」

「左様でございます。失礼ですが、貴方の経歴は私達の方でも掴んでおります。つまり、王都に対する復讐を、お考えではありませんか？」

「……」

しばし、考え込む。

自分は古都ノーティスの人間で、戦争をきっかけに無敵の力を得た。その力で王都軍と戦ったが、勝負に敗北し、祖国を守ることが出来ず、今はこのザマ。自分に出来ることといえば……滅ぼされた祖国の敵を討つこと。

「それで？」

「私達も王都の政治には疑問を持つのでございます。国民には正しい正義を与えられるべきだと考えております」

「……つまり、一緒に王都を滅ぼそうって話なんだろう？」

「はい」

老人ワトーは、力強く頷いた。

「……ふっ、面白い。いいだろう。俺も王都転覆に参加してやる」
ゲヘナはにやりと笑って答えた。

「よし、じゃあ出発するか」

シリウスと紅を先頭に、一行はヘミシアの町を出発した。

町で必要の品々を買い込み、中央平原を歩いて縦断することになった。結局、シリウスの剣はないままだが、中央市街に着けば、武器屋もあるらしい。

平原は雲一つ無い快晴で、風が吹き、心地よい気候だった。草原の中にのびる一本の道を並んで歩きながら、紅は横にいるシリウスに尋ねた。

「ねえ、どれぐらいで中央市街に着くの？」

「そうだな……数日はかかる」

「そんなに!？」

地図上で見れば、中央平原と一口で言ってしまうが、実際の距離は大陸の大半を占めるため、かなり大きい。その上、移動手段は徒歩となるため、更に時間はかかる。

「馬とかがあれば楽だが、そんな金も無い。少しでも早く王都に着くには地道に歩くしかない」

シリウスの言葉に、少し先行きが重く感じる紅だった。

「まあでも、途中に小さな町や集落もあるし、中央市街を抜ければ王都ももうすぐだ」

シリウスは励ますが、紅はやっぱり不安を拭い去ることが出来ない。それでも歩くと決めたのだが。

中央平原を歩き始めて数時間が過ぎると、日も傾いてくる。日没になり、あたりが暗くなれば、テントを張ってキャンプをするしかない。さすがに、平原にナイトウォーカーが沸くことは無いが、豊富な野生生物が活発になる時間帯に歩くのはよくない。

そのまま、移動を続けるだけの日々が過ぎていた。

「うー。もう平原は飽きたかも……」

「そうですねー。初めのうちは心地よかったですけど……」

紅とマナはお互いにへばり付くような感じでだらけている。女の子二人には、平原越えは厳しいようだ。

「おい、お二人さん。どうやらオアシスが見えてきたみたいだぜ？」
ダルクが、どこから取り出した小型の望遠鏡で地平線の先を眺めながら言った。紅は渡された望遠鏡を覗き込んで、思わず声をあげて喜んだ。

「街だ！　ねえ、あれが中央市街なの？」

「わっ、私にも見せてくださいっ！」

マナが望遠鏡を欲しそうに、紅に飛びつく。

紅の目には、平原のご真ん中に広がる、規律正しい並びで建っている家々や、道路。更には背の高い建物までが見える。大自然の平原の中に、突如人工で出来た巨大都市が見えてきた。

「ほら、もうすぐなんだ。早く行こうぜ」

シリウスに促され、再び一行は歩き始めた。

第三十話 王都に迫る影（後書き）

執筆に間が空いてしまうと、ついつい何を書いたのか、どんな伏線を張っていたかというのを忘れてしまいがちです。以前に書いた部分を読み直せばいいのですが、当時書いていたときに思っていた構想と、今書こうとしていることが若干違っていたりします。困りものです。

第三十一話 恐れ知らずの組織

中央市街の正門前に来ていた。中央市街は、中央平原の中心部に広がる、大陸上最大の人口都市であり、最も広い面積をもつ。東西南北に、大きな門を持ち、中に入るには門をくぐる必要がある。

「ちよっと君達、住人票を見せてくれ」

シリウスが門を通過しようとしたとき、脇にある詰め所にいた中年の目つきの悪い門番に引き止められた。

「住民票？ そんなのがいるのか？」

「当たり前だ」

途端に、門番の顔は険しいものとなる。胡散臭そうに、じろじろと紅達を睨みまわした。

中央市街が最大の人口都市になることができたのは、徹底的な防犯体勢を整えているからだ。街に入れる者は、住民票を持つもの、もしくは、一部の住民の紹介状が無ければ、入ることが出来ない。（どうしよう、中に入れないみたいですけど……）

マナが心配そうに、紅に囁いた。正直、ここで街に入れず、中央市街を迂回して平原を歩くのは勘弁して欲しいところだ。

「旅人ならば、こちらの外周道を通っていけ。東側の半島に行きたいならこっちだ」

門番は、もう完全にシリウス達の中に入れる気は無いようだ。ここまで来て、もう為す術がない。万事休すといったところだ。

「いいや、住民票ならここにあるぜ」

ダルクが前に踊りだし、高々と薄い紙を掲げた。それを門番がひったくり、訝しげな目で眺めた。色々な角度から、まるで偽造を見破ろうとしているような感じだった。

「……確かに。ダルク・ハット氏の入街を認める。だが、他の者は住民票を持っていないため……」

「ところがどっこい、紹介状があるんでね」

ダルクはもう一枚、紙を取り出した。今度は羊皮紙のような高級感ある紙だ。さらに門番は顔をしかめる。もう怒っているようにも見える。

「……!?!? ど、どうぞ」

ところが、羊皮紙を見た途端、門番の顔が一変した。

「はいどうも」

軽い調子でダルクは答え、「さ、みんな行こうぜ」と一行を促した。

門をくぐると、中央市街の中心を十字に走る大通りに出た。道路はすべてタイルなどで舗装され、建物の大きさや色なども統一感がある。それでいて、閉鎖的なイメージは無く、道の端には露店や公園、噴水などの娯楽要素も散りばめられていた。

「すごい! 今までの街とは全然ちがうね!」

紅の感覚では、この中央市街が一番元の世界と似ている。道行く人々の格好も、ローアン・バザーのような鎧や武具をまとっている人はほとんどいなく、スーツ等のフォーマルな格好がほとんどだ。

「まあな。中央市街は大陸で一番治安がいいといわれてるし、そもそも戦う必要が無いからな」

ここでは、シリウス達の格好が浮いているほどだ。

「それよりも、どうして住民票なんて持ってたんだ?」

シリウスが疑いの目でダルクを見た。

「なあに。これぐらい事前に用意しとくさ。偽造住民票な」

何故偽造住民票を持っているのか、シリウスは尋ねたそうにしたが、どうやら気がそれたらしい。結局詳しく言及せずに、一行は大通りを歩いた。

大通りをしばらく歩けば、中央市街のさらに中心部。十字型の大通りが交差する所に来た。ここは、大きな広場になっていて、人通りも多く、それにあわせて店も多い。広場のど真ん中には、巨大な

時計塔のモニュメントが建っていた。

「それじゃあ、ここでお別れだな」

不意に、ダルクが呟いた。

「えっ!? もうお別れなんですか?」

紅としては、仲間が多い方が旅をしていても楽しかったが、ダルクも探し物があるという話を思い出した。

「まあな。俺もちょっと捜さなきゃいけないものがある。紅ちゃん達と旅が出来て楽しかったぜ」

「また会えると思うから」

イースも言葉少なくお別れを言った。相変わらずの無表情だった。
が。

「また……会えますよね」

「ああ、必ず」

紅はもともとこの世界の人間ではない。いつかは元の世界に帰りたい、だが、元の世界に帰ってしまえば、もう色々な人と会えなくなってしまう。この不思議な旅が終るころには―――。

「ふん、チャラ男がいなくなってこっちも気が楽だよ」

シリウスが最後まで憎まれ口を叩いたが、ダルクは笑った。

「じゃあな」

ダルクは軽く手を振り、イースは軽く頭を下げ、やがて大通りの人ごみの中に紛れてしまった。

「行ってしまいましたね」

マナも残念そうに人ごみを眺めていたが、やがて「もう行こうぜ」というシリウスの一声で三人は移動した。幾度と無く、ダルクとイースには助けられた気がする。この中央市街まで来れたのも、彼らのおかげだ。シリウスもどこと無く寂しそうだった。

ホテルのチェックインを終え、時間も昼を過ぎ、日が傾き始めた。本当なら、もっと中央市街を見物したかったが、シリウスは一刻も早く王都へ向かいたいので、翌朝には出発することになった。その

ために今日のうちに買い物を済ましておきたい。

「紅とマナは必需品を買ってきてくれ。俺は剣を捜してくる」

そういつて、三人は二手に分かれた。紅とマナは食料などを買いに、ホテルのフロントで聞いた、街で一番大きな市場にむかった。

「確かこっちの方だよね」

フロントの気のいいおばさんに作ってもらった地図を頼りに二人は街中を歩いていった。中央市街は道が碁盤の目のように綺麗に並んでいるが、建物に統一感があり、逆に特徴が無いので、道に迷ってしまいやすい。

土地勘の無い二人は右往左往しながらも、ようやく市場に辿り着いた。

「ここかぁ……本当におっきいですね」

「そうだね」

まるでデパートみたいだ、と紅は心の中で思った。

それぐらいに建物は縦にも大きかった。五階建てぐらいの大きさで、この世界の中で見た中では一番大きい。人々が飲み込まれるように中に入っていくのも、デパートのそれと似ている。

「お買い物楽しみですっ！」

マナが無邪気にはしゃぎながら言った。紅はその笑顔を見て自然と笑ってしまった。

「さて……どうしたもんかな」

シリウスは正直、困っていた。というのも、武器の必需品である剣だが、この中央市街では剣を必要としない。つまり武器屋がないのだ。武器屋が無ければ剣が買えない。剣が無ければ、もうダルクもイースもないこれからの旅路で危険度がかなり変わってきてしまう。

表通りには、武器屋があるように思えない。だが、一本裏の路地

に入れば、あながちそうでもないようだ。背の高い建物が規律よく並ぶ町並み、その反面、大きな日陰が出来てしまう。裏通りは人気も少なく、どこか怪しい雰囲気漂っている。

「……まあ、さすがは中央市街の警備って所か」

確かに、怪しい雰囲気は漂っているものの、実際に何かがあるというわけでもないようだ。徹底された警備、治安維持は隅々まで及んでいるのだろう。

途方に暮れ、することも無いのでそのまま裏路地を歩き続けた。もともとシリウスは人の多いところが好きではないので、この裏路地の雰囲気は気に入った。

シリウスの後ろをついてくる足音がした。

後ろを振り向いて、確認してみるが、誰もいない。だが、警戒を強め、表通りに戻ろうとした時、後ろから声がかかった。

「こっちだ。にいちちゃん」

声の主は中年の男性だった。これといって特徴が無い。人ごみに紛れてしまえば、『その他大勢』で数えられそうなほどだ。

「なんか用ですか？」

鋭く睨みつけながら尋ねた。すると男性は少し含み笑いをして、独り言を呟いている。

「いいや。君はたしか……シリウス・グランジ、そう名乗っていたね？」

「ああ、そうだ」

シリウスの背筋に嫌な汗がにじむ。寒くないのに少し震える。

「待っていました。シリウス様。いえ……ヴァーリス王子と、呼んだほうがよろしいですか？」

シリウスは、男性がしゃべり終える前に、彼に飛び掛った。

剣を持ってない今、彼は拳を振るうしか出来ない。だが、男性は、まるでシリウスが飛び掛ってくることを予想していたかのように、拳を受け止め、捻り、力のベクトルを利用して、シリウスを地面に

たたきつけた。

地面に組み伏せられたシリウスはもがき、離れようとするが、喉元に冷たいものが突きつけられた。見るまでもない刃が眼前に迫っていた。

「大人しくしていただきたい。こちら手荒なマネはしたくないの
でね」

「クソがッ……てめえら、何者だ？」

「ドレッドノート。と、名乗っております」

男は静かに伝えた。

第三十二話 交差する者達

「それではこちらへどうぞ」

年配の老人、ワトーに導かれ、ゲヘナは町外れの駐車場に來た。ここには、旅人の馬車が止められていて、馬達が暇を持て余していた。

その間を抜け、駐車場の一番奥に止まっている、黒い箱のような馬車に乗り込んだ。

「これから我々の本部がございます、中央市街へ向かいます」

ワトーが馬車の戸を閉めると、馬丁も見えないのに、馬車は発車し始めた。あたりはまだ日が昇らない暗い空だが、ぶつかることなくスムーズに進む。

「中央市街まではどれくらいだ？」

「半日あれば着くかと」

ゲヘナはこのあたりの地理には詳しくない。中央市街がどこなのか、また自分がどの辺りにいるのかすらわからなかった。

「中央市街で我らのボスがまっております」

「ふん」

馬車は暗い夜道を疾走する。

「つたく、あの馬鹿」

その馬車に気取られないように、一定の距離をあけ、追跡する者がいた。町で適当に馬を借りたアイリーンは、先を越されたことを悔やみながら追跡を続ける。

「でも……これは少しまずいかもね」

以前からドレッドノートの動向を探っていた彼女だったが、今回ばかりは予想外の動きだ。

一刻も早く、中央市街にて対応を取らなければならない。

背中に担ぐ棺のような鞆がギシリと鳴った。

ゲヘナは目を閉じて、身を馬車に預ける。

ワトーは静かに一点を見つめ、話しかけてくる様子はない。

ゲヘナは、静かに瞑想をしながら、ふと、自分のこれからについて考えた。

彼は生まれながらにして、狂気な無双の力を持っていたわけではない。あの戦争、あの日を境に、彼は悪魔のような力を得た。

古都ノーティスの王族で、次期国王がもう既に決定していた王子。それが彼だ。少年時代にも、その事実は既に決定し、決められたレールの上をなぞる人生だった。だが、そのレールもある日を境に脱線し、奈落の底まで落ちていった。

人体魔法刻印。

人間の素肌に、直に魔法陣を掘り込むことにより、普通では引き出せない膨大な魔力を得ることが出来る。しかし、身体に魔法陣が描かれることにより、常に、魔力が垂れ流しになってしまう。それは、外部からの攻撃を守るオーラにもなるのだが、普通は、魔力の回復が追いつかず、いつかは枯渇して消滅してしまう。

だが、彼は違う。古都の王族は代々莫大な魔力を秘める血族で、中でも彼は歴代の国王を見ても類を見ないほどの魔力だった。平和な時代にはそんなことはむしろ関係ないことだったが、戦争が始り、戦況が悪化。国家の存続が危ぶまれる危機に瀕し、国家の意思と、そして彼自身の意思で、悪魔は生まれた……

「到着いたしました。どうぞ、目をお開けください」

ワトーに囁かれ、ゲヘナは目を開けた。どうやら眠りについていたらしい。寝首を搔かれることは無いが、少し無用心すぎた。柄にも無く隙を見せてしまった。

中央市街に着くころには、既に日が昇っていた。中央市街の駐車場は、タイル舗装がされていて、馬には歩きずらそうに見えたが、ワトーはお構い無しに馬を止めた。

二人は馬車を下り、市街の通りを歩く。

ワトーの服装は、それはこの町によく馴染んでいて、ゲヘナは浮いてしまった。大通りには、そんな二人を気にも留めず、人々が多く行きかっている。

「……………」

ゲヘナは、すれ違う人々を見つめる。

二十年前の大戦。それは今の時代にも、大きな爪跡を残したに違いない。だが、今、ここで暮らしている人々は、既に大戦は過去のことだったかのように、幸せそうに、あるいは、些細なことに腹を立て、忙しそうに暮らしている。

平和。それがこの町に溢れていた。

「ちっ、気に入らねえ」

「あまり派手なことはお控え願います」

ワトーが静かに言うのと、ゲヘナを導いた。

デパートのような建物の前を通り過ぎた時、女の子の大きな声で、ワトーの言葉は遮られてしまった。

（んっ、……。なんだ、この魔力は……？）

一瞬、肌がチリッつと焦げる様な感覚が通り抜けた。だが、すぐにその感覚は消えてしまった。

「着きました」

ワトーが指差したのは、中央市街のど真ん中に位置するモニュメントのような時計塔である。一応時間を知らせてくれる役目があるが、市民は大抵待ち合わせか、その程度の役割しかない。中に入ることも出来るが、基本立ち入り禁止だ。

「ここで何をするんだ？」

「中にお入りください」

ワトーは時計塔の扉を開け、中に招き入れる。時計塔の周りには、行きかう人々が沢山いるが、誰も彼らに意識を向けない。ゲヘナはワトーに従って中に入った。

時計塔の中は薄暗く、ジメジメしていた。見る限り、石造りの壁と、上に上る梯子しかない。

「こちらです」

ワトーはしゃがみ、床の石畳をいじり始めた。どこを押したのか、スイッチのようなものが作動し、床の板が跳ね上がった。その下には、闇のように暗い階段が続いている。

ワトーは懷から松明を取り出し、階段を下り始めた。

「ふん、大都市のど真ん中に、悪の組織の総本山か。粹なマネをするな」

「それはどうも。私達のボスは粹な方でね」

ゲヘナとワトーはさらに、街の奥へと歩む。

「シリウス、遅いな」

紅とマナは買い物を終え、ホテルで待機していた紅とマナだが、いくら待ってもシリウスが帰ってくる気配が無い。

「安全な町と聞いていますから、事件に巻き込まれたりとかはしていませんけど……」

マナも心配そうに、部屋の中を行ったり来たりしている。

「うーん、だとすると……この街にはシリウスを魅了するなにかがあるって言うの!？」

「ど、どうしましたか?」

「探しにいこ!」

紅は思い立ったがすぐに、ホテルを飛び出した。その後ろを遅れ

ないように走りながらマナが着いてくる。

街は既に日が傾いていた。もう数十分で日が沈んでしまいそうだ。街を行く人々も急ぎ足に帰路に着いている。その波に逆らうように、紅はシリウスを探して歩く。

「あ、そうだ、紅さん。闇雲に探すよりも良い方法がありますよ」

「えっ、どうするの？」

マナがなにか思いついたようだ。タロットカードで探査とか出来るのかと期待したが、それは案外あつけないことだった。

「警備団の人たちに聞けば良いんですよ」

警備団といえば、街の入り口の門で、紅たちを止め、住民票を要求してきた人もそうだ。

「頼りになるの？」

正直、門番からはいじわるな印象を受け、少し心配だった。

「はい、街の中に詰所があるので、迷子の人とかわかるかもしれませんが」

シリウスが迷子というと、少しおかしかったが、警備団というと、紅の世界という警察のようなものだろう。交番の代わりに詰所を捜して、街を歩いた。

幸い、街中の色々なところに、それはあった。

引き戸を開け、中に入ると、気のよさそうな中年男性が制服に身を包み、紅を一瞥した。

「何かようかい？」

「人を捜してるんです」

そういうと、まるで予想していたかのように、クリップボードを取り出して、「はいはい、ではその人の名前と特徴を……」と聞いてきた。どうやら、迷子は多いらしい。

「えっと、名前はシリウス・グランジです。特徴は……」

シリウスの思いつく限りの情報を中年男性に伝えていく。それを丁寧にメモを取る。

「はい、じゃあ何かわかったら連絡するから君達の名前と住所を教

えてくれる？」

「雛沢紅と、マナ・フォンレーゼです。住所は滞在先のホテルで良いですか？」

その後、ホテルの住所（覚えていなくて伝えるのに苦労した）を教え、「もう暗いから送っていいこうか」という警備団の人に促され、ホテルに戻った。

「シリウス、どこへ行っただろうね」

「どうでしょう……危険なことになっていなければ良いのですが」

ゲヘナはワトーの後ろで、狭苦しい地下通路を歩いていた。所々に足元を照らす明かりがあるだけで、他には何も無い。壁は無機質な灰色で、ヒビ一つ無い。歩いているだけで息が詰まりそうだった。

「こんなところに住んでるなんて、そうとうな根暗野郎なんだな」

「ボスの前では、そういうことはお控えください」

差して気にする風でもなく、ワトーは答える。

それよりも、ゲヘナが感じていたのは、この地下基地のある場所だ。地下に基地を作るのは、そこまで珍しくないが、ここは大陸一の人工都市の地下である。まして、ここの警備は厳しいのだという。確かに、意外性があるって見つかりにくいという点もあるが、それにしても危険な綱渡りだ。

「こちらになります」

ワトーは何度も角を曲がり、ゲヘナの方向感覚がおかしくなったところで、一つの扉を指差した。ゲヘナは久しぶりに壁以外のものを見た気分だった。

扉をくぐると、広い空間が広がっていた。広い。ただそれだけが特徴といえるだろう。直方体の空間に、また壁があるだけだった。そして、部屋の中には、一つのデスクが置かれている。

男はそのデスクに腰かけていた。

「ようこそ、古都ノーティスの悪魔。歓迎しよう」

男は黒いシャツにスラックス、ワイルドな顎鬚にオールバックの黒い髪。ダンディな三十路くらいの男で、自信のある含み笑いをしていた。

「おまえがドレッドノートのボスカ」

「そう、私がバルジ。よろしく」

バルジは手を差し出し、握手を求めたが、ゲヘナは応じなかった。「ふふっ、握手はお互いに武器を持っていないことを証明する挨拶なんだがな。まあ、君の場合は関係ないか」

「御託はいい、さっさと本題に入ろうぜ」

ゲヘナの催促に、より愉快に顔をゆがめた。

「王都グラン・アビイリア。その国王を殺害しようじゃないか」

「……………」

「まあ、君にとっては復讐になるのかな。二十年前の大戦で祖国を破った王都に向けての報復」

「それでお前達に何の利益があるんだ？」

曲がりなりにも、彼らも王都民だ。余計な混乱は彼らにも被害が及ぶだろう。

「利益。そうだな。俺達には利益が無いかもしれない。だが、国民の求める正義を手に入れることが出来る」

「ふん、なに寝ぼけたことを。お前達が王都を滅ぼしたら、国民は路頭に迷うぜ？」

「何も王都を滅ぼすとは言っていないさ。国王を殺すのさ」

「それが何の正義になる」

「いいか、君は知らないかもしれないが、大戦後の王都で、少しゴタゴタがあってね。一時王都は、いつ革命や反乱、暴動が起きても

おかしくない状態に陥った。だが、そんな混沌とした状況を救ったものがある。おまえもよく知る、あの白い騎士団さ」

「チッ……」

苦い顔でゲヘナは舌打ちする。

「奴ら、騎士団はもともと王都よりもはるか北の大地に本拠地である大聖堂を構える一つの宗教団体だったのさ。大戦で君を葬った功績で、騎士団のまとめ役である大教皇はかなりの発言権を得た。そして、混乱している王都で、奴らは神の教えを説き始めたのさ。縫るものを失った国民には、その神の教えが救いの手に見えたんだろ。うな、程なくして、混乱は収まり、国民は奴らの宗教に感謝した」

「それで、お前の言う正義ってのは？」

「騎士団は今、王都のかなり深いところまで喰い込んでやがる。実質、国王はただの人形で、大教皇が国を治めてるようなもんだ。そんなのが許せるか？」

ゲヘナは黙ったままだ。

「そこでだ。君の復讐は、厳密に言えば、騎士団に対してだ。私達は騎士団を潰して新しい国家を作り直す。どうだ？ 協力してくれるか？」

「お前たちの話はわかった。だが、お前と協力して何の得が俺にあるんだ？」

「お前一人じゃ騎士団に勝てない。殺されるのが見えてるさ」

一層、ゲヘナは顔をゆがめて怒りを露にした。

だが、バルジは臆せず、続ける。

「俺達と協力すれば騎士団を全滅させることが出来るぞ？」

「どうやって？」

「騎士団は確かに、いけ好かない野郎どもだが、国民に危害を加えたりしない。つまり、そういうことさ」

「民間人に紛れて戦うのか。確かに、この爺さんが襲ってくるとなると、向こうも戦いづらいだろ？」

後ろに立つワトーを指差しながら言った。

このドレッドノートという組織を見る限り、確かに一般人に紛れ込んでも不自然ではなさそうだ。そして、騎士団は反撃しようにも、関係ない一般人を巻き込むわけには行かず、やられる一方になる。

「……面白い、それなら、もしかしたら勝てるかもな」

「では……」

「却下だ。話にならねえ」

「どうして!？」

バルジは驚き、飛び掛るようにゲヘナに迫る。それまで落ち着いていた彼が初めて動揺した。

「俺は俺一人で決着を付ける。そこに、お前らの言う正義だとか、国民だとかは関係ない」

ゲヘナはバルジに背をむけ、来た道を引き返そうとした。

バルジは「……仕方ない、のか」とうわごとのように呟いている。その姿を見て、ゲヘナは思い返したように足を止めた。

「そうだ、まだ一つ忘れてたぜ」

「ん？」

バルジが顔を上げた瞬間、ゲヘナの手が彼の顔を覆った。こめかみに指が食い込みそうなぐらいの力が込められる。

「後始末、しないとな」

「や、やめろ……!」

膨張するように、ゲヘナの右腕に魔力がたまる。黒色の魔力は彼の皮膚から零れだし、彼の周りを不穏に漂う。バルジは音が聞こえなくなり、視界が赤く染まり始める。ゲヘナの右腕に、奇怪な紋章が浮かび上がる。魔力が流れると、不気味に青白く光る紋章こそが、彼に無敵の力を与えるものだった。

部屋の中の空気が歪み、ゲヘナの魔力が暴発した。途端に噴出される魔力の塊に、顔面を粉々に吹き飛ばされ、バルジの胴体部分が一直線に壁に激突する。

轟音が響き、部屋の中を反響する。

「一応、手加減はしといた」

首を失った胴体は、人形のように、だらりと崩れ、霧散した血しぶきがあたりを赤く染める。

ドレッドノートのボス、バルジはあっけなく殺されてしまった。

「おお……」

もはや言葉が出ず、ワナワナ震えているワトーを適当に蹴り飛ばし、ゲヘナはこの息が詰まりそうな地下空間を出ることにした。

「ん……ここは……？」

シリウスは、肌を叩くような轟音で目を覚ました。

辺りをぐるりと覆うのは、灰色の壁。地下のようで、窓一つ無く、薄暗い明かりがモノトーンの部屋を照らす。何も無い大きな部屋の真ん中には、丸い小さなイスに腰かけた一人の男がいた。

「ようこそ、王子様。俺がドレッドノートのボス。バルジ様だぜ？」

第三十二話 交差する者達（後書き）

多少長く書きすぎた気がしますが、気にしないことにしましょう。
楽しくなってきたので、良しとします。自分が楽しければそれで良いのです。

第三十三話 地下の出会い

シリウスが目を覚ましたのは、灰色の壁がぐるりと周りを覆う地下室のような場所だった。息が詰まるような空間の中で、その男は丸い背もたれの無いイスに、気だるそうに腰かけていた。

「よう、シリウス君。いや、ヴァーリス君の方が好みかい？」

この男、バルジと名乗った男は、派手なアクセサリをじゃらじゃらと身につけ、素肌に直接ジャケットを身につけている。年はまだ二十代前半で、髪の毛はピンクに染まっている。目つきが鋭くギラギラする視線は、真っ直ぐシリウスを射抜いていた。

「ここはどこだ？ 何者だお前は？」

シリウスは立ち上がろうとして、自分の身体がイスに鎖で巻きつけられていることに気がつく。どうやらイスごと床につながれているようで、びくともしない。

「質問は一つに頼むぜえ。ここは中央市街のど真ん中、ドレッドノートの秘密基地ってワケだ。そして俺がドレッドノートのボス。わかったかい？ 王子様」

いちいち癪に障るような抑揚で、話をする。

「何が目的だ……？」

「フフッ。王都に帰りたくないかい？」

「何？」

「だから、王都に帰りたくないかって聞いてんだよ。犯罪者、人殺し」

「だ、黙れッ！」

シリウスは叫びながら飛びかかろうとするが、イスはびくともしない。

「おいおい、そうムキになるなよ。俺だって人は殺したことがあるぜ。まあいい、それよりも、父親である国王クロード様を後ろから剣で刺し殺した王子様は、王都に残した妹さんをどう思ってるのか

なあ？」

「ツッ……」

途端に、シリウスは言葉を失った。

「王族の血を引かない彼女は今、王都でどんな扱いを受けているか知りたくないかい？」

父親は殺され、兄はその犯人として投獄。王家の血を引かない、つまり、今の彼女に味方はいない。

「し、知っているのか……？」

「ああ、もちろん。教えて欲しいのかなあ？」

バルジは目を吊り上げて、愉快そうに笑う。

「だが、只じゃ教えてやら無いぜ。条件がある」

「……なんだ」

「王様になれよ」

「ハア？」

「だから、王様になれて言っただよクソ餓鬼」

バルジの足が、シリウスの顔面を蹴り飛ばした。突然の出来事に、シリウスは何が起きたのかわからなかったが、イスに体が固定されているため、吹き飛ぶことすら出来ない。

「生意気な口きいてんじゃねえぞ」

「チッ、わかった。だが、説明してくれ。王様になるとはどういうことだ？」

口の中が、血の味がするのを我慢し、シリウスは尋ねる。確か、父親であり、国王だったクロード亡き後、クロードの従兄弟に当たる人物が国王に就任し、事なきを得たはずだ。

「お前が親父を殺した後、王にはディーンが主任した。だが、あいつはもはや操り人形だ。今は全部騎士団の連中が政治を行ってるよなもんだ」

騎士団、二十年前の大戦で、王都を救った、北の聖地に本拠地を構える組織だ。確かに、大战後は大きな権力を持っていた。

「あのクソ野郎共の好きなようにはさせておけねえ。ディーンを殺

し、騎士団も殺し、お前が新たな国王として、王都を導いていくのさ」

「はん、そんな馬鹿な話を信じられるか。騎士団が王都を支配しているのは事実かもしてないが、それでも国が荒廃してる様子も無い。それに、犯罪者の汚名を背負った俺が、王になんてなれるはずもない」

自嘲気味に笑い、バルジの話を一蹴した。だが、バルジはその返答を予想していたかのように、さらに顔をゆがめて笑った。

「それでもねえのさ、実はな、お前が国王を殺した事は国民の誰もが知っている。しかし、その理由までは知らない」

「つまり、なにが言いたい？」

「一部では……大戦後も続く、旧体制を打破しようとした革命派のヒーローとうわさされている」

王都では、確かに、きっちりとした身分制度がある。貴族と一般市民の優遇の差は大きいが、だからといって一般市民が虐げられていることは無い。ただ、この差を快く思っていない人々もいる。

他にも、様々な、いわゆる『旧式の制度』が残っていた。それは代々王族が定めてきたもので、王族が続く限り、破られることは無かった。

しかし、シリウスが国王を殺したことにより、王都の血は途絶え、結果、旧式の制度は改善されたのだろう。

「これにより、お前が脱獄し、王都に凱旋するとなれば、手を貸してくれる人々も多いぜ？」

自らの汚名返上、そして、再び王都に帰ることができる。

しかし、

「いや、俺はそんなのを望まない。血が流れてまで、帰るべきじゃない」

もし、王子ヴァーリスが再び王都に戻れば、争いは避けることが出来ない。そんなことをしてまで、これ以上、自らの手を汚してまで、あの子の元へ帰るべきじゃない。

「そうか、そうか。なら、俺にも考えがある。プロファインホテル201号室」

一瞬、バルジの言葉の意味することが分からなかった。

「ヒナサワコウ、マナ・フォンレーゼ、二名様」

「!? ツてめえ……」

シリウスの宿泊先のホテルだった。そして、部屋はシリウスの隣、つまり、紅とマナの部屋。

「残念だったな、お前は嫌でも領かなければならない。それとも、この二人の娘がどうなっても良いなら、それでもいいだろう」

バルジは愉快そうに唇をゆがめ、シリウスは血の味がするほど、食いしばった。

「まあ、時間をやろう。それまでに決めておけ」

そういうと、視界の端から、屈強な男が現れ、シリウスの縛り付けられているイスごと、持ち上げられた。

その体勢のまま、モノトーンな廊下を運ばれる。抵抗しようともがないでも、縛り付けられた鎖はびくともしない。

方向感覚を失いそうな、何の飾り気も無い廊下を、曲がりによがって、一つの扉の前に着いた。扉には、厳重な鉄格子があてがわれている。

男は、扉を開け、無造作に中にシリウスを放り込んだ。右肩から床に落ち、激痛が走ったが、その直後、扉を閉められ、鍵まで掛けられてしまった。

「畜生ッ。……」

床に顔を押し付けながら、考える。

（それにしても、奴の狙いは何だ……？ 俺を国王にして何か利益が……いや、もしくはその途中の過程で……。とりあえず、今はそんなことは後回しだ。ここから脱出しないと）

脱出を試みるが、鎖はガチャガチャ音を立てるだけである。

首だけを回し、部屋を眺める。天井に近い、壁の上側に、通気ダ

クトがある。おそらく、ここは地下だ。そして、地下室で部屋を密閉するわけにも行かない。ダクトには蓋がついているが、それをはずせば、人一人通るのは可能かもしれない。

紅とマナは、自警団の詰所から、ホテルに帰り、シリウスの帰りを待っていた。

「自警団の人から連絡来ないね」

もう夜中だ。今夜中にシリウスは帰ってこないかもしれない。

「もう、ほんとにどこ行っただのかなあ」

溜息混じりに、部屋の中をうろうろ歩いていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「シリウス！？　っはノックなんてしないか……」

それでもわずかに期待してドアを開けると、タキシードを着たホテルマンが立っていた。

「お客様、フロントにメッセージが着ております」

そう一言告げると、役目を終えたホテルマンは背を向けて引き返していった。

（メッセージ？　なんだろう……）

シリウスがフロントにやってきたら、メッセージではなく、直接会いにすれば良い。少し不安に思ったが、迷わずフロントまで行き、メッセージを受け取った。

封を切り、中身を確認する。

中には一枚の便箋が入っているだけだった。

『逃げろ。急いで』

「……？」

紅は便箋を見つめたまま、固まってしまった。

狭苦しくて、身動きが取れないような通気ダクトの中を、シリウスは這うように移動していた。

幸いにも、シリウスの身体を縛り付けていた鎖は、何度もガチャガチャ動かししているうちに緩み、多少荒業になったが、抜け出すことが出来た。

（関節なんて……もう二度とゴメンだ）

若干、身体に違和感があるが、シリウスは誰にも気づかれないように移動する。バルジは時間をやると言っていたが、見回りがいつ来て脱走がばれるかわからない。

（このまま地上を目指すか……それとも、奴の油断を突いて決着させるか……）

バルジは王都を滅ぼすつもりだ。彼がなんと言おうと、事実はそのようになるだろう。できれば、いや、必ず阻止しなければいけない。しかし、武器も無い中、たった一人で奴をとめることができるのか。はたまた、一度逃げ出して、それ以降、奴に近づくチャンスがめぐってくるかどうか。

そして、シリウスには一つ、気になることがあった。

ドレッドノートのボス、バルジ。彼はシリウスの正体が、王都の人殺し王子であることを知っていた。さらに、彼はシリウスを仲間にしようとしていた。シリウスをこの地下基地に連れ込んだ手際の早い。まるで、前もって計画されていたかのようだ。

シリウス、いや、ヴァーリス王子が脱走し、王都を目指す旅の途中で、中央市街に寄る確立は高いだろう。しかし、もしもヴァーリスが中央市街に辿り着かなかったとしたら。途中で蛇に食われて死

んでもしていたら。それで奴の計画は破綻する。

（それに……俺は一度、ドレッドノートと接触してる……。あの時、助けに入った奴。そして、俺の顔を知っている奴……）

偽名を使って来たが、顔までは変えられない。

——俺のことを知ってると言った男。

——俺を中央市街まで連れてきた男。

——探し物があると言い分かれた男。

（まさか……な）

シリウスは首を振り、邪念を払う。

通気ダクトは、行き止まりになった。どうやらここからは垂直に伸び、地上に出ているようだ。ここを上るのは無理そうだ。

（下に下りるか……よっと）

あたりに誰もいないのを確認し、廊下の天井から降りる。足音を殺して、廊下を忍び歩く。モノトーンな廊下は幾つもの曲がり角があり、自分の位置が分からなくなるような、迷路だった。

耳を澄ますと、遠くから足音が迫ってくる。だが、この廊下には身を隠せそうな場所がまったく無い。

（まずい……見つかる！）

武器も持たない今のシリウスは、ほとんど無力だ。逃げるしかない。

足音は徐々に近づいてくる。相手がどこへ向かうのかも分からない以上、闇雲に引き返すのも、ためらわれた。

咄嗟に、曲がり角の、ちょうど明かりが角で影を作っている部分にしゃがみこむ。見ればすぐにばれてしまうような位置だが、突っ立っているよりはましだ。

足跡はぐんぐん近づく。どうやら走るような速度だ。もしかしたら、気づかずに通り過ぎてくれるかもしれない。

息を潜め、足音を聞く。

近い。

心臓が、飛び出しそうなくらい、早鐘を打つ。心臓の音でばれて

しまうのではないかと思うと、余計に心音が高鳴った。額に脂汗が浮き、足が震える。

(堪えろ……)

一瞬、奇襲攻撃で襲い掛かった方が良いかもしれないという捨て身の案を思いつくが、相手が何を持っているかも分からないので、それは危険な賭けだ。

(どうする……)

足音は近づく。

そして、顔を見た。

顔には縦に、火傷のような傷跡を持つ、男だった。武器は持っていない。だが、その身体からおぞましい、莫大な魔力が流れているを感じる。

一瞬、目が合ったのかと思った。それぐらいに、射抜かれるような存在感だ。

(ダメだ……、絶対に勝てない……)

死を直感させるような魔力。それにすくみあがり、動くことすら出来なかった。

「ん？」

廊下を通り抜ける。

(ふうー……)

男が通り抜け、廊下の角を曲がったところで、安堵の息を吐いた。出来れば、もう二度と顔を見たくない相手だった。

シリウスも立ち上がり、廊下を歩く。すると、一つの扉が現れた。少し、空いている。そっと張り付くように中を見た。

そこには、見覚えのある金髪の男が立っていた。

「ダルク・ハット……！」

シリウスは口の中で、枯れた声をもらした。

第三十四話 仲間の裏切り

ダルク・ハットは、どうやら誰かと会話してるようだ。扉の隙間から、部屋の中を確認する。飾り気の無い、箱のような空間に、だるくのほかにもう一人、老人が立っている。

「ご苦労。ターゲットは無事、こちらで捕獲した。お前には当分仕事は無い」

老人は、真っ白な長い髭をもてあそびながら、唸るような低いトーンで、ダルクに語りかける。

「そうかい、それじゃあ報酬は弾んでくれよな。バルジさんよお」
シリウスはその一言を聞いたとき、疑問が浮かんた。

（バルジ……？ ああ老人が？）

部屋の中には、二人のほかに誰もいない。老人も、「考えておこう」と答えているのを見ると、確かに老人の名はバルジなのだろう。

（ダルク……やっぱりお前は……）

話の内容だけでは判断しかねるが、まるでシリウスを中央市街まで誘導しているようにも聞こえる。それに、ダルクがこのドレッドノートの基地の中で、普通に受け入れられている。

「おっと、そうだ。まだ話がある」

ダルクが、話を終えたバルジを呼び止めた。怪訝な顔で老人は振り返る。

「ドブネズミが盗み聞きしてるぜ」

ダルクと目が合った。

扉の隙間をしっかりと見据え、魔導銃を構える。

（まずい……バレた！）

「動くな。一步でも下がれば容赦なく撃つ」

冷たい、敵意をこめた声を響く。老人バルジはその成り行きに、

目を広げて驚いていたが、静かに扉に近寄り、開ける。シリウスは身を守るものも無く、扉の影から大人しく出ることにした。

「両手を挙げて、こっちに来い。ゆっくりだ」

あの、軽口を叩いていたダルクからは、想像もできないような、冷徹な視線。背筋が凍りそうになりながらも、部屋の中に入る。

「いつの間に抜け出したんだ？ 『脅し』も効いただろ？」

ダルクの言う『脅し』とは、紅とマナの居場所を掴まれているということだろう。確かに、彼女達を巻き込みたくない。だが、シリウスの頭の中では、一つの自信のようなものもあった。紅なら、紅の魔術なら大丈夫だ。これまでも、それで乗り切ってきたんだから。「お前こそ、こんなくだらな奴らの手先だったんだな」

「ふん、そのくだらな奴らに捕まってるのは誰だい？」

銃口が、額に押し付けられる。その冷たい感触と、一瞬、ダルクと視線がぶつかる。

それを合図に、シリウスは身を屈め、一気にダルクに飛び掛る。

ダルクは引き金を引くが、魔導銃の銃口が反れ、銃弾は虚しく床をえぐった。

シリウスの拳がアッパーカットのように、下から突き上げられる。ダルクは身を振り、それをかわす。シリウスは攻撃の手をやめず、続けざまに拳を繰り出す。

「隙だらけだぞ？ もっと早く動けよ、ウスノロ」

ダルクが身を翻した。その次の瞬間には、シリウスの後頭部に衝撃が走った。視界がぼやけ、上下感覚が分からなくなる。

（何が……）

床に這いつくばるように、叩き伏せられる。腕を締め上げられ、上に乗られる。完全に動きを封じられてしまった。

「回し蹴りなんて見たこと無かったかな？」

シリウスは、完全にダルクのことを見誤っていた。魔導銃など、武器優先で戦うところしか見ていなかったせいだ。

「つつ……クソッ。信じてたのに。仲間だって信じてたのに！」
「あーあ、情けねえな……もうちょっと頭が切れるかと思ったんだがな」

ダルクはそう言うのと、いつの間にかいなくなっていた老人のバルジが、どこからか部下を引き連れて再び部屋に戻ってきた。

「そいつを拘束しろ。しっかりとな」

再び、シリウスに鎖が巻きつけられた。

「まったく、いったいどこに出口があんだ？」

ゲヘナはドレッドノートの地下基地の中を歩き回っていた。もともと、道筋を覚えていたわけではないが、この特徴の無い、壁と曲がり角だけの構造は、道に迷うだけではなく、精神的にも悪い。

（天井ブチ破るのが早いが……あんまり騒ぎにはしたくねえな）

一般市民がこの上にうごめいていることだろう。下手に騒ぎを起こせば、騎士団の連中が駆けつけるかもしれない。

騎士団。ゲヘナにとっては、憎き復讐相手だ。だが、この街に住む市民達は、そういうわけではない。直接、二十年前の大戦に関係していない若い世代も沢山いるだろう。関係ない人を殺すほど、ゲヘナは落ちぶれていない。

（復讐……その後はどうする？）

祖国を滅ぼした国。その元凶となる騎士団。しかし、もしも騎士団が現れず、戦争が続いていれば、滅びていたのは王都だっただろう。そして、少しの生き残った王都民は、すべてゲヘナを憎むだろう。

う。

終らない連鎖。復讐という名の連鎖は断ち切られることが無い。それを続けていくことに、意味なんてあるのだろうか。

（とにかくここを出る。話はその後だ……）

ゲヘナには、二つの選択肢があった。一つは、ドレッドノートと協力して、騎士団を滅ぼすこと。もう一つは、ドレッドノートを崩壊させ、結果的に、王都を忍び寄る影から救うこと。

ゲヘナは後者を選んだことになる。本人に、その気が無くても、ドレッドノートのボスを殺したことはそういうことだ。

紅とマナは夜の街を駆けていた。ホテルで警告文を受け取った後、その足で外に飛び出した。

目的は、もちろんシリウスを探すためだ。

「絶対、何かの事件に巻き込まれてる。何かがこの街で起ころうとしてる！」

「でも、一体どこを捜せば良いんでしょうか？」

闇雲に走っているだけでは、絶対にシリウスを見つけることは出来ないだろう。悠長に、自警団の報告を待っている暇も無い。

「何かが起きるとしたら、手がかりがあると思う」

「手がかり？」

「うん、シリウスが私達を放っておいて、かえってこれないような状況なら、どこかで騒ぎが起こっても不思議じゃない」

紅は辺りを見回す。夜も更けてきたこの時間では、通りの人もほとんどいなく、街灯が人のいない道路を寂しく照らしているだけだった。

「もっと街中の方に行ってみよう」

二人は、中央市街の中心部に向かうことにした。駆け足で街の中を行くと、後ろから声を掛けられた。

「あの、その二人。もしかして、さっき詰所に来た子？」

振り返ってみると、自警団の気のよさそうなおじさんだった。

「はい、あの、実はこんなのが届けられて……」

紅は手に持った警告文を彼に見せる。おじさんは顔をしかめてじつとそれを見た。

「そうか……たしか、知り合いとはぐれたんだったね？」

「はい、あの、それで、どこかで騒ぎとか起こってませんでしたか？」

紅の問いに、おじさんは黙ってしまった。「あの……」

「ちよっと、こっちにおいで」

おじさんが手招きした。紅は彼に近づこうとした瞬間。

彼は、袖の中に隠し持っていた仕込み型の剣を振り回した。

咄嗟の反応で、紅は身を屈めてかわすことが出来たが、シリウスのように慣れているわけではない。その場に倒れこむように転んでしまった。

「何……!？」

「紅さん、避けて！」

マナの叫びに、ハッと我に帰り、再び縦に剣を振りかぶった男から転がるようにして逃げる。

「なんでこんなことするんですか!？」

体勢を立て直しながら、男に叫ぶ。

自警団、つまり街の治安を守る団体のはずが、危害を加えるなんて、普通はありえない。

「ふん、おい、囲め」

男の声に呼び寄せられるように、路地から複数の人影が現れた。それぞれ様々な武器を持っている。彼らが紅とマナを囲むように迫

ってくる。

「とにかくここから逃げましょう」

恐怖からか、身を寄せてくるマナに頷き、紅は魔術で、炎の剣を空中に発生させる。

「こう見えても私だって戦えるんだから！」

炎剣を男目掛けて発射する。赤い閃光が一直線に空を切り、男を吹き飛ばす。

筈だった。

「嘘っ……!？」

しかし、炎剣は空中で、男に直撃する寸前で、何にかき消されてしまった。炎剣が儚く煙をあげて消滅し、その向こうでは男が得意げに笑っているのが見えた。

「対抗呪文……単一属性の魔術を打ち消すなど容易いことだ」
レジスト

魔術が途中で打ち消されてしまう。この感覚を、紅はローアン・バザーで経験していた。白い鎧の剣士。魔術も使いこなす彼との戦いの中で、紅の魔法は打ち消されたことがある。

「……でも、これならどう!？」

紅は再び、炎剣を発生させる。しかし今度は、男に向けて発射せず、地面に叩きつけるように放った。局地的に爆発が起こり、爆風と砂利が飛び散る。

だが、

『力ヲ寄越セ、守護代天使ノ使ヒ、白百合ノ天使、水ノ守護ヲ求ム』
ガブリエル

男が早口にか何か囁いた。

途端、彼を中心とするように、地面から水が噴出した。爆風と砂利を蹴散らすように噴出す水は、まさしく魔術によるものだった。

「魔術師……!」

目の前に現れた強敵に愕然とし、再び構えなおす。

「無駄だ。炎と水では相性が悪い。お前に勝ち目は無い」

男は言うが、紅は諦める気は無い。再び男に炎剣を放つが、打ち消される。それでも、今度は魔力を大きくこめて、極太の炎剣を放つ。

しかし、それも虚しく、ジュウという音を立てて、火に水をかけたように、鎮火してしまふ。

「もういいだろう。囲め、捕まえろ」

男の命令で、周りを囲うものたちが詰め掛ける。必死に抵抗するも、魔術は打ち消され、単純な力では勝てるはずもない。

（せめて……マナだけでも逃がさないと……）

紅の隣では、同じように男に囲まれ、捕らえられそうに成っているマナがいる。

紅は再び、魔術で炎を放った。

「ん？ しつこいな、そんなことをしていても、無駄に魔力を消耗するだけだ」

男が再びレジストして、炎を打ち消す。周りにいた男達も、鈍器などで、紅を攻撃し、押さえつけようとする。

「おい、間違っても殺すなよ？」

男はさして心配していなさそうに呼びかける。

それでも、紅は炎を放ち続ける。

ジュウジュウと音が響き、あたりは次第に水蒸気で満たされてゆく。炎を打ち消す際に、必ず少しは水も蒸発する。その水蒸気が、やがて濃くなってゆく。

「……っ、おい、！ ちょっと頭殴って気絶でもさせろ！」

男は気がついた。既にあたりには、視界を削るほどの、霧の様に水蒸気が立ち込めていることに。

男の声で、周りの者が紅を攻撃し、黙らせようとする。

「マナッ！ 今のうちに逃げて！」

紅は叫ぶが、マナは戸惑ってしまふ。

「でも、私だけで逃げるなんて……」

「絶対後から追いつくから！」

今、このチャンスを逃せば、どちらもつかまってしまおうだろう。マナがここに残っていても、出来ることが少ない。それに、紅は必ず追いつくといった。

仲間を、信じよう。

「絶対。だよ！」

そう言い返すと、マナは懷から二枚のタロットカードを出し、それを地面にたたきつけた。

ボンッつと爆風がして、一瞬、男達が離れる。その隙を狙って、マナが駆け出す。紅もそれに続きたかったが、腕をがちりと掴まれていたため、動くことが出来なかった。

「ちっ、フォンレーゼのほうは後から回収しろ。今はこいつだけで十分だ」

男は言った。紅は既に、抵抗できないように、腕を背中に回され、地面に押し付けられていた。

数名がマナの追跡に走り、残りは紅を拘束し始める。

（あはは……追いつけそうにないや……）

紅は一人、寂しく心の中で呟いた。

第三十四話 仲間の裏切り（後書き）

今回、少し登場した魔術の詠唱ですが、じつはちゃんと法則というルールを決めています。でも、そのうち忘れてしまうかも……
（笑）

第三十五話 迫りくる影

日差しが差し込む、広い空間。天井を覆うように、色とりどりのステンドグラスがあしらわれ、どれも聖母の姿がかたどられている。神殿を思わせるような広間の中心に、円形のドーナツ状のテーブルが置かれ、十三のイスが並んでいる。それぞれに、一から十三までの数字が振られている。

コツコツと、足音が綺麗に反響する『大聖堂』。そこに、白を基調とした鎧をまとう戦士が、足を踏み入れた。

（やはり……いつ来ても慣れないな……）

白い鎧の男、ジェイドはローアン・バザーでの任務を終え、騎士団の本拠地である大聖堂に帰還した。大陸の最北端にあり、王都との関わりも深い、大聖堂には既に他の騎士団の面子も揃っていた。

その中でも、とりわけ異彩を放っているのが、円形のテーブルの中心。周りに座るものたちから一斉に視線を浴びることになる中心に、豪勢な玉座とともに座っている老人。

大司教、イザード様。

騎士団の創始者であり、教会でもっとも権力を持つ者。

今はその顔に深い皺を寄せながら、眠るように瞑想をしている。

白い髭が床に付きそうなぐらい長く、その白さは日光を反射させ、輝いていた。

その穏やかな容貌の彼に逆らう者は、彼の巨大すぎる魔力で、消し炭にされるらしい。

（逆らう必要も無い。イザード様の導く未来は安泰だ）

ジェイドは心中で呟きながら、自らのイスに座った。一番の番号が振られ、最も出口に近い席だ。

「全員揃ったか？」

目を開けずに、揃ったか確認する。その声に、十二番の席についている総髪のグレーのスーツを纏った男が「揃いました」と一声あげた。

「よろしい、それでは始めよう。わが騎士団の、そしてすべての信者の未来を導く会議を」

いつもの号令とともに、大司教は話を始める。

「まず、一番の戦士、ジェイドよ。任務ご苦労だった」

ジェイドは大司教の言葉に、「ありがとうございます」と立ち上がってお辞儀をした。そして、任務の依頼主である、騎士団長アルタイルが尋ねた。

「ヴェッセルの回収ご苦労。異常はなかったか？」

「はい、特には」

アルタイルはどうして、あんな片田舎にいる隠居した老医者をごきまでつれて来いと命じたのか、図りかねたが、任務にそむくことは出来ない。

「次に、十三番の騎士、アルタイル。そなたに命じた、『悪魔』の護送だが……」

大司教がそのことを口にした途端、大聖堂はざわめきに包まれ、アルタイルは顔を伏せた。十二番の男が「静粛に」と一言叫び、再び静寂に戻る。

「そのことについて、なにかあるか？」

大司教の問いに、アルタイルは立ち上がり、頭を下げた。

「申し訳ございません。すべて、私の不注意と力不足です。どんな天罰でも、甘んじて受け入れましょう。しかし、もう一度チャンスを私にください」

あの騎士団長が頭を下げるほど、状況は深刻だった。今だ、捜索隊からは発見の情報が無い。これ以上、あの悪魔を野放しにしていれば、民に被害が出るかもしれない。

「よい。頭を下げるよりも、すべきことがあるだろう。そして、天罰術式の方はどうだ？」

「はい、順調でございます。『天罰神の寄り代』も無事、確保しました」

アルタイルが早口に報告すると、わずかに驚きの声が聞こえた。

「いやいや、意外だね。『天罰神の寄り代』をどこで見つけたんだい？」

九番の席に座っている、黒いローブに不快な笑顔が描かれた仮面を身につけた、まだ声変わり前の少年のような声の男。カースは親しげに、なれなれしく話しかけた。

「……異世界に逃げていた。だが、素早く対処したおかげで、再びこちらに引きずり戻すことが出来た……」

本来格下であるカースに、アルタイルは苦々しげに答えた。どうも、このカースという男はアルタイルを目の敵にしているきらいがある。

「ほうほう、異世界移動に伴う魔力の波を生きて抜けるなんて、さすがは『天罰神の寄り代』だね」

「もうよい、両者とも。次に……」

「よーよー、それよりもさあー。七番が欠番なのは分かるけど、どうしてラインハルトとターロスとティリオンの野郎がいねえんだ？」

恐れ多くも、大司教様の言葉を遮るようにして、喋りだした男。八番の席に座る、長身で髪を金髪に染め、グレーのジャケットを身につけている、イズだ。

彼は、二番、三番、四番の席が空席なのを指差す。

その状況に、一同は一瞬凍りつくが、すぐに十二番の男が口を開き、大司教に代わって説明する。

「……ターロスとティリオンには任務を依頼した。中央市街に巣食うドブネズミ共の駆除だ」

「ドブネズミ……ああ、あのドレッドノートとかいう組織のことか。」

ふうん、楽しそうだなあー俺も行きたかったなあー。それで、ラインハルトは？」

「死んだ。悪魔に殺された」

十二番の男ではなく、大司教が答えた。

「なんだって……？」

「口を慎め、イズ」という声が聞こえたが、大聖堂は再び、ざわめきに包まれる。今度は、大司教が玉座の肘掛を叩くことによって、水を打ったように、静寂が広がった。

「そういうことだ。皆、黙祷を捧げよう」

大司教が言うと、全員立ち上がり、黙祷を捧げた。

「我らの戦友に、すべての民に。先に神の下へと向かったものを弔おう」

マナは中央市街の街を一人、走っていた。背後を確認すると、追っ手が三人。だが、おそらく他にも、追っ手が、マナを囲むように街中に潜んでいるだろう。

（どうしよう……。このままじゃ追いつかれちゃう）

追っ手の中には、自警団の格好をした者までいる。つまり、それが変装であれ、実際に自警団の人であれ、不用意に人に頼るのはよくない。おまけに、マナの体力では、純粹に走り回ったところで、大の男から逃げ切れるはずが無い。

（タロットカードの呪文があるけど……。それでも足止め程度にしか役に立たない）

先ほど、紅の魔術をレジストする者までいた。つまり、呪文程度

では、簡単にかき消されるかもしれない。

必死に考えをめぐらせながら、街中を逃げる。小刻みに角を曲がって、少しでも追っ手を撒こうとするが、その度に、別の追っ手が角から現れる。まともに逃げていても、逃げ切れそうに無い。

（それなら……）

マナは角を曲がり、狭い一本道に入る。後ろからは追っ手が三人縦に並んで走ってくる。

（今だっ！）

追っ手が並んだ瞬間、マナはタロットカードを二枚、中に舞い上げる。二枚のカードは空中でこすれあい、小爆発を起こし、煙幕を巻き上げる。追っ手の視界はふさがれてしまう。

この隙にマナは逃げ切ろうとするが、

「こっちだッ！」

反対側から、別の追っ手が押し寄せる。振り返れば、煙幕はすでに振り払われてしまっている。

「さあ……おとなしくするんだ」

マナを取り囲む男達は、中には自警団の格好をした人も多い。じりじり近づいてくる男に、思わず恐怖から身がすくみあがる。

「いや……こないで……」

マナは必死に体をよじり、伸びる手をかわす。

もはや逃げ道もない。完全に囲まれてしまった。打開策も、タロットカード程度ではどうしようもない。絶望にうなだれたとき、バコンという、箱のようなものが落ちる音が聞こえた。

「痛っ、なんだ!？」

頭に直撃した男が上を見上げる。

するとそこには、マントの様にローブをはためかせた一人の女性が立っていた。

「……おねえちゃん!？」

マナはその姿に見覚えがある。

悪い人を見つけると放っておけない正義感にあふれる性格の、
とても頼れる人。

「お前ら、人の妹に何してんだ！」

住宅アパートの建物の屋上の角、彼女は佇むそこから空に飛び出し、マナの隣にストツッと着地した。

「アイリーン・フォンレーゼ……組織をちよろちよろかぎまわつてると報告を受けたが、ここでもまとめて始末してもかまわないだろう。おい！ やっちまうぞ」

リーダー格の男の号令で、マナたちを囲む男が押し寄せる。

そんな状況でも、アイリーンは肩をすくめて髪をいじりながら、

「無粋な男は嫌いよ」と冗談めかして言っていた。

「開櫃」
おいで

アイリーンの号令で、一緒に落ちてきた箱のような棺の蓋が、まるで中に誰かが入っていて、中から蹴り上げたかのように弾けとんだ。

「覚醒」
おきて

箱の中から、一人の影が起き上がった。顔はすっぽりと三角帽子に収まっていて見えない。体にはよろいと、その上にスカーフのよ
うなマントをまとっている。だらりと垂れた両腕と頭は、糸で吊る
された操り人形をおもわせた。

「戦って」

アイリーンのその一言によって、人形に、命が吹き込まれたかのようにビクンと振るえ、両腕がちょうど迫ってきていた男の首根を捕まえる。それを、間接の動きをまるで無視して振り回す。のど元をつかまれた男は息が絶え絶えになりながら、その体で仲間達をな

ぎ払ってゆく。

そのさまをアイリーンは退屈げに眺めていた。

(すごい……すごいよおねえちゃん。また強くなってる)

いつでも頼れる、最強の味方。マナは安心しきっていた。

やがて、人形の暴君が男達をすべて叩きのめし、男達はつぶれた蛙のようなうめき声を上げて動かなくなった。

「ありがとう、おねえちゃん！」

マナは目を輝かせて姉に抱きついた。

「さて、一段落ついたことだし。なんでマナがここにいるのかとかも聞きたいけど、今はそれどころじゃないのよ。早く逃げないと、この街で大きな戦闘が起こるわよ！」

第三十五話 迫りくる影（後書き）

今回、P Cが壊れてしばらく執筆が進みませんでした。申し訳ありません。また、いろいろメモしてたデータも吹っ飛びました。月ま
で吹っ飛びたい気分です（笑）

第三十六話 猛毒の裁き

「さあて、てめえは人の話を聞いてたのかあ？」

シリウスの眼前には、額に青筋を浮かべた若いバルジが立っている。

ダルク・ハットに再び捕まったシリウスは、そのままイスに、今度は鎖が骨に食い込みそうなほど強く縛り付けられ、バルジの部屋に運ばれた。

「つたく、さっさと返事をすればいいものを。なあ、王子様」

バルジは苛立った様子で、飾り気のない部屋を行ったりきたりしながら、何かを待っているようだ。

「俺はお前に協力する気なんてない。お前のやり方じゃ王都は崩壊する」

「ふーん、これを見てもそんなこと吐けるのかなあ？」

にたにた笑うバルジと、シリウスの間に、一人の少女が連れてこられた。

「シリウスッ！」

「紅……くそっ、」

紅は腕を後ろに回され縛られているが、それ以外は特に怪我などは見られない。しかし、得体の知れない組織の基地につれてこられたことに不安な顔をしている。

（ちっ、紅なら大丈夫だと思ったんだが……やはりそう上手くいかないか）

自分の甘さに齒噛みし、シリウスはバルジをにらみすえる。

「さあ、覚悟は決まったかな？ それとも背中を押してもらいたいかな？」

バルジはにたにた笑いを、顔中に広げて、懷に手を入れる。そこ

から取り出したのは、鮮やかな緑色の液体で満たされた、注射器だった。

「おい、……それをどうするつもりだ？」

シリウスは自分の声が、変に上ずっているのを感じながら、たずねた。全身にいやな汗を感じる。もしも、あの注射器の液体が毒で、それを自分に射されるなら、むしろその方がいい。

「こいつは俺の特別製でね。安心しろ。死ぬ事はないさ、それに解毒薬もある。それでもちよつと頭がおかしくなるみたいだが……まあ死にはしないさ」

頭の悪い子供に言い聞かせるような口調で、バルジは繰り返す。手の中で注射器をもてあそびながら。

「シリウスっ、よくわからないけど、とにかくあいつの話を聞いちゃだめ。絶対に」

紅が、蒼白な顔で、けれどしっかりと目を見て、訴えかける。シリウスの事情もよく知らないはずだ。けれど、紅はシリウスの味方でいてくれる。

「はいはいはいはい、ちよつと黙ってくれるかなあ」

注射器の針先から、液体をぴゅつと出す。そして、その針を紅の白い腕に近づける。

「やめろっ！ わかった、わかったから！ それだけはやめろ！」

「ハハア！ そうだそうだ、もつとおびえた目をしなくちゃなあ！」
バルジは楽しそうにケタケタ笑い、一人部下を呼びつけた。

「実験たーいむ。うで出せ」

部下は戸惑いがちに、身をこわばらせる。「早くしろ」と、耳元で低くささやかれ、決心したかのように腕を突き出す。その肌に、バルジは注射器を刺し、三分の一ほど、液体を流し込む。その間、部下は苦悶の表情でそれを見ていた。

「さあ、気分はどうだ？」

まだ液体を残し、注射器を抜く。

部下の男は、一見何も以上が見えないが、よく見れば、その目の焦点が合っていない。しばらく棒立ちしていたが、口からノイズのような低いうめき声を放った。

突然、部下の男が叫び声を上げて、のどを押さえ始めた。そのまま床にうずくまり、汗をだらだらかき、床にのた打ち回る。その顔は、もう人間のそれではなく、獣のような本能的に、苦しんでいるだけだった。

「ヒィアハハッ！ 見ろよ！ どうしてこんなに楽しそうなんだろうねえ！」

部下の男の頭に、足を乗せて、バルジは叫ぶ。

そして、懐からもう一本、別の注射器を取り出して、男に射す。すると、苦しそうに暴れていた男が、水を打ったように、静まり返る。

「あ……あ……」

今度は感情が消えうせたかのような表情で、ぽつぽつつぶやく。

「まあ、こんな感じ？ まあ、生きてるだろう？」

とても、普通の人間とは思えなかった。毒の実験台にされた男も、そのさまを楽しげに見せるバルジの神経も。

「わかった。協力する。俺は……王都第三十六代王子、ヴァーリス・ミッシェルは、ドレッドノートに忠誠を尽くす」

「シリウス……？」

紅が愕然とした表情でシリウスを見る。この状況を理解することなんてできないだろう。しかし、紅を守るためにはこうするしかないのだ。それが、シリウスにできる最後の事だ。

「だから、紅には、もうかかわらないでくれ」

「ああ、いいぜ。いいだろう。もうこれっきりだ」
そういうながら、注射器を紅の腕に射した。

誰もが驚愕する中、バルジは注射器の中の鮮やかな緑色の液体を紅の体内に、余すことなく、流し込む。紅が身をよじって逃げようとしても、バルジがしっかりと押さえ、逃がさない。

シリウスの怒号も、届かず、バルジの高笑いだけが、部屋に響いた。

白いローブをはためかせ、アルタイルは王都にある、とある地下研究施設に来ていた。研究施設はシンと静まり返り、むき出しの研究資料が廊下のあちこちに落ちてゐる。アルタイルは廊下の一番奥、すりガラスのはめられた薄いドアを押し開けて、中に入った。

アルタイルは、部屋の中にいる男、ローアン・バザーから連れてきた、ヴェッセルにたずねた。ぐるりと壁のように本棚が並べられ、そのすべてに、分厚い研究ファイルが収まっている。窓はなく、人工照明の照らす部屋の中心には、一台の手術用台が置いてあった。

「それは貴様の知ることではない。それで、どうなんだ？」

アルタイルは手術台の上を一瞥する。そこには、一人の女性が寝かされていた。西洋風の顔立に、淡いグリーンの瞳。本来なら、見るものを安心させそうな顔は、今は蒼白になり、頬が扱け衰弱しているようだ。

ヴェッセルは、この息が詰まりそうな空間で、一人、ある儀式を行っていた。

「魔方陣は？」

手術台には、どこの国の言葉かもわからない呪文が所狭しと描かれている。それが円形を形どり、魔方陣を形成していた。

「問題ない。むしろ寄代に問題があるようだが」

「そうか、ならいい。おい、聴いているんだろう」

アルタイルは女性に声をかける。それまで眠っているかのように動かなかった彼女が、口を開いた。

「無駄よ……。私にはもう、力はないわ。異世界に置いてきたもの」

衰弱しきつてはいるが、勝ち誇ったように彼女は言う。しかし、アルタイルはむしろその答えを予想していたかのように、笑った。

「ならば、もう一人の候補を使うとしよう。貴様もよく知る、王都に一人取り残された籠の中の少女を……」

アルタイルが口にした瞬間、跳ね起きるように女性が迫った。

「やめて！ エリオーネだけは手を出さないで！」

「貴様が悪いのだ。貴様が異世界なんぞに逃げ込み、あまつさえ、その力を隠してきたなどと言うからだ」

「……アルタイル、貴方の計画はいつか必ず破綻するわ。成功なんてありえない」

「好きに言うがいいさ。貴様は既に用済みだからな」

「紅っ、大丈夫か？」

紅はうずくまったまま、うめき声を上げている。実験台にされた男はすぐに暴れだしたが、紅の場合は、高熱にうなされているような感じだ。

「ハア、ハア、シリウス……大丈夫だから……」

上げた紅の顔は、真っ赤に染まり、いやな汗をかいていた。とて

も大丈夫には見えない。息使いも荒く、苦悶の表情に満ちている。その頬を、一筋の涙が伝った。

（クソッ……結局、俺はこのまま、紅を守ることができないのか……あんなこと言っておいて、なさけねえ）

シリウスは自分自身の不甲斐なさに歯噛みし、悔しさと、自分自身に対する怒りで煮えくり返る思いだった。しかし、体に巻きつけられた鎖は骨まで食い込み、身動き一つできない。

また、肝心なときに、自分が弱いせいで、大切なものを失う。もう二度と、失いたくないと思っても、そう上手くいかない。自分が弱いせいで。

「ハハア。まあこの辺にしとくか。逆らうようならもっかい注入しちゃうからなあ」

バルジは、解毒薬である注射器を紅に射した。しかし、それで苦しみが消えるかもしれないが、意識が朦朧としたままだ。

もう二度と、前の紅には戻らないかもしれない。

しかし、紅は解毒薬を注入されても、苦しみが消える様子が無かった。

むしろ、さらに苦しみ、悲鳴にも似た、荒い呼吸が聞こえた。

「おい、バルジ……どういふことだ……」

憔悴しきった顔のシリウスがバルジをにらむ。だが、彼は気にも留めない。

「おかしいなあ。効かないわけ無いんだが。とにかく、おとなしくいふことかねえと殺すかもしれないねえからな」

バルジも首をかしげながら、注射器を投げ捨てた。

その間も、紅は苦しみ、汗を滴らせ、顔をゆがませて、必死に息を吸う。

「熱い……助けて……シリウス……」

熱にうなされたうわごとのように、かすかな言葉をつむぐ。それが、余計にシリウスの胸を締め付ける。今も、心臓を締め上げられるような痛みがする。

（誰でもいい……誰か、この状況から、救ってくれ……）

悪魔にでも、魂を売っていいとさえ、思った。それぐらい、なんにでも縋ってでも救ってほしいと思った。そんなシリウスの願いが届いたのか、地下基地に腹の底にまで響くような、振動が走った。

「なんだ……地震か？」

顔を上げると、バルジがそれまでの不愉快な笑顔をさっと消し、真剣な顔でにらんでいる。

そんな中、部屋に、ドレッドノートの部下が飛び込んできた。

「バルジ氏、大変です！ 攻めてきましたっ！ 王都が、騎士団が！」

部下は怯えているのか、声が震えている。シリウスからはその表情が伺えないが、今にも泣きそうだ。その報告に、バルジは顔色変えず、「詳しく報告しろ。そして逃げる準備をするんだ」と答えた。

「ははっ、どうやら危機みたいだな……まあ、街中にこんな馬鹿でかい基地作れば、さすがに感ずかれるか」

シリウスの皮肉に、バルジはもう笑わない。

「ちげえよ。そうじゃねえ。いいか、この中央市街はドレッドノートが作ったんだ。はじめはただのクズ共の集まりが、発展と隠蔽を重ねて、自警団を作り出し、カモフラージュとして、一般市民を地上に住まわせた。つまり、この街こそが、ドレッドノートなんだよ。そして、この基地の場所が知られたっていうことは……」

バルジの言葉をさえぎるように、基地内を振動が伝わる。

「誰が裏切りやがった……！？」

第三十七話 騎士団の介入

中央市街の地下部分に張り巡らされた迷路のような回廊。その中を、白を基調とした服装を纏った戦士達が駆け抜けている。戦士達は、槍にも似た形の杖を持っていて先端からは閃光のような魔術が迸り、ドレッドノートの兵士達を殲滅していた。

「それにしても、いやに退屈ですねえ。おまけに、同伴はよりにもよって……」

白い神官服を着た蒼白な顔の、長身の男は横に並んで歩く、小山のような大男を見やった。三メートルはあろうかという巨漢は、上半身は裸で巨大な杭のようなハンマーを肩にかついで、狭そうに腰をかがめて回廊を歩く。

「んぐ？ 狭くてあるきづらいぞ」

（この低脳野郎とはね……まあしかし、大司教様の命令では仕方ありませんか）

神官服の男ティリオンと、巨漢のターロスは、騎士団に所属する騎士でティリオンが四番、ターロスが三番の称号を与えられている。総勢十三人いる騎士団の中では下のほうだ。

しかし、それでも十三人の騎士団に名前を連ねているというだけでも、名誉なことだ。騎士団の直属である戦士も、すべて彼らに忠実な部下だ。今も、二人はただ歩くだけで部下が敵を排除している。

（それにしても、おかしいですねえ。大陸に名を響かす組織ならば、もっと骨があるかと思ったのですが……）

ティリオンの眼前では、ドレッドノートの兵士が現れてはなぎ払われる。

まるで霧に勝負をするような、肩透かしの感じがする。

（まったく、何の騒ぎだあ？）

ゲヘナは陰に身を隠し、あたりの様子を伺う。ちょうど、ドレットノートの伏兵を、騎士団の戦士が魔術で一掃したところだった。

（俺を追ってきたわけではなさそうだな……。厄介な状況だ。それにしても、中央市街の真下でこんなドンパチやってて問題ねえのか？）

騎士団は本来、市民の安全を守る組織のはずだ。彼らがドレッドノートを掃討するのは道理だが、市民を巻き込んで本末転倒ではないか。

（なんにしても、面倒は避けたほうがよさそうだ。この隙に脱出もできそうだな）

だが、問題は騎士団の連中に見つからずに出口を見つけることだ。先ほどから湧くように騎士団の戦士をどうやってかわすか。

その時、ゲヘナが身を隠す壁が、一撃で吹き飛んだ。小爆発を思わせる衝撃に、ゲヘナは飛んで回避するが、その攻撃の主と目が合った。三メートルはあろうかという巨人が、そこにいた。肩に担いだ杭のようなハンマーは、常人では持ち上げることすらできそうも無いほど巨大で、それを軽々しく振り回している。

「むふ？」

「おや、？ これはこれは、とんだ幸運が舞い降りましたねえ」

巨人の影に立っていた、神官服の男がニヤニヤ笑いながら現れた。巨人の肩には三番、神官服には四番の文字が刻まれている。

（こいつら、あのときの羽野郎の上司か！？）

ラインハルトとの死闘を思い出し、思わず戦慄する。それまで、ゲヘナが感じることの無かった感情。恐怖を、この二人から感じた。

「ターロス。ここは任せましょう。どうせ、功績は作戦指揮の担当である私にはいるんですから。低脳は暴力だけを振るっていただく

さい」

神官服の男は背を向けて、別の道を進んだ。

残された巨漢と、ゲヘナは対峙する。

「ふん、ずいぶん舐められてんなあ。二人まとめてでもかまわないんだぜ？」

「どうせここで殺すことはできないんです。ああ、もちろん、行動不能にするくらいなら造作ありませんよ。ただ、私も忙しいのでね」

振り向いた神官服の男は、それを言い残して、去った。

「フガアッ！」

ターロスが、巨大なハンマーを振り回す。その大きさゆえに、狭い回廊では壁にぶつかること必死なのだが、壁を抉り取るように特に意に介さず攻撃を開始する。しかし、力任せに振られたハンマーは直線軌道で、ゲヘナが身をかめるだけで、回避することができず、

（低脳は暴力だけね……、こいつ、本当に力しか脳が無いのか？）
単調に繰り返される攻撃を、華麗にゲヘナは回避する。ターロスが苛立ち顔をゆがませ、文字通り憤怒の形相になるが、攻撃が当たらなければ怖くない。

「おら！ 歯ア食いしぼりやがれ！」

ゲヘナは両腕に真っ黒な魔力を発生させ、その形を剣に定着させる。その漆黒の剣を振りかぶり、ターロスの懐に飛び込む。突然の接近に、ターロスは一瞬ゲヘナを見失い、腹部での爆発を防ぐまもなく食らう。

ターロスの巨体が回廊ごと吹き飛ばしながら、転がる。

「ふん、どうやら図体ばかりだったようだな……ん？」

立ち込める埃の中に、巨大な影が浮かび上がる。目を凝らすまでも無く、ターロスの巨体が立ち上がる。呑気に腹をさすりながら、ハンマーを構えなおす。腹部は、傷一つついていない。

「……フガ？」

「不死身かよ、この野郎」

ゲヘナは思わず嘆息した。

「紅っ、しっかりしろ！」

紅は、いまだ床にうつぶせ、苦しみもだえている。時々、「熱い……」と虫が鳴くような声が聞こえるほかは、反応が無い。

「ちっ、おい、誰か！ この小娘を連れて行け。傷つけんなよ、人質なんだからな」

バルジが苦々しげに部下を呼びつけた。そして、おもむろにナイフを取り出し、シリウスに近づいてくる。

「何だ？ いまさら拷問でもするつもりか？」

「ちげえよ、ほら、さっさとズラかるぞ」

ガシャン。と、音がした。見れば、今までシリウスを硬く縛り付けていた鎖が解かれ、床に転がっている。

「おい、なにボサっとしてやがる、逃げるぞ。騎士団に見つかれば、てめえだってやばいだろ」

バルジは苦々しげにシリウスを睨みながら、出口へ向けて走り出した。

紅を担いだ部下は既に、部屋を脱出している。そうしている間にも、地響きのような振動が基地内を包む。戦いの音も近づいてきた。「娘はこっちの手の中にあるんだ。ついてくるしかねえだろ」

言われなくても、シリウスはバルジについていくしかなかった。

部屋を出ると、バルジは早足に基地の回廊を走る。道を暗記しているのか、複雑に入り組んだ特色のない回廊をすいすい抜ける。そ

の間、騎士団と遭遇することは無かった。

「おい、本当に逃げるつもりか？ この基地を捨てて」

この基地の中にはまだたくさんの部下が残っているはずだ。それに、騎士団と戦っているものもある。ドレッドノートは敵だが、見捨てられるのはあまりにも報われない。

「いんだよ、どうせもう使い道ねえんだ。サラマンダーのしっぽだよ」

バルジはドアを蹴破りながら言った。部屋の中に入り、駆け抜けようとした瞬間、一人の男が立ちふさがった。長身のシルエットに、白い神官服。ゆっくりこちらに近づいてくる彼は、バルジとシリウスを一瞥し、口を開いた。

「ドレッドノート首領、バルジ・オーファンは貴様か？」

「ああ、俺がそうだ。それで、騎士団様が何のようだ」

神官服の男、ティリオンはにやりと笑い、さらに近づいてくる。「貴様が溝鼠の頭か、くだらない。さっさと抹殺して、地獄のほうに取り掛かりたいものですねえ」

「ちっ、ナメてんじゃねえぞ！」

肩をすくめて余裕の嘲笑を浮かべるティリオンに、バルジが飛び掛る。バルジの手にはナイフが握られていて、それがティリオンの首元を狙う。

「甘い。その程度でボスは務まらないでしょう」

冷静に、ティリオンがささやく。彼は一步もその場を動かない。

そして、バルジのナイフが空中で固まっていた。

「なんだ……この魔術は？」

空中で静止したナイフは、腕ごと動かすことができず、バルジもそのまま硬直してしまふ。そんなバルジの首筋に、ティリオンが指先を添える。

「騎士団オリジナルの術式です。地下にもぐっている貴方には知ることができないでしょうねえ。このまま大人しく死ぬべきです」

ティリオンの指先の爪が、バルジの肌に突き刺さる。じんわり血

が流れ始めた。

「黙れ……俺はドレッドノートのボス、バルジだ。てめえなんぞに殺されたりはしない！」

その瞬間、バルジとティリオンの足元の地面がせり上がった。

『欲望ノママニ、神前ノ天使^{ウリエル}、罪人ヲ裁ク力、我ニ力ヲ貸セ』

バルジは素早くささやいた。すると、地面からせり上がってきた土が、生き物のように渦巻き、いったいの巨体な蛇の形を作り出す。その蛇が大口を開け、ティリオンを飲み込もうとする。

だが、ティリオンの体に触れる数センチのところで、土の蛇の牙が静止する。

「なるほど、以外にも魔術の嗜みがあるようですねえ。これは楽しめそうだ」

ティリオンが腕を振るうと、その方向にあわせて蛇の頭が吹き飛ぶ。

「俺だって伊達や酔狂でボスを名乗ってるわけじゃないさ」

第三十八話 交錯する戦線

ドレッドノートの本拠地である地下基地で、ターロスは周囲にお構いなしにハンマーを振り回していた。そのせいで、柱がはじけとび、あたりには土ぼこりが巻き上がっている。

その攻撃をかわしながら、ゲヘナは作戦を練っていた。

（こいつ、どてっばらに一発ぶち込んでもケロッとしてやる……おまけにこの体力は厄介だな）

単調な攻撃をリズムカルにかわしながら、ゲヘナはゆっくりと思考する。

（それでも、あの羽野郎と比べてたいしたこと無いな。馬鹿力だけで戦術もあったもんじゃない）

さつきから縦に振り下ろし、その後横に振るだけ。おそらくゲヘナでなくとも、ターロスの攻撃をかわすのは容易いのではないかと思うほど、単調な攻撃だった。それでも、ターロスは攻撃をやめない。

（隙を見つけて、もう一発ぶち込んでみるか……？）

その一瞬、ターロスの横薙ぎがゲヘナの頭上を通過した。もちろん、これまの攻撃をすべて回避していたのだが、この一撃だけはゲヘナが動くまでも無く、あたらなかった。

（なんか狙いが……！？）

ゲヘナが狙いに気づくと同時に、変化は起きた。

ゲヘナの体の自由が奪われ、押さえつけられたように動かなくなる。それだけでなく、体が宙に浮き、両足はそろえられ、両腕が横に広げられた。

まるで、十字架に張り付けられたかのように。

（こいつ、あのハンマーで十字を切ってやがったのか！？）

騎士団の魔術において、十字は特別な意味を持つ。それは、悪魔祓い、つまりゲヘナにダメージを与える特別な術式である。

そして、これまでの単調な攻撃は十字を切るという目的を隠すカモフラージュだった。確かにターロスの戦闘能力は高い。

（かつ、体がうごかねえ……!?!?）

見ただけでは、特に以上が無いが、縛られたように動くことができない。もはや、逃げ場が無い。

「ふぐっ、制裁の鉄槌を」

ターロスが不気味に笑う。

そして、その杭のようなハンマーをゲヘナの腹部に向けて振り落とした。

「ングッ!?!」

息が詰まり、叫び声さえ上げることができない衝撃がゲヘナを襲う。体ごと弾け飛び、気がつくとき壁にめり込んでいた。

（クソが……、痛え……）

幸い、ゲヘナ自身の魔力によってダメージを軽減したものの、焼けるような痛みが腹部を襲う。さらに、騎士団の術式により、腹部の肌が爛れたように変異している。

（まずい……何とかしねえと……）

時々、意識が飛びそうになりながらも、なんとか立ち上がる。

その眼前には、ターロスが迫ってきている。

（こっちの攻撃はぜんぜん効かねえのに、あいつのは効くなんて割りにあわねえぞ）

再び、ターロスがハンマーを振り回す。今度はもう、狙いを隠す必要が無いため、十字を狙ってきている。もう一度、捕まってしまう。ならばもうゲヘナは立ち上がることができなくなるかもしれない。

（なんとしても、あの十字を阻止する!）

ハンマー自体の破壊をするため、ゲヘナは再び腕に魔力を集中させ、漆黒の剣を作り出す。ハンマーの柄の部分を切り裂くように剣

を振るう。だが、ゲヘナの魔力が杭のようなハンマーに打ち消される。

（あの武器自体が対悪魔用なのか……！？）

攻撃に失敗し、隙だらけのゲヘナにターロスの蹴りが直撃する。しかし、蹴り自体は対悪魔の術式がないので、ゲヘナにダメージは無い。

しかし、武器を破壊することもできず、十字に捉えられてしまえば、その時点で負ける。その上、ターロス自身も強靱な肉体を持つ。（もう……こうなったら賭けるしかない）

ターロスが再び十字を切る。まず横薙ぎ。もはやゲヘナを狙ってすらない。だが、その攻撃をゲヘナに止める手立ては無い。次に縦に振り下ろす。これで十字が完成した。

ゲヘナの体が拘束される。宙に浮かび、十字に張り付けにされる。「フガア！」

ターロスが最後の一撃を繰り出す。最後の横薙ぎが周りの壁を破壊しながらゲヘナに激突する。ターロスによるとどめの一撃が決まった。

「ふが？」

だが、ターロスの眼前からゲヘナの姿が消えた。

探そうと首を回したとき、急に顔を追いつくようにゲヘナが張り付いた。どうやらハンマーの先端にくっついていたらしい。

「ガアアッ！」

振りほどこうとターロスはもがくが、ゲヘナは離れない。

「お返しだぜウスノロ野郎！」

ターロスの口にゲヘナの腕が突き刺さる。のどの奥まで突っ込まれた腕の先で、魔力が渦巻く。

「ーッ！ーッ！？」

息が詰まり、じたばた暴れるターロスに振り払われないように、ゲヘナは最後の一撃を放つ。

ターロスの体が風船のように膨れ上がり、そして、爆発した。

「ちっ、きったねえなァ……」

自分の体を見て、ゲヘナはうなだれる。ターロスの亡骸はもう目も当てられない状況だった。

（それにしても、やばかった……まあ、賭けは俺の価値だがな）

最後の一瞬、ゲヘナの読みはあたっていた。

ターロスは十字を切るに限らず、縦横順番にしか攻撃しない。つまり、あの最後の場面では、必ず横薙ぎが来ると予想した。そして、この狭い回廊では、ターロスの横薙ぎは大振りになるほど周りの壁を破壊し、逆に衝撃が和らいでしまう。そして、攻撃を受けた瞬間に十字の拘束は解ける、これもゲヘナの予想だったが、結果的に当たり、一瞬を耐え切れば、ハンマーにしがみつき、至近距離に近づいてやわらかい内臓部分を破壊すれば勝ちだ。

「だが……もう、ダメだ……」

最後の一瞬で力を使い果たしてしまった。ターロスの横薙ぎを耐え、爆発させるのに全魔力を消費してしまった。本来ならすぐ時間がたてば、無尽蔵に回復するが、腹部の傷がそれを阻んでいるようだ。治療に魔力がさかれてしまっている。

こうしているうちにも、騎士団の連中に見つかれば、また捕まってしまう。

「これで……仕舞いなのか？」

ゲヘナはたっていることができず、その場に倒れこんだ。視界がぐるぐる回り、闇がじわりと侵食してくる。まぶたが重い。目を瞑れば、意識がなくなってしまうようだ。

そんな状態のゲヘナに、近づいてくる足音が聞こえた。

もしも、騎士団なら、その場で捕らえられる。ドレッドノートでも、似たようなものだろう。

「まったく、貴方。無茶すぎよ」

ゲヘナの視界に入ってきたのは、巨大な人形兵を連れたアイリーンの姿だった。

「てめえ……」

「前にも言ったと思うけど、私は悪い人を見つけると放っておけないのよ。さあ、こんなところで寝てると捕まるわよ」

何事も無かったかのように手を差し伸べてくるアイリーンに、不信任を抱かずに入れなかった。

「何が目的なんだ？ 俺を助けてもろくなことになるぞ」

「そんなことないわ。私はこの国を救うために、貴方を助けるのよ」
初めて会ったときも、こんな状況だったと思いながら、ゲヘナはアイリーンの手をとった。

「これは……なかなか面白いですねえ。魔術師だったんですか」

ティリオンはバルジの土の蛇を相殺し、悠然と立ち続ける。

バルジの魔術によって、地下にある基地の部屋が歪み、壁の割れ目から土が覗いている。土系統の魔術を得意とするバルジには有利なフィールドだ。

「ホームグラウンドぐらい有利にさせてもらわねえとな。さて、大人しくズラかろうと思っていたんだが、そんなに殺されてえなら、いいぜ。やってやるよ」

バルジが指先をクイツつとまげ、ティリオンを挑発する。そんな様子を見無視するかのように、ティリオンはゆっくり歩みよる。

「たかだか、土系統の変化が使える程度で調子に乗られても困りますねえ。私の術式の前には、どんな攻撃も触れることができないんですから」

それを証明するかのようには、バルジが放つ、土の柱もティリオンの眼前、一定の距離まで近づくと急停止し、ティリオンの指先で軽くあしらわれる。

完全防御の術式が常に、彼の周りに発生していた。

「そして、これは人にも効き目がある。接近戦も無意味ですよ」

完全に主導権を握っているかのように、ティリオンは身構えもせず、バルジに近づく。対するバルジは、絶えず地属性の魔術で攻撃しながらも、距離をとって逃げるしかなかった。

「さて、そろそろ飽きてきましたし。終わりにしましょうか」

ティリオンが急進し、バルジとの距離を一気につめた。一定の距離に近づくと、動きを止められてしまう。バルジは飛びずさりながら逃げるが、ティリオンのほうが早い。

「クソッ、喰らえ！」

ティリオンの頭上、天井が巨人の拳が振り下ろされるように落下した。その真下にいるティリオンは当然押しつぶされるが、この巨大な一撃も受け止められる。

「でも、手ごたえはあるみてえだな」

ティリオンの動きが止まった。ここで初めて、ティリオンは受け止めるように腕を上突き出す格好になった。

「……っ、しかし、防御術式が破られたわけではありませんよ」

「それはどうかな、おい、ヴァーリス！ 後ろだ！」

バルジの掛け声とともに、シリウスが影から飛び出す。ティリオンの背後から飛び掛るシリウスに、ティリオンはこの時、初めて意識した。

「!？」

「遅せえよ」

シリウスの拳がティリオンの後頭部を殴りつける。長身の体は、あまり鍛えられていないのか、軽く吹き飛び、転がりながら床に倒れた。

しかし、ティリオンにはまだ意識がある。再び防御術式が発動すれば、もう不意打ちの一撃もできなくなる。

「じゃあな、地の底でもよろしくやれよ」

バルジは素早く小言でささやいた。

次の瞬間、ティリオンの倒れていた地面が割れた。大きさにして、人間が数人は飲み込まれるような地割れに、シリウスは飲み込まれないように飛びずさりながら、落ちてゆくティリオンを見た。哀れにも、先ほどまでの余裕が失せ、恐怖に震えていた。

ティリオンの姿が闇に消え、扉を閉めるように、大地が押し寄せる。地割れは元に戻り、一人の人間が飲み込まれた。地面の下では、彼の完全防御術式も意味を成さないだろう。

「ハッ、その程度で調子に乗りやがって」

ティリオンの言葉をそのまま返し、シリウスと目が合う。

「フン、不本意とはいえ、共闘することになるとはな」

シリウスにとっても、騎士団はなるべく避けて通りたい相手だ。

「これを機に、もっと協力的になってもらいたいね」

バルジが悪戯っぽく笑う。

確かに、気に入らない相手だ。紅にした事も忘れることができないし、王都に対する意見も違う。しかし、今だけはともに行動をするしかなかった。

その時、バルジの後頭部に銃口が当てられた。

「see you, my BOSS」

銃口から悲鳴が鳴り響き、バルジの頭が不自然に前方に傾いた。次の瞬間には、彼の頭からは鮮血が噴出し、あたりに血だまりを

作り、ピクリとも動かなくなった。

「……おい、……」

シリウスはあまりの展開に、言葉を失った。
本来は敵同士だ。喜ぶとも違うが、シリウスが気に病む必要もない。

しかし、あまりにも、‘あんまり’だった。

「ダルク・ハット、お前は何者なんだ……？」

銃口を上げ、魔導銃を肩にかけて、不敵に微笑む男。
ダルク・ハットはシリウスに言った。

「助けに来たぜ。王子様」

第三十八話 交錯する戦線（後書き）

執筆中、「血だまり」と変換しようとして、「千田マリ」と出ました。
誰エ……

第三十九話 再結集の時

地面に横たわるバルジの亡骸を踏みつけて、ダルク・ハットはシリウスに手を差し伸べた。

その表情からは何も読み取れない。ただ、ハンサムな薄笑いを浮かべている。

「お前は何者だ。どちらの味方をしている？」

シリウスはこの得体の知れない男の手をとることができなかった。先ほどはシリウスを裏切り、ドレッドノートに与した。しかし、今はその間逆でドレッドノートのボスであるバルジを躊躇無く殺した。

「俺は、まあ簡単に言うると二重スパイってところか。本来は王都直属の部隊に所属しているんだが、バルジ暗殺の任務のためにドレッドノートのもぐりこんだわけだ」

シリウスが手をとらないので、差し出した手で頭をぽりぽりかきながら、その正体を明かした。

「じゃあなぜ、俺を助けなかった？ 裏切る必要は無かったはずだ」
バルジに近づくことができれば、暗殺は可能だろう。あの局面でシリウスを再び拘束する必要は無かった。

「そう簡単にいけばいいんだけどね。お前も見ただろう？ バルジを名乗るものは一人じゃない」

シリウスは、あの時ダルクと話していた老人のバルジを思い出した。さらに、シリウスは見たことが無いが、ゲヘナと接触した者も、バルジを名乗っていた。

「影武者というか、ダミーなんだよ。しかも、基本的にその存在は明かされていない。つまり、下っ端の部下はバルジが複数人いることを知らないのさ。そして、バルジたちの中で、実際に組織のボスは一人だけ」

それがこのバルジ。ド派手な格好と、常軌を逸した言動のこの男

だった。

見た目から言えば、あまりボスにはふさわしくないこの男こそが、本当のバルジだった。

「こいつをボスと断定するには、お前との接触が必要だった。つまり、作戦の要になるお前と直談判するのは、ダミーではなく本物とする確立が高い。それから土系の魔術師だったこともあるな。この地下基地の建造に魔術は必須といってもいい」

王都の間近の土地に、大規模な地下基地を作ろうとして多くの人が行きかえば、それだけで存在がばれてしまう。あの魔術はそこでも役に立ったわけだ。

「そうか……じゃあ俺の顔を知っているみたいなのを言ったのも」「王都であつたことがある。まあお前は覚えていないだろうがな。」

それにしても、騎士団の連中が殴りこんでくるなんて知らなかったぜ。結局俺が出張する必要も無かった気がするが……」

「でも、よかった。お前が裏切ったのかと思ったけど、そういうわけじゃなかったんだな」

シリウスは安堵してダルクの手をとろうとしたが、ダルクはよけるように手を引っ込めた。

「あんまり俺を信用するなよ？俺はただドレッドノート側が劣勢になったから王都側に着いただけかもしれない。必要となれば、またお前を裏切るかもしれないぜ？」

含みを持たせて、ダルクは笑いかけた。

「それでもかまわないさ。それまでの仲間ってことだ」

シリウスも口ではそういつつも、ダルクの手をしっかりと握った。

「さて、そうも言ってられない状況だ。騎士団に見つかるのは厄介だぞ」

ダルクは辺りをうかがいながら言った。

「待て、まだ紅が捕まったままだ、しかも変な薬を打たれて危険な状態だ、早く助けないと」

「まあまあ、落ち着け。そっちはもう任せてある」

紅の視界は逆さまで揺れていた。ドレッドノートの部下に担がれて運ばれているからなのだが、バルジの毒薬におかされた彼女の感覚は、上下が分からずぐるぐる回っているかのようだった。

（熱い……火がついてるみたい……）

炎系の魔術を扱う紅だが、今は自分自身が燃えているかのような感覚だった。紅を担ぐ男にもその熱は伝わっていた。

基地内では騎士団の部隊とドレッドノートが交戦中で、戦地を避けるように進んでゆく。途中で仲間の死体をまたぎながら、敵をかわして迷路のような基地内を抜ける。

「止まれ」

紅を運ぶ部下の前に、黒いバンダナで顔を隠した男が立ちふさがった。見知らぬ顔で、おそらくドレッドノートの人間ではない。部下は歯噛みし、引き返そうとする。

だが、バンダナの男が動いた。どこに隠していたのか、瘦身の槍を取り出し、一閃する。不覚にも、男に背を向けてしまった部下のひざ裏が真っ二つに割れ、その場に倒れこむ。

床に投げ出された紅は、仰向けになり、バンダナの男の顔を見ようとす。スルスルと解けて現れたのは、見知った顔だった。褐色の肌に、アッシュブロンドの髪、少し幼い顔立ちの青年。

「助けに来た。紅さん」

イースは紅の身を起こし、肩で支えながら歩き出した。

「大司教、三番と四番が死亡しました」

真っ白な大理石に覆われ、鮮やかなステンドグラスから差し込む日差しに照らされた大聖堂。その中心部にある円状の座席には、現在中心に座る大司教以外には、九番に座る男、カースしかない。

「御苦勞、カース。もうよい」

沈痛そうな面持ちで、大司教は頷き、深い皺をより一層刻み込んだ。肘掛に頬杖をついて、考え込む。

（悪魔の力、想像以上だ。むしろ、二十年前よりも増している……。一刻も早く、奴を捕捉しなくては間に合わないではないか。終戦二十周年式典に）

大司教が目を見ると、カースは既に霧散していた。特に驚く事柄でもないが、独りになるとこの大聖堂もより広く感じる。

その大聖堂に、足音が響いた。

騎士団長、十三番の男、アルタイルが白いマントを旗めかし、大司教に歩み寄る。

「大司教、天罰神が完成いたしました。どうぞ、次の指示を」

アルタイルが頭を下げ、傳きながら報告をする。それに頷きながら大司教は重い腰を上げた。

「……悪魔を、騎士団総力を挙げて捕獲する。騎士団長アルタイル。お前には作戦の指揮を命ずる」

重苦しく告げた言葉に、アルタイルは深く頷いた。

第四十話 動き出す運命の齒車

シリウスはダルクに導かれ、ドレッドノート地下基地を脱出した。地上に出てみれば、空は既に明るくなり始め、騒ぎを聞きつけた人々が野次馬のように群がっている。自警団もドレッドノートの一部だったため、街の收拾をつけるものがないようだ。騎士団の姿も見えず、どうやら退散したように見える。

「騎士団の奴ら、もう引き上げたのか？ 嫌にあっさりしてるが、まあそのほうが都合か」

ダルクはつぶやきながら、シリウスを先導する。

人ごみを避けながら、街の静かなほうへ向かう。

「待ち合わせ場所で合流したら、すぐに街を出るぞ。この街はもう用は無い」

「おい、それよりも紅は大丈夫なんだろうな」

シリウスは、あの毒に犯された紅のことが心配でならなかった。今でも、あの時自分がもっと強かったらと、後悔が募る。

「バルジの毒薬がどういいうものかはよくわからない。とにかく様子を見ないことには……」

二人は待ち合わせ場所である、裏路地の一部にたどり着いた。一見分かりにくそうだが、ダルク達だけに分かる目印があった。

「あつ、無事だったんですね！」

心配そうな面持ちで、マナが待っていた。

地上に一人取り残された彼女はとても心配で心細かっただろう。

泣きそうになりながら喜んでいる。

「マナ、無事だったか？」

「ええ、おねえちゃんが助けてくれたんです」

「おねえちゃん？」

シリウスは首をひねって辺りを見るが、それらしき人影はいない。「もういつてしまったんです。大事な用があるからって。それでこ

こで待ってたらみんなが迎えに来るからって」

「まあそういうことだ。マナちゃんの姉さんも、俺と同じ組織に属してる」

ダルクがしたり顔で言った。

「そうなんですか！？　じゃあお知り合いだったんですね」

マナに、ダルクはあらかじめの事情を説明し、これからの予定について告げた。

「ドレッドノートの方はもう片がついたが、どうも王都での騎士団の動きが怪しい。それから、古都ノーティスの悪魔が動き始めるらしい」

「悪魔？」

「ああ、知ってるだろ。二十年前の大戦の。奴を終戦二十周年の記念式典の裏で処刑する計画があったんだが、輸送中に脱走。目下捜索中ってとこだ」

「まずいだろ、それ。復讐に王都を襲うかもしれないだろ！」

「だからこっちでも手はうってある。上手くいく保障はないけどな」
複雑そうな顔でダルクは言い、路地裏に足音が響いた。

音のほうを振り向いてみれば、紅を背負ったイースがゆっくり歩いてきていた。

「紅ッ！」

シリウスが急いで駆け寄り、紅の様子を確かめる。依然として顔は赤く、熱そうにうなされている。状態が悪化したわけでも、よくなったわけでもない。

「イースご苦労だった。それで、紅ちゃんの様子はどうか？」

「ダメだ、意識はあるが、とてもしゃべれる状況じゃない。何とかしないと……」

しかし、この中で魔術に関して知識のあるものはいない。まして、原因不明のバルジの毒薬となると、手の施しようが無い。

「仕方ない、少し王都からはそれるが、寄り道だ。クロスフォード学院に寄るぞ。あそこの学院長なら何とかなるかもしれない」

クロスフォード学院は、この大陸唯一の魔術師養成所で、教授として多様な知識を持つ賢者も多い。場所は確かに、王都へ向かう道から少し東にそれてしまいが、大きくそれるわけでもない。

「とにかく紅を助けるのが先だ。行くぞ、クロスフォード学院に」シリウスは燃えるように熱い紅を背負って、歩き始めた。その後ろに、ダルク、イース、マナは続く。

中央市街の端にある乗車場から馬車を借り、クロスフォード学院に一番近い村まで馬車に乗って移動する。がたがた揺れる車内で、紅は苦しそうにする息遣いだけが聞こえた。

「なあ、シリウス。一つ聞いていいか？」

沈黙を破るようにダルクが切り出した。

「なんだ？」

「お前は王都での事件の後、監獄島に収容されたが、どうやってそこから抜け出した？」

「……いや、違うんだ。俺は監獄島に入れられてない」

シリウスは自嘲気味に笑った。

「情報操作ってやつか……」

その答えにダルクは悔しそうに歯噛みする。

「まあそんなところだろうな。当時の俺もよくわからなかったが、バルジの話を聞いて理解したぜ。脱獄を防ぐために、あえて監獄島に収容したという嘘を言った」

監獄島は、陸から隔絶された浮き島で、火山をそのまま利用した監獄施設がある。難攻不落、脱出不可能といわれる監獄島だが、脱獄する方法はある。それは外部からの手引き。そして、シリウスの場合は反王都勢力に脱獄を無理やり行われる危険性があつた。

「だから俺は名前も知らないような片田舎の村の、それも山賊や野生生物がうろつく山奥で監禁されていた」

普通、そんな危険で無意味な場所に入り込む人はいない。地元民

でも立ち入らない場所に、閉じ込められていた。そんな場所に、王都の王子が閉じ込められているとは思わない。

「だが、そんな場所にも、ふらふら現れた変わり者がいた」

ダルクとシリウス、そして黙って話を聞いていたマナとイースも、そろって紅を見た。苦しそうに息をしながら横たわっている彼女。

「俺達はもしかしたら、紅ちゃんに引き寄せられたのかもな……なんてな」

ダルクは冗談めかして言ったが、実際、紅がいなければ、シリウスは未だ暗い洞窟の奥にいて、ダルクとイースはバルジを暴くことができず、マナはドレッドノートに追い掛け回されていた。

「なんとしても、紅を救う。絶対だ」

「ああ、もちろんだぜ。ただ、一つ……いや、もう一つってどこか聞きたいことがある」

真剣な表情のダルクに、シリウスは身構える。

「紅ちゃんの正体は何者だ？　なぜあんなに魔術が使える？」

「それは……」

実のところ、本人にも分からない。なぜ、あれほどまでに理論を無視して魔術を使うことができるのか。そして、異世界という存在。「わからない。ただ、魔術については、クロスフォード学院で何か分かるかもしれない。そして……」

王都へつけば、異世界の事も分かるかもしれない。そして、異世界へ帰る方法も。

紅が異世界へ帰ってしまったら、

(そんな事は今考える事じゃない)

シリウスは首を振り、しっかりと現実を見据える。

シリウスは王都へ残してきた妹のために、紅は異世界へ変えるために、ダルクは王都を守るために。それぞれの思いを乗せて、馬車は走り続ける。

中央市街から離れた所に位置する旅人用の宿泊施設、『白風』。老朽化の進む建物には、しかし頑丈に作られていて、いまだに現役で旅人を休ませていた。

その二階の一室に、ゲヘナとアイリーンは身を潜めていた。窓から覗く、新緑の平原と青空を一瞥し、その広大な地平線の先にうつすらと見える王都の影を視界の端に捉えた。部屋に向きなおし、シンプルな構造の一室の、中心におかれたシングルベッドに座るアイリーンを見た。

「それで、聞かせてもらおうか。どうして俺にかまうのか」

ゲヘナは完治した腹部の傷をなぞりながら、アイリーンに訪ねる。「ふふっ、もう何度もいったと思うけど。王都を救うためよ」

復讐の悪魔と化したゲヘナを助けては、逆に王都を危険にさらしているのではないか。ゲヘナはずっとそう言い返してきた。

「よく考えてみて。貴方は過去に大戦で猛威を振るったわ。けどね、それは惨殺をしたかったわけじゃない。国を守るためでしょ？ 国民のみんなを守るために立ち上がった王子でしょ？ 結果は確かに失敗かもしれないけど、それでもみんなを守る気持ちは変わらないはずよ」

「何が言いたい」

「貴方は、罪無き人は殺せない。騎士団の連中と幾度と無く衝突しているけれど、一般市民は殺していないわ」

ゲヘナは自分自身の言動を思い返し、鼻で笑った。

「だからなんだ。俺は人殺しに変わりないし、お前ら王都市民が俺を見る目もそれと同じだ。今更……」

「違うわ。貴方は変わるのよ。これから」

「何に変わるんだ？」

「王都を守るヒーローにね。貴方は正義感の強い人間だったはずよ。」

今、王都には危機が忍び寄っているように感じるわ。貴方はそれを取り払い、王都を守るのよ。罪なき市民を守るためにね」

第四十一話 三本の塔の学院

海に面した広大な丘陵地に白い塔が三本生えたように突き出して
いるのが見えた。塔の周りを囲うように塀が建てられ、宿舎のよう
な平べったい建物が綺麗に並んでいた。建物はすべて乳白色と水色
で彩られていて、歴史ある建物なのに古臭さがなかった。豪勢な正
面門の前に、シリウス達はやってきた。

「ここがクロスフォード学院か」

塔を見上げながらシリウスはつぶやいた。王都で育った彼だが、
街の外はあまり見た事がなく話で聞いただけの知識しかもっていな
かった。実際に見てみたクロスフォード学院の塔は、雲がかかるの
ではないかと思うほど巨大だった。

「大戦時にも、魔術師は兵器ではない、の一点張りで徴兵に応じな
かったらしい。衛生係や医療係として王都内を中心に活動したらし
いな。それほどに堅物の集まりみたいだが……こっちには病人がい
るんだ。門前払いってことはねえだろ」

ダルクは門の前をうろうろしながら言った。

シリウスは背中であれい息をしている紅の様子を確かめてから、門
を開けようとした。

「ん？ どうやって入るんだ？」

門は鍵が閉まっているのか、押しても引いてもビクともしない。

かといって、門番の姿も見えない。

ここまで来て、入れないなんて事は避けたい。

「どうやら……人が来たみたいだよ」

イスが指差す方向に、広大な敷地の先から、舗装された道を通
って学院の人間が門にやってきた。門越しに、シリウス達を一瞥し、
「何か御用でしょうか」と硬い口調で言った。

まだ若い女性だが、鍛錬を積んできたのか物腰は落ち着いていて、
タイトなスーツに細身のメガネはいかにも教師を思わせた。

「病人がいるんだ。普通の病気じゃない、毒薬を打たれて……その、解毒とか回復とかをお願いしたいんです。普通の毒薬じゃなくて……」

焦りでシリウスがたどたどしく説明するが、スーツの女性は真摯に受け止めてくれたのか、指で門を一撫でし、ガチャリと鍵を開けた。

「医務室へ案内いたします。どうぞ、こちらへ」

女性に導かれ、シリウス達は学院の敷地をまたいだ。

シリウスが導かれたのは、大きくそびえる三本の塔の内の一番太い所で、医務施設などの生活のサポートが中心の塔のようだ。塔内부는、それ自体が大きな螺旋階段のように、緩やかなカーブを描いて上部につながっていた。内装も綺麗にタイル舗装された床や、廊下にたくさん並ぶ窓からの日差しで明るく清潔な印象だ。

ちらほら、生徒だろうか、制服を着た十代の子供を見かけた。みんなシリウス達を見てもあまり反応を示さない。こういう来客には慣れているようだ。

「それにしても若いですねえ。新人教師ですか？」

ダルクは状況にお構いなしに、先導する女性に声をかけていた。

「ええ、今年度から教師になりました。セシアと申します」

セシアはそんなダルクに、女性としての警戒心を見せながら、一定の距離を保って前を歩いていた。

「こんなに美しい先生に教えてもらったら、授業内容なんて全然頭に入らなさそうですね。ハハッ」

「ハハッ、じゃねえよ……」

シリウスは緊張感のないダルクに、頭を抱えた。

「こちらが医務室になります。それでは私は学院長に話を通しておきますので」

そういうと、逃げるように小走りで立ち去ってしまった。

「相当嫌がられてるぞ」

呆れた視線で、ダルクを見ながらシリウスが言うと、「いや、あれは照れ隠しだな」なんて寝言を言っていた。おそろくずっと隠されたままなのだろう。

「君たちが病人連れの人たち？」

医務室から、丸メガネの線の細い男性が顔を出した。

「あっ、はい」

「どれ、診せてくれるかい？」

シリウスは背負った紅を医務室の中にあるベッドへ下ろした。丸メガネの男性は紅の顔色を調べた後、おもむろに一メートルぐらいのクネクネ曲がった杖を取り出した。

早口に何かつぶやくと、杖は独りでに宙に浮き始め、クルクルと旋回を始めた。それがセンサーのように紅の体の上をゆっくりと飛ぶ。

「見た感じでは、もう一段落ついた感じだね。でも何の病気かは検査の結果によるだろうね」

男性は、シリウス達の事情や、素性を探ろうとせずに、診療に専念してくれた。それがなんだか慣れた様子なので、シリウスは思わず聞いてしまった。

「よくあるんですか？　こういう駆け込みみたいなのは」

「あはは。まあね。大陸唯一の魔術学院だからね、魔術で解決してくれて依頼はよく寄せられるんだよ。まあ、病気はまだいい方さ。もつとくだらない事や、不可能なくらい大袈裟なことを依頼しに来る人もいる。こっちはなんでも屋じゃないのにな」

苦笑する男性を見ると、なんだか申し訳なくなってきた。

「すいません、勝手に押しかけて……」

「なあに、気にする事じゃないよ。それより、毒薬がどうこう言っ

てみたいだけど」

門でセシアに言っただけのことはずだ。シリウスが首をひねっている、男性は「門でのやり取りはここでも聞けるんだよ」と、診療机の上にあるスピーカーのようなものを指差して付け足した。

「はい、それは結構複雑な問題になるんですけど……」

「あつ、いや。言いたくないならいいんだ。病人を治すのが僕の仕事だからね。僕はマーティン。見てのとおり医者だ」

気さくに笑いながらマーティンは言った。

「検査にはまだ時間があるから適当に見学してみたらどうだい？
基本的に部外者にも出入りは歓迎してるはずだから」

硬く閉ざされていた門を思い出して、曖昧に笑いながら、シリウスはみんなを連れて病室を出た。とりあえず、紅は大丈夫みたいだ。そう思うと急に安堵が広がって、腰が抜けそうになる。

「とりあえず、見学させてもらおうか？」

クロスフォード学院の内部は新鮮なものばかりで、見て回るだけでも楽しそうだ。

マナが目をキラキラ光らせながら、「じゃあ魔道図書館が見てみたいですよっ！」と手を挙げて意見した。

「自由に見てくるといいさ。こんなかじゃ安全だろ。なんならイスに着いていってもらおうか？」

ダルクは微笑ましくマナを眺めた後、「じゃあイスさん、行きましょう！」と駆け出して行ってしまった。

「さて、男二人でこれからどこデートする？」

「気持ち悪いな、あんまり近寄るな」

じゃれあうように腕を組もうとするダルクを、シリウスが押しのける。

言い合う二人の前に、いつの間にかセシアが戻ってきていた。

それに気づいた二人は沈黙して彼女を見る。

「……不潔」

ボソリとつぶやいた言葉に、二人の心は大怪我だった。

「学院長が話しがあるそうです。院長室までお越してください」

先ほどよりも露骨に距離をとりながら、セシアは二人を導く。その間、会話はなかった。

学院長室はてっきり最上部にあるのかと思ったが、どうやら向かって下のは下のほうだった。

「こちらの部屋から上部に転移します。どうぞ、お入りください」

一見するとただの物置にしか見えない。だが、セシアが素早く囁くと扉は独りでに閉まり、部屋の中の物が青白く光り始める。魔力が通っているようだ。どうやら目では見えないように施された魔方阵があるらしい。

シリウスは部屋ごと上昇するような浮遊感に、少し気分を悪くしながら壁にもたれた。

「それで、どうして学院長自ら話を？」

「それはあってみればわかると思います。実を言うと私は詳細を聞いていません」

こともなさに言うセシアは、実はただ関わり合いになりたくないのではとシリウスは思ったが、言わない事にした。

「いい心がけだ。無知なのは無実だ。本人の意図に関係無くな」

ダルクは含みを持って言ったが、それは彼の職業柄付きまとう問題なのだろう。

そうしているうちに、物置は最上階に着いたらしく、扉が開かれた。

物置から出ると、まず日差しが彼らを照らした。雲にかかりそうなほど巨大な塔の最上階からは中央平原を見下ろす絶景と、遮るもののない強い日差しが照りつけていた。

「ようこそおいでくださいました。わしがクロスフォード学院、学院長。グラン・マギオンでございます」

白髪の背の高い老人が二人を出迎えた。

グラン・マギオンはもう年齢も分らないほど老けていたが、弱しきは微塵も感じられず、むしろ卓越した仙人のような雰囲気をもし出していた。白いひげをもてあそびながら、ローブの裾を引きずって歩み寄り、握手を交わした。

学院長室の上質なソファに並んで腰掛けたシリウスとダルクは身構えながら、学院長の話を待つ。二人の前に紅茶と菓子を並べたセシアはそそくさと退散した。

「それで、お話というのは？」

「ふむ。落ち着いて聞いて欲しい。そして、わしには敵意が無い事も理解して欲しい。シリウス・グランジ氏、ダルク・ハット氏」

「おやおや、もう名前もご存知でしたか」

学院長は感情の読めない表情で頷いた。

「それだけではない。王都第三十六代王子、ヴァーリス・ミッシェル。父親クロードを殺害し、監獄島に収容された王都の黒歴史の一端。そして王都直属諜報部隊グリフォン・クローの一員であり、ドレッドノートにも加盟していた過去を持つ男」

感情の籠らない声で学院長は言った。

咄嗟に立ち上がるうとしたシリウスをダルクは片手で制止し、静かに紅茶のカップを傾けた。

「概ね正解ってどこか。それで、話ってのは？」

ダルクはあまり驚いていないようだが、シリウスとしては本名や過去の経歴まで知られてる相手が多い事に愕然としていた。

「王都で不穏な動きがあつての。学院から南部に広がるアルフ森林で魔術兵器の実験が行われているようじゃ」

「ほう……。王都の動向は俺の組織でも追っているが、魔術兵器か……。でも何でその話を俺達に？」

ダルクの組織に報告するのは分かるが、最近まで別任務に当たっ

ていたダルクを呼び出すより、王都に使いを出すほうが道理だ。それに、シリウスも同席する意味もない。

「実験現場で、少女が目撃されているようじゃ……。その少女の情報はまだ少ない。じゃが、ちょうど実験が開始される直前に姿を消した少女がおる」

「……それは誰なんですか？」

シリウスは手のひらに嫌な汗がにじむのを感じた。動悸が早くなり、意味も分からず緊張する。できる事ならば、話しの続きを聞きたくない。

「エリオーネ・ミッシェル。君の妹君じゃ」

シリウスが一人、王都に残してきた少女。今も、一人ぼっちで城に住んでいるはずの彼女が、姿を消した。

「そして、実験現場で目撃された少女と酷似しておる。これはシリウス、いや、ヴァーリス王子に関係する話じゃ」

第四十一話 三本の塔の学院（後書き）

執筆中、ドレッドノートがドレッドニートになってました。『の』と『に』って打ち間違いやすいですね。

あとWEB拍手ボタンを設置しました。どう見てもボタンに見えませんが、好きなだけ連打してくれると嬉しいです！

第四十二話 隠された王都の真実

「そこで、君たちには調査の依頼とともに、こちらからも協力をしたいと思っている」

学院長は指を組み合わせ、その上に顎を乗せ、鋭い眼差しで二人を見た。

「待ってくれ。俺達二人に関係している話だったのはわかった。だが、そこで俺達が動き、あんた達が協力するってのはどうしてだ？」
王都で魔術兵器の開発が秘密裏に行われている。ダルクもその事を知らなかったが、かまわず続けた。

「戦争でもするつもりなら、この学院だって危ないんだぜ？」

王都の近くに位置し、中立を保ってきたクロスフォード学院だが、王都がもし、武力で勢力を伸ばそうとするならば、一番邪魔なのはこの学院だ。

（でもまあ……今王都が戦争をするメリットがあるようには思えない。古都ノーティスを打ち破った時点で敵対勢力は消滅、ドレツドノートも潰した。東部の半島にはワイルクレセント王国があるが、今は王都と友好的だ。だって広いだけで、特に兵力があるわけでもない穏やかな国。それでも国土を広げるために侵略するのか……？）
ダルクは心中で考えを巡らせる。

「もちろん、学院の安全と存続を何よりも考えておる。じゃが、事態はあまり容易ではないようじゃ。王都で魔術兵器の開発が行われていると言っても、その中心で活動しているのは騎士団じゃ」

「つまり、王都の人間は何も知らずに、裏で騎士団だけがコソコソ動き回っているってことか」

ダルクもその事は既に知っていた。事実、王都諜報機関も、騎士団の動向を探る目的もある王都独自の機関で、騎士団側は存在を知らされていない。

「そうじゃ。そこが厄介なのじゃ。もし騎士団を探ろうと諜報員を派遣したとして、王都の人間に見つかれば、王都と敵対していると思われかねん」

王都を隠れ蓑に、騎士団が動いている事になる。そして、王都は何も知らないため、学院側が不穏な動きをしていると誤解されてしまう。

「それで、フリーに動ける俺達と協力して、事態を探ろうってか。確かに、ここに居る全員の目的と一致してるな」

王都の平和を守る。学院の安全を守る。そして。

「お前はどうかんだ？ シリウス」

先ほどから一言も発しなかったシリウスは、じっと拳の辺りを睨んでいた。

「俺は……」

シリウスは呆然としたように、言葉を詰まらせた。

自身の妹が兵器の開発に利用されている可能性がある、しかし、彼女を助けるためには、今度の敵は騎士団という事になる。しかも、王都だって絡んでる可能性もまだ十分にある。そんな不確かな状況で、どう動けばいいのか。彼にはわからなかった。

「まあいい。シリウスが動かなくても、俺一人でも動く。そこは約束できるぜ。学院長さん」

ダルクはそう言い残すと、一人席を立ち、学院長室から出て行った。取り残されたシリウスはゆっくりと顔を上げた。

「すいません、まだ、よくわかりません。時間をください」

「かまわんよ。急な申し出だ、焦る事はない。ただ、冷静に考えてくれ。君の一番大事なものを」

学院長はそれきり、背を向けて話をやめた。シリウスもダルクに続き、部屋を出た。

本当は、シリウスにもどうすればいいのかは分かっていた。少な

くとも、妹であるエリオーネを助けるためには、王都へ行き真相を確かめるしかない。しかし、それには故郷である王都を敵に回すことになる。既に殺人者として王都から追放された身であるが、今度は敵対である。

シリウスは無意識的に、紅の居る病室へと向かっていた。病室に入ると、マグカップを片手にマーティンがカルテを見ていた。

「何か分かったのか？」

マーティンはカルテから顔を上げて、カップを傾けた。

「ああ、安心していいよ。この子は回復しつつある」

バルジの原因不明の毒薬を飲まされ、その解毒薬も効かなかったが、どうやら無事みたいだ。シリウスはそっと胸を撫で下ろした。

「それにしても不思議だねえ。この子の中には特殊な魔術抗体があるみたいだ」

「魔術抗体？」

「うん、なんていえばいいのかまだ分からないけど。害のある毒物なんかを片っ端から跳ね除けるみたいな感じだね。妙に熱っぽいのはその副作用かな。たぶん解毒薬も抗体に跳ね返されたんだね」

紅は異世界から来た人間だ。少なくとも本人はそう言っている。もしかしたらシリウス達の知らないところで、体の構造が違っているのかもしれない。

（魔術が使えるのも、そこらへんと関係があるのか……？）

「ともかく、このまま安静にしていれば、問題ないよ」

マーティンに礼を言って、シリウスは病室を後にした。

「もうちょっと右です。あ、行き過ぎです。もうちょっと左です」

クロスフォード学院の魔道図書館は、大陸内で最も多くの魔道書

が保管されており、図書館は巨大なドーム上の大部屋だった。本棚も一つ一つが壁のように高くそびえ、それが迷路のように並んでいる。

マナとイースは二人とも小柄なため、肩車しても上のほうの魔道書に手が届かないようだ。もはや肩車ではなく、イースの肩の上にマナが足を乗せ、梯子のようになって、ようやく届くか届かないかぐらいである。

「あつ、シリウスさん。紅さんは目覚めましたか？ ……きゃあつ」
マナがシリウスが入ってきたのに気がつき、振り向いた途端、バランスを崩し、落下してしまった。背中から床に落ちる瞬間、ふわりと風が吹き、クッションのように衝撃を和らげた。

「あれ……痛くないです」

「ごめん、大丈夫？」

イースが手を差し伸べてマナを助け起こした。

「あなた達は確か……来客の方達でしたね」

見れば、杖を構えたセシアが歩み寄ってきた。どうやら風の魔術を使ったのは彼女のようだ。

「はい、ここの魔道書はどれも内容が凄くて楽しいです！」

「あなたも魔術を学んでいるのかしら？」

ダルクには絶対に見せないであろう微笑を浮かべながら、マナに話しかける。

「いえ、私は魔術は使えないんですけど、呪文とか占いとかなら……」

「へえ、占いは珍しいわね。タロットカード？」

「ハイ！ それもあるんですけど、水晶玉もあって……」

二人の魔術トークについていけないシリウスとイースは、本棚の壁から離れ、読書スペースのテーブルに移動した。そこで、シリウスはイースに学院長室での会話を伝えた。

「……。俺はダルクと行動を共にする。もちろん、シリウスとも協

力したいと思う」

イースはいつもの仏頂面で言った。

そんなイースを見ると、シリウスは彼の目的が気になってきた。

「お前も、ダルクと同じ組織の人間なのか？」

「正式には違う。協力者としての立場だ。とはいっても、多くの制約があつて半分以上は組織に入つてゐるようなものだ」

王都直属の諜報部隊。ダルクは王都を守るためだといつていたが、状況によってはドレッドノートに寝返つていたかもしれないような事も匂わせていた。

「お前は何のために戦つてゐるんだ？」

「俺は……」

一瞬、そこで言葉を切り、何かを考えた。

だがその逡巡も終え、顔を上げてシリウスと向き合つた。

「俺は、古都ノーティスの生き残りだ。俺は、あの大戦の真実を探している」

古都ノーティスは二十年前の大戦時、終戦と同時に立ち入り禁止にされ、今も手付かずの荒野が広がっている。ノーティス人はすべて、王都の領土に入ることを拒み、今も僻地でひっそりと暮らしていると伝わっている。

「お前、ノーティス人だったのか。まあ、だからどう言うわけじゃないが、それにしても生き残りつて……確かに今ノーティスはひどい状況だが」

「違う。酷いどころじゃない。滅亡したんだ。一人残らず、ノーティス人は虐殺された」

「嘘だ、王都は終戦後に相互不干渉規定を結んで、永久に関わらない事を決めた。それはノーティス側も望んだ事だ。虐殺なんて……」

大戦はもはや歴史的にも重大な事件で、それは今を生きる人なら誰でも知っている事実だ。まして王都で次期国王が見えていたシリウスには、痛いぐらいに理解している事だ。

「情報操作、王都の得意技じゃないか」

かつて、シリウスの投獄も情報操作された。

そして、大戦も。

「それじゃあ……」

「王都の裏には影が潜んでいる。そして、その影を暴く事が、王都の平和につながると思っている。もちろん、シリウスを責めているわけじゃない」

この二十年、ノーティスの人々の事を知らずに生きていた王都民。その中でイースは何を思っていたのだろう。

魔道図書館の中では、まだマナとセシアが魔術雑談に花を咲かせていた。そこに割り込むようにしてシリウスがセシアに話を切り出す。

「あの、すいません。ちょっといいですか？」

若干、顔を引きつらせたが、コクと頷き、「ちょっと失礼しますね」とマナに断って場所を移した。シリウスは改まってセシアをお願いする。

「俺に、魔術を教えてください」

「それは、この学園の生徒になりたいってことかしら？」

「いいや、そんな時間は無いんです。一刻も早く、強くなりたいんです」

シリウスが熱意をこめて訴えるが、その反面セシアは冷めた態度をとった。

「通常、魔術の基礎を理解するのに二年かかります。そこから実技を身につけるのに四年。実践まで習得するのはさらに三年の月日がかかります。魔術の新規開発にいたってはもう当人の才能によります。とても、旅人のあなたが直ぐに習得できるものではありません」
シリウスは歯噛みしながら唸った。この人に紅は魔術のイロハも知らないまま炎剣を飛ばしていると教えたらどんな反応をするだろうか。

「それに、魔力の生成の適齢期も過ぎてるみたいです。あなたに魔術は向いていません」

きっぱり断言され、シリウスは言い返すこともできなくなってしまった。

これからの戦い、今の戦力では守る事ができないかもしれない。シリウスはそのために魔術が必要だと考えた。紅の魔術もあり、バルジの魔術は強力だった。魔術は大きな戦力になる。

セシアはシリウスに背を向け、廊下のほうへ行ってしまった。

「魔術以外にも、力があります」

「えっ？」

シリウスが顔を上げたときには、既にセシアは廊下の角を曲がってしまった。

「ん……うう、……。あれっ、ここは？」

薬品のおいが漂う清潔感のあるベッドの中で、紅は目を覚ました。

第四十三話 歩みだすそれぞれの道

紅は身を起こし、辺りを見回す。

清潔なベッドに、棚に並ぶ薬品のビン。淡いグリーンのレースのカーテンに遮られて、部屋の奥は見えない。ベッドから這い出ようとして、上手く力が出ず、ベッドの上で転がってしまふ。

（えっと……ここはどこだろう。私は確か……）

まだぼんやりする頭をめぐらし、記憶をたどる。中央市街の街、地下基地でのシリウス。腕に刺さる注射針……。

「シリウスはどこなの……？」

「おや、目が覚めたのかい？」

レースのカーテンを腕で押しのけて、気のよさそうな青年が顔を出す。白衣を着ていることから、医者だろうと判断する。

「あの……ここはどこですか？」

「ここはクロスフォード魔術学院の医務室だよ。それで、シリウス君はたぶんもうすぐ帰ってくるんじゃないかな。ここまで君を運んできたのも彼だよ」

マグカップを片手に、何気なくあごを掻きながら言った。

紅は、中央市街で自警団の人たちにだまされた経験があるので、彼の言葉を鵜呑みにはできないが、助けてくれたのは本当のようだ。「おっと、まだ立とうとしちゃだめだよ。安静にしてなきゃね。もう体に毒はないと思うけど体力が消耗しているからね」

紅の肩をやりわり押しやってベッドに戻す。大人しくそれに従うが、気になった事があった。

「魔術学院なんですか、ここ」

「うん。そうだよ。大陸では珍しいからね」

紅はその言葉に少し心を躍らせた。魔術学校。それはつまり、紅の世界では漫画や映画の中の世界で、少しも憧れなかったといえ、

嘘になる。今は紅も魔術が使えるのだが、改めて学校と聞くと、やっぱりドキドキワクワクしてしまう。

目をキラキラさせているのが見えたのか、白衣の男は笑って、「じゃあ元気になったら院内を見て回るといいよ」という提案に、はにかみながら頷いた。

（魔術に替わる力か……）

シリウスは思案顔でクロスフォード学院内を歩いていった。どこへ向かうというわけではなく、気の向くままに足を向けていた。院内では、生徒達が難しい顔をしながら本をめくっていたり、楽しそうに談笑している姿があちこちで見られた。

歩き続けると、外に出た。どうやら中庭のようで、整えられた芝生に、円形の噴水があった。それを囲うように並んだベンチに、ゆっくりと腰を下ろす。

（もっと強くならないとダメだ……これ以上、誰かを傷つけてはいけない。俺が守らないと）

拳をじっと見つめ、思いにふける。

今すぐ王都へ行き、妹の無事を確かめたい。

しかし、今、シリウスが王都に飛び込むのは危険だ。それに、仲間を危険にさらすわけには行かない。

修行している時間も無い。すぐに、強くならなくてはいけないんだ。

だが、そう都合よく、強くなれない。

（この旅が始まってから、俺達はいろんな敵と戦ってきた）

中央市街のドレッドノート、山奥の大蛇、その前にもドレッドノートと戦い、ローアン・バザーでは……。

「そうか、それがあったか！」

シリウスは立ち上がり、拳を打ち鳴らす。その音にびっくりした生徒がこちらを見るが、シリウスは気にしない。シリウスの頭の中には一つの名案が浮かんでいた。

そんな彼の元に、マナが小走りで駆けつけた。

「どうかしたか？」

「目覚めたんです、紅さんが目を覚ましたんですっ」

その一言で、シリウスは弾かれたように駆け出した。

「紅っ、大丈夫か!？」

病室まで全速力で駆けつけたシリウスは息を切らし、ドアのふちにもたれながら部屋を覗きこんだ。

「あははっ、大丈夫だよ。ほら」

ベッドの上で身を起こし、シリウスに軽く手を振っているのは、紛れもない紅だった。一瞬、シリウスはじっと固まったが、その後は力が抜けたようにふらりと紅に近づいた。

そのままかぶさる様に紅に抱きついた。

「よかった……本当に」

「ちょ、ちょっとシリウスっ、重いってば」

顔まで真っ赤にしながら紅はシリウスに抱きつかれたまま、シリウスに囁く。

「ごめんね。私が無用心で、何もできなくて、シリウスに迷惑かけて……」

「バカ、お前のせいじゃない、俺が弱いのがいけなかったんだ」

シリウスは紅を放し、近くのイスに座る。

「さて、熱い抱擁はその辺にしといて。本題に入ろうじゃないか」
病室のカーテンを押しつけて、ニヤニヤ顔のダルクが現れた。

「おまえっ、いたのか、」

シリウスが思わずのけぞるが、ダルクは気にせず話を続ける。

「まず今後の動きに関してだが……」

「待ってくれ」

そのダルクの話す、シリウスは真剣な面持ちで遮った。

「その前に、紅に話しておかなくちゃいけない事がある」

ダルクは静かに話を止め、紅は改めてシリウスと向き合った。

「俺は、俺はシリウスじゃない。本当の名前は……、本当は、俺は、王都の王子だったんだ。王都で罪を犯して、投獄された王子、ヴァーリス・ミッシェル。それが、本当の名前だ。俺と一緒に旅をしていたら、これからどんな危険が待っているか分からない。だから、お前は……」

「知ってたよ。なんとなくだけど。でもね、私にとっては、元々この世界の住人じゃない私にとってはね、そんな事、どうでもいいんだよ。シリウスはシリウス。それ以外の誰でもない」

優しく語り掛けるように紅はシリウスに言った。シリウスの瞳が少し揺れたが、やがて安堵の笑みに変わった。

「そうだな、そうだったな。話を遮って悪い。続けよう」

「というわけで、今後の動きについて説明しよう。王都がどうやらきな臭い連中がいるということで、俺達の部隊が動くかもしれない。俺は先に王都に向かうぜ」

とダルク。

「俺は、橙国へ向かおうと思う。そこでどうにか修行して『気』を身につけようと思う」

シリウスの宣言に、一同は驚いた。

「橙国か……ちょうどどここと王都の間にある森林にある国だな。確かにあそこの武術や気は強いが、旅人に教えてくれるもんなのか？」
ダルクが顎をかきながら訝しげにきく。

「もちろん、そう簡単にはいかないだろうな。でも行って見る価値

はある。ただ、あんまり時間をかける気もない。三日だ。三日で修行を終える」

一刻も早く王都に行きたい気持ちだが、その気持ちを抑え、修行に三日だけ使う。しかし、その三日でどれだけ強くなる事ができるのかは未だわからない。

「じゃあ旅の再開は三日後？」

「そういうことになる、それまでには紅の体調もよくなるだろうし」「だったらその間に私も魔術について勉強したい！ せっかくの魔法学校なんだから、勉強しないと損だよ」

紅は楽しそうに目を輝かせていった。

「あつ、私も勉強してみたいです。もっと皆さんの役に立ちたいんです！」

マナも手を上げ、参加する。

「そういうことだな。イースはここに残って二人にもしものことがないように守ってくれ」

ダルクの指示に、嫌な顔せずコクリと頷く。

「そうと決まれば早速行動開始だな。集合は三日後、王都の正面門の前だ」

ダルクの号令に、全員が頷いた。

第四十三話 歩みだすそれぞれの道（後書き）

しばし、更新が滞っていて、申し訳ありません。

なるべく早めに書きたいですが、次の春ぐらいまでは私情であまり時間がないかもしれません。

もちろん頑張るので、これからも見てもらえると嬉しいです！

第四十四話 外の世界を夢見る小鳥

シリウス達がクロスフォード学院に辿り着く数日前、王都の城下町は賑わいを見せていた。それもそのはず、街中では『終戦二十周年記念式典』の準備の真っ最中だからだ。

この式典では、実際に大戦を経験した人も、そうでない新たな世代の人たちも同じように、心から楽しい気持ちで準備に臨んでいた。二十年間の復興で、大戦の傷跡も消え去り、新たな時代の幕開けであった。

あちらこちらで、忙しそうに人が駆け回り、飛び交う大声の中にも苦勞と楽しさをにじませている。おそらく当日にはパレードなどもあり、王都の外からも多くの人が訪れ、街中はお祭り騒ぎとなるのだろう。それはもう、無類の楽しさがあるのだろう。

ふと、本人も気づかないうちにため息がこぼれ、視線を窓の外の街並みから、膝の上に広げた本に写した。窓際に寄せたイスには、穏やかな夕日が差し込み、読んでいる物語を優しく彩る。

王都の中心にそびえる、グラン・アビイリア城の片隅、王都の大臣や家来の私室が並ぶ居住フロアの奥にある人気のない廊下にある一室。そこが彼女の部屋であり、すべてであった。

あの日以来、あの事件以来、彼女はずっと一人だった。

一応王家の人間という事で、まるで腫れ物を扱うかのように距離を置かれ、味方のいない寒々とした心境の中、今日までこの部屋で過ごしてきた。

部屋は無駄に広く、二人は寝るのではないかと思うベッド。一人しか居ないのに、二人がけのソファ。部屋の壁が見えなくなるほど敷き詰められた本棚には、お気に入りのノベルが収まっていた。その中でも好きなのが冒険ファンタジーだった。まるで、この狭苦

しい部屋から、無限に広がる大地へと冒険へいざなってくれるような、そんな気持ちにさせてくれる。でも、現実なんら変わりはない。そんな事に今更絶望などしないが。

まるで鳥籠の中に閉じ込められた小鳥みたいだ。

本来空を飛ぶための羽は切り落とされ、惨めに止まり木に貧弱な足でしがみ付いている小鳥。鑑賞用として、命をすり減らすだけの存在。しかし、今の自分は誰からも見られていない。それでは小鳥以下の存在だ。籠の隙間のような窓からは、城下町の人々が見える。だが、彼らはこちらに気づいたりもしない。

自分は小鳥であって、いや、それ以下の存在であって、捕らわれる姫君ではないのだ。

決して、白馬の王子も、無敵の冒険者も、さすらいの旅人も、一緒に過ごした家族でさえも、助けに来る事のない。ただの存在だった。

ノベルの中のお姫様はいつだって、主人公に助けをもらう。だが、自分には主人公が居ない。

このまま、この部屋で年を取り、時代は流れて、やがて死んでゆくのだろうか。

食事には困る事はない。いつも、決まった時間に、使用人のマリアが運んできてくれる。唯一の外の世界とのつながりであるマリアは気のよい女性で、たずねてくる時は必ず外の世界のニュースや雑談をしてくれる。ここにある本もすべて、彼女が持ってきてくれた。だが、彼女にも、ここから救い出す事はできない。もちろんその事で彼女をうらんだりもしない。

誰もうらんでなど居ない。

あの事件の誰も、うらんでいない。

その時、コンコンと、ドアをノックする音が聞こえた。

いつもマリアが来る時間よりも早い。だが、この数年間、マリア以外の人間が訪れた事などなかった。だから、何の疑いもなくドア

へ向かい、部屋から顔を出した。

「急な訪問失礼いたします」

そこには、純白にローブを身にまとった背の高い男性が立っていた。見知らぬ男だった。

「どなたでしょうか……？」

困惑して、ドアを閉めたくなる。

だが、男はそんな態度にも気を害することなく、話を続ける。

「私は騎士団長アルタイルと申します。実は、貴女に訪れて欲しい場所があります。私に、付いて来てくれますか？」

男は紳士的な笑みを浮かべて、手を差し伸べた。

これは、白馬の王子なのだろうか。それとも、悪の死神の化身なのだろうか。

しかし、今の彼女には、何でもよかったのかもしれない。この部屋から抜け出せるのなら、何でもよかったのかも知れない。

「では行きましょう。エリオーネ様」

アルタイルの導きで、エリオーネは廊下を歩く。数年ぶりに出た、部屋の外。

この道が、王都の地下奥深く、日の光の届かない闇の中へ続くということを、彼女はまだ知らない。

クロスフォード学院を出発したダルクとシリウスは途中まで同じ道を歩いていたが、それぞれの目的地は違う。ダルクはそのまま王都へ向かい、諜報部隊に一報を入れる。その間、シリウスは橙国へ行き、修行を行う。

今、シリウスは一人、橙国へと続く林道を進んでいた。人が通るように道が整えられていたが、手付かずの森林に囲まれたこの道は、

酷く荒んでいた。本当にこの先に国があるのか不安に思えてきた。まだ日が昇ったばかりだというのに、森林に囲まれた道は薄暗く、先もよく見えない。城のような建物すら見えず、人が住んでいる気配もない。

にわかに疑念が沸いてきた頃、シリウスの眼前にようやくそれらしきものが見えた。巨大な柵のような外壁が見えた。それは周りに溶け込むように木で作られていて、門番のような男が二人立っていた。

門番は、薄手の着物に三度笠をかぶっていて、腰にはカタナを挿していた。その一人がおもむろにシリウスに近づき、尋問をするように止めた。

「何者だ。何か用か」

短く必要な事だけを聞き、鋭い視線をシリウスに浴びせる。

「旅人なんだ、頼む、中に入れてくれ。もう食料も何もないんだ……」

とにかく、門の中に入れてもらわないことには修行も何もない。もしダメなら門を無理やり越えるしかなくなるが、出来れば合法的に入りたい。

しかし門番達は顔を見合わせ、答えた。

「何者だ。どこの国のものだ？」

「だから旅人だ、世界を歩き回ってる。国には住んでないんだ」

「怪しい者め。ダメだ、入れるわけには行かない」

独自の文化を持ち、閉ざされた国と聞いていたが、まさかここまですとは思わなかった。これでは中央市街以上の治安維持とも言える。その中央市街も裏では闇がうごめいていたわけだが。

ここで門前払いを喰らうわけには行かない。何とか食い下がるうとするが、門番達は顔色一つ変えない。

「頼む、これ以上進めないんだ、一泊だけでいいから」

「怪しい者の中に入れるわけには行かない。ここの道を引き返し北へ向かえ。王都グラン・アビイリアがある」

門番はそれきり、取り合おうともしない。シリウスは憮然として、ついに門を乗り越えようかと思ったが、口論を続ける三人の背後から、女性の声がかかった。

「何をしていますのですか？ 門を開けなさい」

シリウスが振り返り見れば、ちょうど紅と同じくらいの年齢の女が歩いてきた。着物を着て、長い黒髪を後ろで結び、腰にカタナを挿している所を見ると、橙国の人間のようにだ。

「ハッ、しかし、この者は入れるわけには……」

「何故です？ 旅人のようです、さぞ疲れているのでしょう。門前払いする必要はありません」

「しかし……」

言い訳を続ける大の男に、女は呆れたように言った。

「責任は私が負います。とにかく門を開けてください」

「……了解しました」

渋々門番達は動き始め、門の開放作業を始めた。それを尻目に、女は申し訳なさそうに視線を下げながらシリウスに歩み寄った。

「御免なさいね。少し国内で問題があつてね。ピリピリしてるの」

「あの、いいのか？ 俺を入れても」

「ええ、見た所武器も持ってないし、こんな森の奥まで歩いてきたんだもの。疲れてるのでしょう。私はアヤノ、何かあったら城に居るから訪ねてください」

「城って事は、王家とかの人間なのか？」

「姫の侍女なんです。今はちょっと使いとして外に出てましたが」
それきり、門をくぐった先で別れた。

アヤノは広い大通りを抜けて城に向かったようだ。この橙国は城を中心として碁盤の目のように道が張り巡らされている。城はちょうど門の外から見えないように低く平べったい形をしているが、それでも他の建物よりも大きく立派だ。三角のかわら張りの屋根も、石垣でできた一階部分も堅牢な印象を与える。

民家も木造でかわらの屋根と、シリウスは知る由もないが、紅が

見たら日本の江戸の街並みを思うかもしれない。それぐらいに似通った文化がここにはあった。

「さて、無事中に入ることが出来たし、まずは武器の調達か」

中央市街では手に入らなかったが、ここではカタナが手に入りそうだ。着物服の市民に訝しげな視線を浴びせられながらも、シリウスは物色するように街を歩き始めた。

碁盤の目状になっているので、隅から道を辿れば簡単に国全体を見てまわれる。しかし、小さい国といっても国土は一日で歩き通せるほどではない。早めに修行場所も見つけないといけない。いけない。

「アヤノに聞いておけばよかったか……」

今更ながら、手際の悪さを後悔した。仕方なしに道行く人や店の人などに話を聞いて、道場などの集まる区画が北西部にあると知った。その足で北西部の区画まで行ったが、シリウスは言葉を失った。

「誰も人がいないじゃないか……」

ゴーストタウンを思わせるほど、人気がなかった。それに加えて、道場も開いている気配がない。カタナ職人の店ですら、扉が締め切られて、商売をやっている雰囲気ではなかった。

しかし呆然と立ち尽くしている暇はない。

近くの道場の扉を開いて、勝手に中に入らせてもらった。

「誰かいませんか!？」

大声で呼んでみると、奥のほうから人が出てきた。いきなりの訪問に戸惑っているようだ。

「どなたでしょう」

「すみません、旅の者なんです。道場は開いていないんですか?」
シリウスの問いに、出てきた女性は静かにため息をついて、答えた。

「御免なさいね。今はもうどこの道場もカタナ鍛冶屋も閉まってる

と思うわ。最近国内で辻きりが横行してるのよ。元々武術は近年衰退気味だったのだけれど、そのせいでもう人が寄り付かなくなってるね」

「辻きりですか……」

そういえば、門番ともめていた時、アヤノも国内でピリピリしてるとか言っていた。

ともあれ、今の橙国で気の取得どころか、修行すら出来そうになり。落胆して肩を落としながら、道場を出ようとした時、女性の声が背にかかった。

「ああでも、城の中に仕えている武士様が新兵の指導をしているそうよ。辻きり対策と言っていたから……」

そこで、シリウスはアヤノが困ったらいつでも訪ねてよいと思っていたのを思い出す。単なるリップサービスみたいな物だろうが、ここまで来た以上、図々しくいかせてもらおう。

「ありがとうございます。城のほうへ行ってみます！」

シリウスは道場を飛び出して、城へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258m/>

紅蓮の天狼

2011年9月24日16時29分発行